



新宿発
323号

老いを考える

老いに向かう

ついに きた！

「後期高齢者」とやら——

近づく足音を聞きながら

高齢化社会に思う

老いを考える

「長寿は福」と結論したい

高齢期の母を翻弄した「世帯単位」の枠組み

先を行く女性たちと共に生きて

潤いある老いの道をゆく

81歳のパワー

有能で美しい老人でありつづけたい

森崎民子さんのご要望に応じて

各政党の〈高齢者対策〉政策

始まった 裁判員裁判の問題点

五十嵐二葉ゼミナール—『人を裁く』って 何？

時 評 「政権交代」雑感

詩 責 任

報 告 北朝鮮の法律家との出会い

異 議 『坂の上の雲』に異議あり

食の安全 水源林買収と遺伝子組み換え作物栽培の動向

窓 わだつみのこえを平和へつなぐ

新潟から 年金記録の齟齬——これも地震のせい？

沖縄から 基地問題への怒りが結実！ 総選挙で革新圧勝に！！

読書室 白井久也著『明治国家と日清戦争』

堀場清子編『高群逸枝の生涯——年譜と著作』

惜 別 弁護士 土屋公献さん

柳澤つや子

高木 栄子

浅野美和子

福田 光子

斎藤美栄子

松崎 早苗

森崎 民子

水田りゅう

井上日磨美

小池 寿哉

森田みどり

中村 道子

斎藤 千代

各 政 党

五十嵐 二葉

五十嵐 二葉

牧 梶郎

堀場 清子

笹本 潤

福田 和男

郡司 和男

渡辺 総子

押見 操子

浦島 悦子

我部 政男

河野 信子

内田 雅敏

〈正義〉がないことを嘆くのか！

春田 朋子

〈正義〉が無いことを嘆くのか！
それなら〈分裂〉を嘆こう

〈分裂〉を嘆くのか！
それなら〈裁く心〉を嘆こう

〈裁く心〉を嘆くのか！
それなら〈無理解〉を嘆こう

〈無理解〉を嘆くのか！
それなら〈愛の欠如〉を嘆こう

〈愛の欠如〉を嘆くのか！
それなら〈愛は〉どこからくるのか！

愛は……
愛は……

それなら自分を規定するすべて
他人を規定するすべて

そこにしがみつこうとする

〈己の弱さ〉を嘆こう

この哀しさを ことばに

服部 素

どうして、こんなにまで、言葉が貧しくなったのか。誘われる熱が感じられないのか。――為政者の造語「後期高齢者」への思いです。

言葉尻をあげつらうわけではなくて、「このことは、「障害者」と「handicapped」のニュアンスのちがい」と解釈しても、いつも気にかかっているものと同根だと言うからです。――「本気で問題と向き合って、手をつないで行こう」という熱意のない、お役所言葉。市民に追求されるまいと、差別用語にだけ留意したようなものを感じられませんか。

「高齢者問題」として、何かネガティブに片づけられる国と、むかしむかし、あるところの、老いが豊かに信頼の中心にあった知恵ある国と。――それは、老いの知恵だけではなくて、ハンディを抱えた子どもは、神さまが何かの伝言を託して遣わされた「宝子」として、部落のみんなで支えた（支えている）国との、「豊かさのちがい」を、私は思います。

「目に涙がなければ、魂に虹は見えない」（北米ミンカス族のことわざ）

この間、本を読んでいて見つけて、魅せられていることばです。

「高齢者問題」に結びつく言葉ではないのですけれど、今、私の中に底流していて、「こういう思いが共有できれば、涙をきらめかせて、虹の彼方に羽ばたけるのではないか」と、そんなことを夢見ています

（京都市在住）



323号 老いを考える 目次

詩	「正義」がないことを嘆くのか！	春田 朋子	
巻頭言	この哀しさをことばに	服部 素	1
老いを考える			
老いに向かう		柳澤つや子	4
ついにきたー		高木 栄子	8
「後期高齢者」とやら――		浅野美和子	9
近づく足音を聞きながら		福田 光子	13
高齢化社会に思う		斎藤美栄子	17
老いを考える		松崎 早苗	27
「長寿は福」と結論したい		森崎 民子	35
高齢期の母を翻弄した「世帯単位」の枠組み		水田りゅう	42
先を行く女性たちと共に生きて		井上日磨美	46
潤いある老いの道をゆく		小池 寿哉	47
八一歳のパワー		森田みどり	49
有能で美しい老人でありつつけたい		中村 道子	51
森崎民子さんのご要望に応えて		斎藤 千代	53

各政党の〈高齢者対策〉政策

連 載 日本共産党・社会民主党・民主党・自由民主党・公明党・国民新党（〈回答到着順〉）…… 59
裁判員制度を考える2 「始まった裁判員裁判の問題点」 …… 五十嵐 二葉 76

【五十嵐 二葉のゼミナール】 「人を裁く」って何？ …… 五十嵐 二葉 82

時 評 「政権交代」 雑感 …… 牧 梶郎 90

詩 責 任 …… 堀場 清子 100

報 告 北朝鮮の法律家との出会い …… 笹本 潤 108

異 議 明治は「栄光の時代」だったのか 司馬本『坂の上の雲』に異議あり …… 福田 和男 114

連 載 食の安全を考える2 水源林買収と遺伝子組み換え作物栽培の動向 …… 郡司 和男 120

窓 わだつみのこえを平和へつなぐ 戦没学生遺稿遺品展を開催して …… 渡辺 総子 126

新編から 年金記録の齟齬——これも地震のせい？ …… 押見 操子 129

沖縄から 基地問題への怒りが結実！ 総選挙で革新圧勝に!! …… 浦島 悦子 134

読書室 『明治国家と日清戦争』 白井久也著 …… 我部 政男 138

【高群逸枝の生涯——年譜と著作】 堀場清子編 …… 河野 信子 140

惜 別 弁護士十屋公献さん …… 内田 雅敏 143

TOPICS 女性の動き／活躍する女性へ ほか …… 146

会と催し 「今なぜ、松井やよりを語るのか」——ほか …… 161

あごらのあごら 裁判員候補者のクジに当たって——ほか …… 233

柳澤 つや子

テーマは、「当事者研究としての向老学のすすめ」で、基調講演は、設立時からの会員の、

上野千鶴子東京大学大学院教授が引き受けてくださった。参加者は、約八〇〇名。

私は、向老学会が終わって後、自分の状況を考えてみた。昨年、〈高齢者〉の仲間入りをした。そのうえ障害者であるため、医療保険では〈後期高齢者〉となっている。女性の平均寿命を生きたとすれば、余命は二〇年しかない。向老学会の会員になって一〇年。「私の老後は私が決める」と言っているものの、老いること、老後のことを、果たして当事者のこととして真剣に考えてきただろうかと自問してみた。

「老いることとは、衰えること、世話になること、無力な存在になること。」と、上野さんは基調講演で述べられた。このように考えると悲観的になるので、あえて直視を避けていたのかもしれない。

一、もし癌になったら痛みに耐えられるだろうか？ 耐えなければならぬ時は、ホスピスの緩和ケアがある。

二、認知症になったら？ 素直に「支えてほしい」とお願いする。

三、嚥下困難になったら？ 凍結含浸の食品により、軟らかく一つ一つ味がわかる食べ方もある。

四、寝たきりになったら？ 遠慮せず勇気を出して、〈介護されるプロ〉になる。

五、後遺症による麻痺は？ リハビリを続けて、できるだけ自立できるように、努力をする。

醜くなったとしても〈加齢の勲章〉と開き直る。

六、終の棲家はどこに？ 元気なうちに「在宅か施設か」を決める。ナーシングホームに、

ターミナルケアのあるところもある。

七、施設では、どのような介護を希望するか？ 事前指定書を書いておく。

八、財産管理は？ 成年後見人制度を利用する。できるだけ親族でなく、第三者になってもらう。

九、〈おひとりさま〉になっちゃった？ なる前に、〈人持ち、友持ち〉になれるようにする。

十、ケアプランに納得がいかなかったら？ 利用者の立場で親身に考えてくれる、ケアマネージャーを見つける。

まだまだ老いへの関心は浅いのであるが、常に情報を得られるように、実践できるように、努力することが重要と思う。いかなる場合になろうとも、「生まれてきてよかった、生きていてよかったと思える、また思ってもらえるような構築」が必要である。言うまでもなく、「人は生きているだけで尊い」のであるから。

来年、二〇一〇年十月十、十一日に、名古屋市において「NPO在宅ケアを考える診療所・市民ネットワーク第一六回全国の集いin名古屋2010」が開催される。実行委員には、医療や介護施設などにかかわっている人が多いが、そうでない、私のような市民もいる。

大会会長が医師ではなく、看護師（藤村淳子さん）であるのは、今回が初めてのこと。実行委員会はまだ三回目であるが、そこで私は多くのことを学んだ。

藤村さんは、「看護師の意見や要求を取り入れてくれる医師、つまり看護師と医師は互いに

尊重して対等の関係でありたい。」と、志を持って実践してきたという。患者のことは、実際、医師よりも看護師のほうがよく把握している場合が多いからだ。さらに藤村さんは、「患者やその家族などが、医師や看護師、ケアマネージャー、介護福祉士、ヘルパーなどの医療や介護に携わっている人たちへ、自身の希望や要求が遠慮なく言える、受け入れてもらえる関係にしたい」とも言う。

また高齢者の食に関しても、「人生を長く生きてきたお年寄りの楽しみと言えば、食べること。だから、食事は新鮮な安全な材料で、有能なコックさんに作ってもらっている。」と、藤村さんは強く言う。そして、「食の楽しみを实践するには、口腔ケアをする歯科衛生士が必要である」と。したがって、診療所だけでなく、訪問看護のときも、「口腔ケアは必ず必要である」と、歯科衛生士を同伴している。

食の楽しみだけでなく食の大切さをも強調するのは、「食べることは元気の素」だからである。特別養護老人ホームや介護施設では、次第に口腔ケアの必要性が広まってきて、歯科衛生士への治療相談が多くなってきた。

実行委員になって、「老いること」に正面から向き合って（受け入れて）、その人らしい個々人の尊厳を保ちつつ、主体的に生きられるように日々実践している人たちに出会うことができた。

体力や集中力、記憶力の衰えを感じる昨今である。老いることを積極的に考えていこうと思う。心底から「私の老後は私が決める。」と言えるようになるために。（日本向老学会事務局）

ついにきた！

高木 栄子

夫八六歳、妻七八歳。

教員定年後、八四歳まで、小規模美術館の館長を勤めた夫。

多くの人たちと交流を深め、名も知られ、己れの仕事一途の、馬車馬のような来し方でした。それが家に入るようになって一年目あたりから、怪しくなってきたのです。

物忘れなどは年齢ですから、気にもなりませんでしたが、体を動かすこともなくなり、机に向かうのみ。

これでは呆けてゆくことが目に見えておりました。

とは言え、傍らの言うことなど全く無視。当人にその気がない限り、どうにもなりません。今年に入ってから読書もままならず、徐々に正常さを失ってきました。脳裏に浮かぶのは過去の仕事のことのmiraしく、「アレはどうした、コレはどうなった」と、私の全く関知しないことも混じえて、心配事が、波が押し寄せるように襲ってくるようです。

穏やかだった人柄も変わってしまい、手に負えない時はショートステイ頼みです。

大合併をしていない町の、地域包括支援センターが頼みの綱です。

この制度の有り難さを、身をもって感謝しています。

(富山県上市町在住)

「後期高齢者」とやら――

浅野 美和子

今年三月半ば「後期高齢者医療被保険者証」が、私の許にやってきた。封筒の表には「長寿医療」（後期高齢者医療）とある。何と欺瞞的な表現！「赤紙」ならぬ「白紙」である。

保険証とともに、いろいろな説明書が付随している。それによると、私の保険料額は、年額四〇〇〇円、これは、私の年金収入が七九万円以下、つまり国民保険の最低額から計算されたものである。私の場合は、元手が少ないので保険料もそれほどではないが、年金収入二五〇万円の人は一二万二、二〇〇円、五〇〇万円の人は二七万三、一〇〇円を拠出することになる（愛知県の場合）。

「後期高齢者健康保険」ほど、言葉も実際も、評判の悪いものはない。昨年のクラス会でも、さんざんで、保守・革新、どの党の支持者に関わらず、「高齢であることは認めるが、『後期』とは何事だ！」と憤慨する。または、「後期だとさ」と、自嘲気味に言うか、どちらかである。それは、「あなたは、もうじきこの世とおさらばだよ」と政府が決めつける失礼から来るものだ。健康保険の分類上の一般的用語だとしても、それが個人に送られてくる以上、個人を決めつけることになる。後期であるかないかは個人差があり、死後にしか判らないではないか。

現実には、失礼どころの騒ぎではない。七五歳を過ぎれば、誰しも、身体がどこか不調になる。今まで医者知らずと言うほどの健康体でも、衰えは、いかんともしがたいだろう。この世代の人びとは、例外なく戦争の惨禍を経験し、その後、必死になって生活を立ててきている。中には、身体が不調でも医者にかかるチャンスがなかった人もいるだろう。それでも、老後のことを考えて、長期間保険料を払って来た——というより、否応なしに払わされて来た。「仕事から解放された今こそ、その果実を手にして、費用を気にせず病気を治療する権利があるはず。それが保険というものの概念だ」と、誰しも思っている。

それなのに、政府は今になって、「医療費が多いから、後期高齢者は、一般とは別に、保険料を支払え」という。こんな差別があるだろうか。日本は年寄りを大切にする国ではなかったのか。いま衆議院選挙中だが、「世界中で、こんな国はない」と、革新系候補が述べている。医療費が財政を圧迫するというが、「GDPの八パーセントは、先進国の中では低いほうだ」と聞く。「若者の人口減少」が理由にされている。経済的理由で子供をもてない人びとが多く、適正な人口を保てないことそれ自体が社会の大問題である。楽しんで子供を産み育てることができず、安らかな老後を迎えることができる。それには失業者と超低賃金、不安定雇用をなくし、福祉、医療、教育、文化に力をいれ、軍事費を削減し、大企業優遇税制や無駄づかいをなくす。そして、一般予算から、高齢者の医療に、もつとまわす。そんな政府や社会システムができれば、〈高齢者差別の健康保険制度〉は、必要がないだろう。

最初に挙げた説明書によると、後期高齢者保険から拠出される医療費は、後期高齢者医療費

の一割だというから、その一割分だけ、公費負担を増やせばよいのである。

「長寿医療制度は『支え合い』の仕組みです」と、政府のホームページは言うが、弱い者だけで支え合えば、倒れるにきまっている。それに、「後期」だけを途中から別にするのは、保険の概念に反する。

私自身に関しては、生来虚弱のうえ、老化により、いつそう多病となり、診察券で財布を膨らませての医者廻りに忙しく、多額の医療費を使っているの、ひそかに肩身が狭くもある。

医療を受けると、その費用の一割を、窓口で払う。二月には白内障の手術を受けて、かなり医療費を払ったが、後に高額医療費の一部を還付された。

しかし、窓口払いが三割の人もある。それは、説明書によると、「現役並みの所得のある方」で、「市町村民税の課税所得額が一四五万円以上ある被保険者がいる世帯の方」だという。

つまり家族に一四五万円の課税所得があれば、三割を払わねばならない。これは「後期高齢者」を家族に依存させる思想である。

例外として三項目挙がっているが、どれも「後期高齢者」が家族に依存しにくい場合である。家族は互いに扶養の義務があるが、保険は個人単位にかけているのであって、実際に家族の世話になるかどうかは、別の問題ではなからうか。家族の助けを加えて「現役並みの収入」と言ったり、扶養をアテにする保険制度とは、おかしいものである。

年金収入二五〇万円の人は、「保険料十一万二二〇〇円を払ったうえに、窓口で三割払う」としたら、「ずいぶんきびしい」と言わねばならない。「老人が窓口で金を払う先進国はない」と、ある

政党の候補者という。私としては、保険料は安いし、一割程度は支払ったほうが、気が楽である。ところで民主党政権が発足することになり、「後期高齢者医療制度を廃止するマニフェスト」が実施される。引き替えに、扶養控除・配偶者控除が廃止されるという。扶養控除の廃止の代わりに、「子ども手当」が支給されるし、配偶者控除の廃止は、「専業主婦を優遇しない」という「女性の自立に向かう方向性」をもつものであり、歓迎したい。

老人は、社会の智恵の資源であり、大切にされるべきである。

「ポツクリ死にたい」などと言わず、それぞれの人が、寿命を最大限に延ばして、生きたいように生ききる。

まだ働きたい人には職場を用意し、介護が必要になったら社会的な介護を受ける、そのことが社会の労働需要を作り出す。つまり、老人を大切にすれば、社会が豊かになる。

いま失業者が溢れているのに介護職を希望する人が少ないのは、あまりに給料が安いからだ。介護に惜しみなく公的予算を使うならば、介護職希望者は、うんと増えるだろう。その結果、内需拡大となり、経済効果も大きい。健康保険のパイも増えるのだ。

それにしても、保険証が持てなかったり、取り上げられたり、治療を我慢したり、という例をニュースで知ると、胸が痛む。一定水準以下の収入の人は、老若に関わりなく無料で治療ができるように願っている。病気の予防を奨励し、無料で検査や健康指導ができるシステムを作れば、結果的に医療費は減るのではないだろうか。

（女性史研究者／愛知県一宮市在住）

近づくと足音を聞きながら

福田 光子

「葉いらず、医者いらず」の日常を、当たり前として暮らしてきたある日、自分に手がかかることに気付く。「何の前ぶれもなくしのび寄るもの」に、無頓着だったのだ。

今、深い黄昏の中にいる私は、緑内障の末期。視界は常に迫る夕闇に似ている。眼の寿命が尽きる時と、命の終わる日がピタリ一致すればよいが、眼の寿命が尽きたあとに命が永らえたら、そこには深い闇が待ち構えている。

「視神経の衰弱による視野狭窄」は、「視界に入らない足もと」が危ない。

視神経の疲れは、体全体の疲労につながっていく。眼を閉じている時が、体も心も最も和む。「瞑想こそ摂理にかなった時空の一体感」と思いつつ、いつしか睡魔の虜になっている。

老いとは、斯くの如きか。

視力、気力、体力が減退していくのは、すべてマイナスを指向し、老いは、その原因であり、また結果となる。

脳科学者は、「脳の活性化には、何かにチャレンジし、好きなこと、楽しいことをしなさい。」と勧める。確かに放っておいたら坂道を転げていくばかり。老いの抵抗があるうちは、青信号か。

減退していく対極には、皮肉なことに増えるものがある。

血圧、血糖値、コレステロール、それに物忘れや失くしも。究極には、増え続ける医療費。

*

「医療費」、「後期高齢者」。二つのキーワードが、日本の将来に暗雲をたなびかせている、と言われている。この国ばかりではなく、アメリカでも、オバマ政権は、命運をかけて医療制度改革に取り組んでいるし、EUも、この問題についての苦悩は深い、と言われる。

思えば、医療の充実、医薬品の開発、生活環境改善、栄養管理、そのすべての目的は、今日の健康寿命、つまり「達者で長生き」の社会を築き上げることにあったと思われる。

最近の、ある新聞の経済記事に、私の眼が止まった。

「医療費増、経済にプラス」

——健康寿命に価値——

この記事の中で「先進国が経験している医療費の伸びは、経済学的に見て是か非か。最近の研究では、『大筋では是』、という回答が出ている。医療費が増加しても、医療による健康寿命（介護の必要なく元気に日常生活ができる期間）が伸びれば、その経済的価値は医療費増を上回るし、生活水準も改善される」との主旨が述べられ、一九七〇年代以降、最近までのハーバード大学の研究や、日本でも行われた内閣府や大学の協力による研究が紹介されていて、「医療費増の約四倍から十倍の経済価値の増加があった」と報告されている。

たしかに女性の平均寿命は八〇台半ばに達し、一九四〇年の平均寿命、四九歳六か月から、三〇年以上も伸びている。

今年の九月、私の手もとにクラス会の通知が届いた。はるか昔、旧制高等女学校卒業。当時約百人卒業のクラスメイトは、いま八一名生存。その数が年齢と同じであることを面白がらせた。毎年恒例のクラス会は、郷里の温泉。昔の湯治場は様変わりして、ホテルの白いビルが並ぶ。参加する者は、「達者で長生き組」の元氣印。達者で再会をよろこび、並んだお膳の賑やかな料理に箸を運ぶ。

土・日を避けた日のツアーの客は、老人会、クラス会、趣味の会、すべて「達者で長生き」の人びと。ひっそりのカップルも、老夫妻とみた。

売店も賑わっていた。温泉せんべいに、ご当地まんじゅう。隣近所への何軒分かは、みな、貰ったおみやげのお返し。「健康寿命」の経済価値に、妙な納得をしてしまった。

年を重ねた人の旅は、今に始まったことではない。古くは、伊勢まいり、巡礼、先祖供養、家内安全の祈りの旅であった。

*

人の老いも、また公平ではない。それぞれの個人差、社会格差も影を曳く。
生涯現役の人もいれば、長い年月、病床で過ごす人もいる。

四年前に、私は、つれあいと死別した。彼の晩年は、吹き荒れる嵐の中で送った日々でもあった。

故あって降りかかった社会的制裁の中で、次第に脳はこわれてゆく。いつの間にか、痛にもおかされ、手遅れのため、施すすべもなく、「余命半年」の宣告どおり、療養生活六か月の後、他界した。

何ひとつ恨む言葉を口にせず、苦しみも痛みも訴えることなく、驚くほど静かな最期を迎えた。

はからずも、死の十日前が八五歳の誕生日。病棟の看護師さんたちから贈られた色紙の寄せ書きに、私は胸を打たれた。

ひとりの患者としての深いつしみと人間の矜持を、みんなが認めてくれた言葉が伝わっていた。この一枚の色紙は、彼の最期の六か月の生きざまの証となった。

願わくば　わがおくつきに

植え給え　梨の樹幾株

春はその　白き花咲き

秋はその　甘き実みのる

その下に眠れる人の

いのちを問うな

いま、秋果を食みながら、この詩を時折私は口ずさむ。

(福岡市在住)

高齢化社会に思う

斎藤 美栄子

〈母が亡くなった〉

この夏、母が足の骨折で入院中、腸閉塞で亡くなった。

昨夏、私のたったひとりの弟が、心筋梗塞で亡くなっている。

私の子供時代の家族は、誰も居なくなつた。

〈いずれは訪れる時〉は、来てしまった。

仲の良い家族だった。

人が驚くほど仲良し姉弟だった。

こんなに急に、と神を恨んだ。

だが、少し落ち着いた今では、感謝の気持ちも芽生えてきている。両親は、九〇歳になるまで、私を導き続けてくれたのだし、誇りに思える弟と一緒に成長することができたのだから、と……。世の中には、これほどには恵まれない大人や子供がたくさん居ることを忘れないで、これからの人生を生きていかねば……。

今、そんなことを考えている。

〈高齢の生き方〉

両親のおかげで、私も、「どう老い、生きればよいか」知ることができた。

1 規則正しい毎日

起床時間は、いつも同じ。

両親とも、髪をとかし、化粧し、毎日、色のコーディネートをした服に着替え、父は新聞を取りに行き、母は食事の用意……。

それからヘルパーさんをお願いすることを箇条書き……。

昼食。

三時のコーヒータイム。

毎晩入浴。

夜は、それぞれ、日記。

目が悪くなり、字が曲がったり、フェルトペンを使ったりしていたが、きちんとした毎日だった。

2 自分のことは自分で。

外出から帰ると、父は、すぐに着替え、背広をハンガーに吊るし、洋服ダンスにかけていた。足がおぼつかなくなつて、よろよろしながらも。

母は、脳梗塞を患って左手が使いにくくなっても、りんごを押さえる道具を購入し、右手だけで剥くなど、自分でする努力を怠らなかつた。

3 前向き

りんごのことでもわかるように、決してあきらめず、いつも明るく前向きな母だった。

六〇歳の頃、リウマチを患い、近年、黄斑変性症で片目失明したほか、この十年ほどで十回も入院している。脳梗塞、大腸がん、その手術後の癒着による腸閉塞、蜂窩織炎、ヘルペス、大腿骨折、肺炎、腎盂炎、右足骨折……。そのつど、医者も驚く回復力というか、精神力というか、人一倍早く歩き出し、リハビリに精を出した。毎日のように訪れてくれる人びとや、大好きなお花に囲まれ、孫やひ孫の写真を飾ったりして、入院を楽しんでいるかのようだった。

4 頼み上手

高齢になると、どんなに頑張っても、自分だけではできないことも増える。そんな両親を、実に多くの人が助けてくださった。

それは長い時間かけて意図せず両親が築き上げてきた、人づきあいの結果だった。

親族や近隣の人、ヘルパーさんが助けただけではない。少々値段が高くても、近所から買うように心がけていた結果か、いつしか、電話ひとつで、誰もが、すぐに来てくれるようになっていた。大工さん、電気屋さんは言うに及ばず、お花でも、お酒、牛乳、下着、何でもすぐ届

けていたので、周りの人が驚くほどだった。母が最後の入院中、車椅子で外出するにあたって、いつもお願いしていた美容院に、「だめもと」で伺ってみたところ、病院まで出かけてくださるという。母は、病室で髪をセットしていただいて、大いに満足し、翌日外出して、大勢の親族友人らと会食して楽しく過ごし、その数日後に、永久に旅立った。「セットのお支払いがまだだから、忘れぬこと」と、病院での日記帳に記されていた。

5 ありがとう

頼みごとが上手なだけではない。二人とも、人の話を聞くのが、とても上手だった。

親身になって喜び、悲しみ、力づけていた。また、いつも感謝し、「ありがとう」と言っていた。来客が帰られる時、父は決まって「おみやげは？」と、母をうながし、母は、何かしらお渡しして、お運びいただいたことに、感謝の意を表していた。買い置きの靴下だったり、到来物の一房の葡萄だったり……。

入院中の父は、看護婦さんに何かしてもらうたびに、にっこりして「ありがとう」と言っており、「その笑顔が素敵」と喜ばれていた。ほとんど意識がないように見えたとときでさえ、医者のお診が終わると、右手首から先を上げて挨拶し、医者は、「おお」と驚きの声を上げ、「おだいじに」と応じていた。

母も、不平、文句を言わない人だった。ヘルパーさんに対しても、その人の得意なことを、お願いして、感謝していた。

入院中は、看護婦さん十人以上の名前とその特徴をノートに書いて覚え、名前で呼びかけて一人一人との会話を楽しんでいた。母は、「看護婦さんがどんどん優しくなる」と言っていたが、看護婦さんは、「お母さんのお部屋に行くのが楽しみ」と言っていた。

父の晩年に、孫が聞いたことがある。「おじいちゃん一番幸せだったのはいつ?」

父は答えてこういった。「今だよ。今が一番幸せだよ」

母も、常々言っていた。「私みたいに幸せな人はいないよ。いつ死んでも、思い残すことないよ」と。本人たちは意識しなかっただろうが、後に残されるものにとって、悲しみをやわらげてくれる言葉であった。

〈老々介護の仲間たち〉

母を亡くして数か月後、学生時代の仲間六人、ランチを共にした。自分たちも、今年、高齢者の仲間入りしたところだ。

「美栄子さん、このたびは、大変だったわね。お母様、まだしっかりしてらしたのに、惜しかったわ。でもお幸せな一生だったわよね。」

「そうね。子や、孫に囲まれて、ひ孫もそばにいて。私がほとんど泊り込んでいたし。それでも住まいは別にあるので、介護サービスも受けられて、昼間、私は出かけられたし……」。

以前は、障害のあるお年寄りには、同居家族の有無にかかわらずこのサービスを受けられたけれど、システムが変わって、たとえ働く男性でも、同居家族がいないと、このサービスは受けられ

なくなつたのよ。家族がいても介護サービスは受けられるようなシステムにしてもらわなくては、家族の平和は保たれないわ。いま私は、名義変更など、雑多な手続きに忙殺されている。後の仕事も大変よ。」

*

私へのお悔やみが一通り終わると、「ねえ、聞いて、大変なの。母が急に完全にぼけちゃった」独身で国の内外でバリバリ仕事していたIさんが、みんなに訴えた。

父親があまりにワンマンで、そのストレスもあつて、母がぼけそう、と前々から言っていた人。「施設入居に五〇〇万、月々二五万。」

「五〇〇万くらいなら、まあ、妥当かしらね。家を売ったりして、大金出して入居したのに、そこがつぶれたり、仲間とうまくいかなかったり、大病院の近くがいいから、という理由だったり、出てきてしまう人もいるから、あまり高いと危険よね」。

——でも、彼女ほどのお金は出せない人のほうが多いだろう。もつと安くて、しかも快適なところに、いつでも入れるような用意を、国がしてくれるとよいのだが。

「で、あんなに母のこといじめていた父が泣くのよ。でも施設に一緒に入るのはいやだって。だから、私、また車買うことにしたの。母のところへ行くだけでなく、毎日、父の夕食も作りに行くから。でも父と一緒に住む気はないの。」

分厚い翻訳書を出したりしたIさんには、守るべき自分の世界があるのだ。

「父は、家事は何もやらないけど、どこも悪くはないのよ。だから介護サービスは受けられ

ないの」

どこも悪くなくても、後期高齢者のところには、国のサービスが必要だ。彼女の場合、遠くに住む妹さんが、週一回は、手伝いに来てくれるという。

「わたしの母も、ほけちゃって、施設にいるけど、歩いて行けるほど近いから助かるわ。でもね、私、一人っ子で、何かあっても相談する人がいないのが、つらいわ。母の兄弟も、みな高齢だし、夫にも自分の母のことであれこれ言うはいやだから、結局、自分で悩んで一人で決めちゃう。」
そんな彼女も、母上が施設におられるお陰で、最近、囲碁の国際試合でオランダへ行くことができた。

「うちも大変なのよ。母が骨折で入院中、私、毎日、二食分作って、病院に運んだの。『病院の食事は、いや』って言うから」と言ったのは、普段から隣に住む母上の面倒を見ている優しいTさん。

「でもね、父が亡くなったとき、長姉が、『何も面倒見なかったことが心残り』って、いつも言ってたから、『今しかお母さまを見られないわよ。もっとしたら体力的に無理になるから』って言ったの。

姉も、もう七〇歳だから。母が退院した今、一か月という約束で、泊り込みで面倒見てるわ。期限付きだから、楽しそうにやってる。その後は、二番目の姉にも、もっと来てもらおうと思ってる。

「それがいいわ、あなたは永久に末っ子なんだから」

「それにしても、入院したりすると、百万とか、すぐなくなるわね。親のお金だからと思つて個室に入れてたけど、百歳過ぎる人が増えたと聞くと、財布の口を閉めなくては……」

「私の父は、母が亡くなつた後、再婚したけど、その義母の面倒をどの程度見ようか、考えちゃつてる。私たちあまりお付き合いもなかったんだけれど、年とつて一人でいるのほつとくわけにもいかないし……」

「でもお父様の財産、半分行つてゐるでしょ。それで施設に入つていただいたら？」

義母のことで悩んでいるCさんも、心優しいから、きっと最後は、手厚く、面倒を見ることが出来る。

結局、六人のうち、親のことで、今、問題を持っていないのは、Nさんだけ。その彼女も、県外の施設の母上を、フルタイムの仕事の間を縫つて、亡くなるまで、せつせと見舞つていた。

〈高齢化社会に対応するには〉

収穫時であるべき〈秋〉なのに、〈人生の秋〉を迎えた日本人は、冬の到来を前に立ちすくむ。人生の最終日は明日かもしれないし、四〇年後かもしれない……。

病氣、痴呆、何が起ころのだろう。

老人たちは、いつどこで、誰と、どのように暮らせばよいのだろう。

その費用は、自前で足りるのだろうか？

まじめに働き、節約、貯金し、保険に入り、養老年金を準備し、それを使うことなく早死に

するかもしれない。たくさん残ったら、なんとむなしいこと。

同様に、貯めこんで、めでたく長生きしても、長生きしすぎて足りなくなったり、入院費や、介護費だけで終わってしまったら、それも悲しい。老後の余剰金は、「ご苦労様の御褒美」として、楽しいことに使いたいし、使ってもらいたいものだ。

いくら蓄えればいいのか見当もつかず、消費意欲もわかず、財布の紐は硬くなるばかりでは、経済社会も回らないだろう。

どうすればいい？

「定年後の費用は、必要に応じてすべて国が見てくれる。」となれば、安心だ。いや、そうすべきだ。《高齢者介護保険料》を徴収するなど、もつてのほか。

さすがに、これはなくなりそう。だが、介護サービスの時間も、どんどん削減されてきていて、ヘルパーさんの話を聞くと、悲惨な家族が多すぎる。ヘルパーさん自身の生活保障も、悲惨な現状だ。

個々の家庭にヘルパーさんを派遣するのが無理なら、老人ホームでまとめてお世話するほうがいいのか。

施設づくりに熱心だったデンマークでは、「やはり、家庭がいい」という風潮が強まったと、日本の状況を視察に来ていた関係者が言った。お年寄りの性格にも、施設のありようにも、よるだろう。日本ではカーテン一枚の仕切りだったり、あまりに狭すぎることも多い現状だ。

ホームか、家庭か、その両方か、——自由に選んだり変更できる状態が望ましい。

いずれにしても、〈民間や家庭に丸投げ〉というのは困る。政府が、まずは低所得高齢者の生活保障を。そして、そうでない人の老後の保障もしっかりしてくれれば、国民は、「保険だ、投資信託だ」と、ない知恵絞って、お金を預けなくてすむようになる。その分、税金に廻してもいいかもしれない。ヨーロッパの、いくつかの国のように。——素人の私が考えてわかることではないし、それを考えるために、政治家やプロがいるはず。対策をしつかりやつてもらいたいものだ。

国を代表する政党が変わって、私たちは変化を期待している。

政治家は他の政党の批判をしたり、失敗を待つのではなく、目的に向かって、もっと協力し合えないものだろうか。政党のためではなく、国民のための政治であることを忘れないでほしい。超党派で対処すべき事がらが、たくさんあると思う。

〈エピローグ〉

より良い高齢化社会をつくるためには、政治から目を離さないことが肝要なようだ。

と同時に、個人レベルでは、ささいなことでも、今日に感謝、明日に希望を持って、自分の老後の準備をするとともに、周囲の、もっと高齢の人に対して、一人一人が暖かく注意深い目を向けていかねばならない。老後の幸せは、お金だけの問題ではないのだから。

宮沢賢治の「雨にも負けず……」の詩を口ずさんだりして。（専門学校教授・東京都港区在住）

老いを考える

松崎 早苗

私は松崎早苗、六八歳です。「あこら」3・2・2号で「あこらメイト」として、斎藤千代さんのインタビューを受けたときは、夫（六九歳）を亡くして半年も経っていなかったでしょうか。私の母は五二歳で脳溢血で死に、父は九〇歳直前に、ぼっくり、死にました。

夫の母は五七歳のとき白血病で死に、父は先の戦争のとき、本土爆撃を受けて死にました。三〇代前半だったでしょう。私の父の老衰以外は「悔やまれる死だった」と言えると思います。身近な死は、こんなところですが、老いについて格段の思いはありません。

私の母の兄弟は九人ですが、八〇歳を越えると、上から順に二人亡くなりましたが、同じころ、下からも、現代の縮図のような死が、二人ありました。上と下は二〇歳も離れていますから、若い人の平均余命を暗示しているような気がします。

私の夫は「余命三か月のガン宣告」を受けたあと、自宅で元気に静養していたところ、十二指腸あたりの腫瘍が破裂したらしく、急に苦しくなり、往診の医者から点滴を受けさせようとしてからだを移動させていた私の腕の中で、息が途絶えてしまいました。宣告から、正に三か月でした。

この話を斎藤さんにしたところ、盛んに「それは何てお幸せだったことでしょう」と繰り返されたのです。斎藤さんもご主人をガンで亡くされたそうですが、「医療を受けた結果としての最期が、とても苦しそうだったから」とおっしゃるのです。夫を亡くして「幸せ」などという言葉を書いて、少しひっかかるころはありましたが、実は、通夜に来てくれた友人も、ご主人を二か月前に肺がんで亡くされていて、「こんな時にごめんなさい。でも、とても幸せな最期だったのね。」と言われたのです。その後、帯津さんの『達者でポックリ』（東洋経済新報社）を読んだら、私の夫は帯津先生の言う〈満点の死に方〉だった、ということがわかりました。

少なくとも死の一週間前までは、「自分がしなければならぬ」と使命感を持っていたことのために時間を使っていました。そこから少しずつ体力が落ちてきて「今日は何もしなかったなあ、何もしなかったのは初めてだなあ。」と一日を振り返る日が来て、ついに突然の大失血となつて、一日半で逝ってしまったのでした。帯津先生は、「死ぬには、エネルギーが要る。それを〈医療〉と称して、すっかりエネルギーの無い状態まで持っていけると、死ぬにも死ねない。」と書いておられます。

さて、「老いを考える」という特集に何か書かないかと、斎藤さんから誘われましたので、私は帯津先生の言われるように、「達者で死ぬにはどうすればよいか」を書こうと思います。

誰でも必ず死ぬわけですし、死は、決して怖がるようなものではないはず。もちろん、「残念ーもう少しこの世でやりたいことがあったのに。」ということとは、あります。

しかし、「生きている人と、死んだ人とは、どのようにつながっているか」を考えれば、むやみと死を恐れる必要はありません。

チベット仏教の『死者の書』や、日本の密教でも、「死後の世界」を教えていますし、「死後の世界」を体験して生き返った人たちの書籍も、多くあります。

戦乱や病氣、事故などの〈無念の死〉が、たくさんあって、その場合には、これらの書物が説く〈穏やかな死のプロセス〉が適合しないのでは、と考えたくなりますが、実は、どのような死であれ、死のプロセスは穏やかなものらしいです。ですから、死を恐れることなく、まずは最期の最期まで、健康を維持することについて考えてみましょう。

私は『私と整体法』という本を出しています（七つの森書館）。『整体』という言葉そのものを考案したのは、野口晴哉氏であると聞いています。十五歳から上野に道場を開いて整体法で病氣を治し、『月刊・全生』という通信を出していたそうです。晴哉氏は亡くなってすでに三〇年が経っていますが、この通信は、現在でも（社）整体協会の月刊誌として続いています。

晴哉氏は、あるときから病氣の治療をやめ、「活元運動」を広めることにしました。

「活元運動」は、「人間のからだは、治るようになっていく。治るような動きが自ずから出るのである。」という彼の観察から始まりました。そこで、人間が本来持っている自分のからだを治す方法の導入法を考案して、皆にやらせるようにし、特に、家庭の中で、母、娘、孫と伝わるように工夫しました。現在では、その孫が子どもを持つ年齢になってきているようです。

子どもを身ごもり、産み、育て、そして、親も元氣に生きて、元氣に死ぬことを実践している人たちが、(社)整体協会には多くいます。

「元氣に死ぬ」とは、「元氣に生きていれば、死ぬ四日ぐらい前に自分が死ぬことがわかる」というのです。ご本人も、彼より三〇年も長生きした奥様も、「もうそろそろかな」と死を予感しながら、最後の最後までやるべき仕事をして、逝かれたそうです。ですから、「元氣に生きること」が基本です。

「活元運動」では、「からだは治るようにできている」とひたすら信じて、とにかく運を天に任せる気持ちでぼんやりすることが肝要です。そうすれば、治りたいという気持ちで天に届いてかどうか知りませんが、からだは自然に動き出します。じつは、あくびやくしゃみも、活元運動の一形態です。意識しないで、からだは動いてしまったのです。ですから、筋肉は「意識で動かそうと思わなければ、動くはずがない」というのは誤解なのです。「どんな動きが出るかは、出てからのお楽しみ」、ということになります。

あくびでも、くしゃみでも、出始めたら、できるだけ長くそのまま続けさせます。そうすると、「もう満足した」という風に一つの動きが収束に向かいます。そこで、止めようと意識すれば簡単に止まります。そのとき、「動く前と終わったあとで何が変わったかな」と自分を観察することが大切です。不快だった、重苦しかったところが取れ、からだは軽くなります。つまり、「筋肉に力が出た」あるいは、「からだ全体に力が出た」と感じます。間違いなくそうなります。

一日の終わりに、始まりに、また、何か違和感を覚えたときに活元運動をすれば、元氣に(軽

やかに」生きられます。

私の本では、「実際に活元運動が出てくると、どんなに良いことが起きたか」を書いていきます。

「元気に生きる」とは、どういうことでしょうか？

動物、身近なところで言えば、まだ野生の残っているネコを観察するのが、よいでしょう。冬なら日向でゆっくり寝そべって、手足を思い切り伸ばしたりします。食べたいものを食べ、嫌なことはせず、病気になるれば飲まず喰わずで、じっとしている。治ればまた元通り気ままに生きる。死期を悟れば、どこか家人の見えないところへ行ってしまう。それだけです。

もう一冊の本、安保徹著『安保流ピンピンコロリ術』（五月書房）があります。

いつだったか忘れましたが、箱根に行くために小田急ロマンスカーに乗って、何げなく窓の外をみていると、「ピンピンコロリ」という大看板が見えました。何かと思って振り返ると、医院の広告でした。はじめて見たので、「何てあからさまな広告だろう」と、びっくりしましたが、今では結構多くの人が使っているようです。

免疫学基礎研究者の安保徹さんは、『免疫革命』という本でデビューしました。最初は異端の免疫学者と扱われましたが、一般市民、とくにガン患者には、絶大な人気があります。

半年前ほどに、近くの市民ホールで行われた講演会は、三〇分前から長蛇の列で、大ホールがあふれ、小ホールのスクリーンでも放映したほどです。

安保流免疫学に従えば、「健康すなわち免疫力の向上は、交感神経と副交感神経のバランスの原理をよく理解することが基本で、『何が交感神経を刺激するか』、『何が副交感神経を立ち上げらせるか』を理解して、自然の摂理に逆らわない生活、食事をしなさい」ということです。簡単ですが、現代人は「簡単なことを信じない傾向」があるのが問題です。

私も、最初は活元運動が信じられませんでした。しかし、「現実を起こっていることだから、自分にも起こらないはずはない」と思ったら、活元運動が出てきたのです。

ごく簡単なことですが、息を吸うとき交感神経が働き、息を吐くときは副交感神経が働きます。現代社会では、交感神経が立ちっぱなしという場面が多いので、吐く息を長くすると、バランスがとれるわけです。「睡眠に入るとき吐く息を長くすると、五回もやらないうちに眠ってしまう」と、安保先生は言っています。ようです。苦労なく眠りに入れる人は「医者知らず」ではないでしょうか。「医者知らず」ならば、現在、来る日も来る日も議論されているような、「医療(費)問題」は、無関係でしょう。

ただし、環境汚染からくるストレスが交感神経を常に立たせているので、環境問題に無関心でいることはできません。社会的ストレスだけでなく、進化過程で経験してこなかった化学物質、電磁場などが、大きな要素です。それを知らずして交感神経・副交感神経のバランスを実現することはできません。その意味で、環境問題に取り組むことは、自分の身を守る生き方です。

また、「生物進化の歴史を科学的にみると、私たちの体は、最初、(受精卵から胎児になり、

誕生して急激に大きくなる時期)は、「細胞分裂」を支えるエネルギーを作らなければならないが、成人から老人になれば、細胞分裂は低下して、「運動、体力維持」型のエネルギーになってくるから、それにしたがって、食べ物を変化させなければならない」と、安保先生は説いています。

この二種類のエネルギーを作り出す仕組みが、複合されて細胞の中にあつて、私たちが摂取する栄養によつて、エネルギーの型が支配されます。ですから、「老人が、いつまでもステーキや、うなぎを食べるのは、やめなさい」と警告しています。

世の中に一般的に流通している医学、栄養学は、かなり間違つていて、ガンや難病で苦しんでいる人たちでオルタナティブを追求している人たちだけが、前記のような処方にとりついていきます。この処方によれば、病院は、ほとんど不必要です。私は、「病気になつても病院に連れて行かないように」、親族に頼んでいます。野垂れ死にで何の後悔もしません。夫のような幸せな最期になるかどうかは、そのとき、誰か側に居てくれるかどうかにかかっていますが、仮に誰も居なくても、大同小異でしょう。

数日前、『汚れた腸が病氣をつくる』(バーナード・ジェンセン著、ダイナミックセラアーズ出版)を、本屋で見つけて読みました。「体調を崩してしまつたら、断食と野菜繊維質の食事で治す」という医学書です。日本では、かなり昔から行われていた健康法ですが、アメリカの医師が書いているので、医学の基礎知識がベースになっています。この著者の臨床治療は、

食事療法ですから、医療費は、ほとんどかかりません。

整体法といい、食事療法といい、日常の生活習慣そのものですから、現在の医療とは違います。整体でも、大抵の健康不調は改善してしまいましたが、初期の指導者たちは、「普通の医者にかかっている人は治さない」と言っていたそうです。つまり、からだ、健康、病氣というものに対する見解が根本的に違うので、クスリなどで、からだを痛めつけることをやめない人に施術をすることは、〈徒勞〉と考えていたようです。

整体や食事療法に理解のある医者が出てくれば、医者たちの知識から助言を得ながら、施術をし、断食や食事療法を進めることができ、患者はハッピーになります。

バーナード・ジエンセンは、「断食をするときは、そういう医者を探して、診て貰いながら、やりなさい」と書いていますから、アメリカでは、そういう医者が見つけれられるのでしょうか。日本でも早くそういう医者が、見つかるといいですね。

そこでは、大げさな検査機器は必要ではなく、（手術しないので、微細な画像を撮る必要がないでしょう）、医者も患者も、経済的負担が格段に小さくなります。

こういう医者が出現したら、私も、「野垂れ死に」を、予め宣言することなく、相談に行くことになるでしょう。

〈幸せな老い〉を実現するには、このようなインフラが、一つの条件ではないでしょうか。

（茨城県つくば市在住）

「長寿は福」と結論したい

森崎 民子

老いを意識し始めたのは、何歳の頃からだったろうか。五十歳を過ぎた頃だったかな。

会社では二十歳前後の若い社員たちと仕事をしていたが、自分の行動に「あれえー」と、内心赤面することが一度や二度ではなく、焦ったものだ。

〈あこら〉の先輩は、そんな私の悩みに「心配することはないわよ」と打ち消しながらも、「そんなに心配なら、病院で調べてもらったらどう？」と、笑いながら助言されたのだった。

また同年の友人からは、「当たり前でしょ。脳細胞は毎日毎日、パチンパチンと壊れているですよ」と笑い飛ばされた。

この時の「当たり前」のことばは、たいそう私を安心させた。「頭がおかしくなったのではないか」とか、「私だけが変」という〈潜在的な人並み意識〉に、やはりこだわっていたのだろう。その後十余年、脳ドックでの検査入院もしないままに開き直った人生を歩いているが、「怪しくなり始めたよ、検査もそろそろ必要では」と、陰の聲が耳打ちするのもまた事実である。

還暦過ぎの身には、「老い」はいよいよ身近になり、友人たちには、老親の介護が最優先の人もいる。

私の場合はほかならぬ自分自身であり、逃げようがない現実である。それは独身である故かもしれない。

以前、『あごろ』（289号）誌上で「百歳近くになったら他人様の手助けが必要になってくるかもしれません。その時、堂々と『面倒をおかけしますが、よろしくお世話を頼みます』と、明かるく頭を下げられるかどうか。（中略）私は遠慮しないことにします。」と書いたが、お世話になる「社会」が健全かどうかは、甚だ心もとない昨今の社会情勢でもある。

自慢できるものは何もない。老後を頼るお金もなければ、体力とて並み以下だろう。病気を患わない保証もない。

「自己責任」など嫌いなことばだが、大半の人はそう思っているのかもしれない。信念がないので、私にできるそれなりの対策は、頭でなりとも考えておかねばなるまい。あくまでも（自分を納得させるために）である。

冒頭に書いた「老い」を心配し始めた頃、多分に自分のボケさ加減が気になってのことだが、手にした本がある。

『老いとは何かを伝えたい』（新福尚武著・婦人之友社刊・一九九七年二月二五日刊行）である。この稿を書くにあたり、思い出して引き出してみた。

十二年前にマーカーを引いた一か所は、末尾の行、〈沈まんとする夕陽が莊嚴であるように、老年が人生の中でもっとも厳肅な輝きあるとき〉の一節である。読み返せば、また別の箇所

マーカを引くことになるであらうか。

たとえ認知症になろうとも、「長寿の代償」とは、思うまい。

六年前、二〇〇三年の賀状には、「『若い』を迎えるにも、修行が要るようで……。」と書いているので、深層心理で引きずっているのだろう。

さてさて、来年二〇一〇年の賀状には、直面進行形の「若い」について、何と表現しようか。悟りの境地にはほど遠く、さりとて関心を持ち始めて十余年、前進なしも悲しすぎる。だからといって、後ろ向きに生きる気は毛頭ない。

神の助けか、今号、323号の『あごろ』誌上で交わされる先輩諸姉の名言を、肝に銘ずることしよう。

三十年来の我が師、『あごろ』に幸あれ！

拙文で恐縮だが、投稿のお誘いを受け「老いの現場」を身内の話題で敷衍してみる。

前政権で悪評だった「後期高齢者」の呼び名は、「長寿・」に変わったそうである（県単位で呼称は違う？）。七五歳からなので、まだその現物を見ていないが、「敬老の日」は国民の祝日なのに影が薄くなった世情と、無縁ではなからう。

この世に生を享け、人生の長短は「運命」に左右されるとは思わないが、道半ばの早世であれば、「人事を尽くして天命を待つ」聖人君子にはなれず、残念無念の色を濃く残して、人生の

幕を閉じざるをえないのだろう。

しかし、此岸で送る側では、「運命」の二文字に救われるのも、また真理であろうか。「運命のなせる業」と転嫁することで、生きて明日の一步が踏み出せるのだらうと、哲学的思考が苦手の私は、ごまかしている。

今ではホスピスなど、最期の時の迎え方に選択肢が増え、「格段の成果」であると、素直に喜びたい。

私は学生時代の親友を三十代初めに数人、四十代、五十代も、共に早すぎる別れに泣いた。家族では母が四七歳、胃潰瘍で不帰の人となった。私が小学校五年の時、末弟は未だ三歳にもなっていなかった。母は心残りこの上なかっただらうし、父は父で、「これから樂をさせてやれたのに」と、男泣きに泣いた。母亡き後、父は一人で私たち五人のこどもを育てたので、苦勞したに違いないが、九一歳まで店に立ち、帳簿をつけ続けた。床についたのも二十日間ほどで、往診の医者には起き上がり手についてお礼を言うのだった。息を引き取ったのは突然で、ずっと父と暮らしていた長姉が「今日死ぬとわかっていたら、負んぶしてでもお店の周りを歩いたのに」と、泣いたのを思い出す。帰省する度に目にし、耳にした父の言動は、「老いの生き方」の見本であり、事に触れ思い出しては自戒している。その父も、来年は十三回忌である。

姉弟では、私が生まれる前に三歳で病死した兄と、六年前、六四歳を迎えた直後にがんで逝った次姉もいたが、今では七三歳の長姉と、六一歳の弟、五五歳の末弟、六四歳の私。残った四人

の姉弟は共に独身である。「老いを考える」には、「十分な適格者」と言えようか。

長姉は言う。「私が、父さんに一番似ているので、長生きするのではなからうか。あんたたち(妹弟)を背負って、台所に立っているのではないかと思うと、イヤよ」と。

料理が苦手な私は、当然、料理は下手である。第二人は言わずもがな。姉に「イヤよ」と言わせる私も情けないが、「食」に時間(手間)をかけないまま生活して、「定年退職したらその後で、ゆつくり」と、甘く考えた私も悪い。貧乏暇なしが習性となって、今もあたふた走り回っている始末。冷凍食品やレトルト食品に頼り、ぜいたく言わなければ、腹は満たせる程度だろうか。

本題に戻そう。

「あんたたちの世話にはならない。施設に入るから」というのが、姉の言い分である。「墓掃除も、近所の人にお金を払って頼む」そうである。確かにそうかもしれない。田舎(島原半島の一角)では、毎日のお墓参りが日課のお家さえある。これは都会の霊園スタイルとは違い、住まいに近いところに墓所があり、墓守(死語ではない)は、「老人の仕事」の一つのようだが、信心がそうさせるのか、「〇〇家之墓」の前で合掌する時、わが身に振り替えて「居心地よくしておく準備」といえば、暴言の誹りを受けるだろうか。

姉の心配ごとは、ほかにもある。それは、「今後、何歳まで車の運転ができるか」である。姉は教職に就いていたが、長崎県に広域人事が始まり、自家用車がないと家からは通えない遠隔地までの異動に備えて、四十歳を過ぎてから車の免許を取ったのだった。幸い、車との相性がよかったのだろう。今も週一のボランティアに、一時間以上かけて長崎市まで車を走らせている。元同僚の先生方は、もみじマークになってから車を手放される方が多い中、運転手役を気軽に引き受けて、大きなものや重たいものの買い物等を手伝っているようだ。

前述の次姉の墓は長崎市にある。〈港が見える坂の長崎〉は、歌には名場面だが、墓参りには不便な場所であり、雲仙市の実家から車で一時間半近くかかる。

「（高齢で）運転免許が取れなくなったら、あんたたち私と弟、多英ちゃんの墓参りにはバスかタクシーよ。どうやって墓参りに行くの」と心配する長姉がいたわしい。私も弟二人も運転免許証は持たないので、「その時はその時」と思うけど、口に出したことはなく、黙って聞くのみ。

私が幼い頃は家業の商売は忙しく、店も繁盛していたが、今ではお客は激減である。

父から継いだ個人商店を、姉が何歳までやれるか心配したとて、解決策があるわけではなく、開けておけば人の出入りがある、その一点が救いだ。

お客さんには、お茶やお菓子まで振る舞い、これまでどおり商売を続けることが、ある意味、姉には生き甲斐なのかもしれない。「売れない、売れない」の口癖も、「仕入れ値が高く、儲け（利益）が少なすぎる」のぼやきも、「老いの脳には 活性剤」と言えば、叱られるだろうか。

古い店舗兼住宅で、「あんたたちが困らないように十年かけて整理したから、もう何も無い」そうだが、父と母が結婚して店を構えた昭和十年頃からの父の日記は、黄色くぼろぼろになっているが、紐で結んで箱に納められていた。戦時中は配給所でもあり、「銭」の単位まで記入された売上台帳を、「へえ！売れてたんだあ」と驚きながら、姉弟で首を突っ込んで読むのは、帰省した時の楽しみでもある。ことに末弟は母の記憶がないだけに、昔の記録はうれしいのだろう。あの日この日と、日記で「その日」を探したのは楽しい思い出である。

姉弟が揃うのは年に一、二度しかないが、未だ真剣に老後の行く末を話しあったことはない。逃げているわけではないが、生き残ったほうが無事に葬儀を済ませることができたら、それで良しとしよう。

今の私にできること。それは九歳年上の姉が一人住まいなので、月に一度は帰省して、共に時間を過ごすことと考え、実行している。

すぐの妹を先に送った長姉の悔しさ悲しさを知っているので、「私まで、姉より先に死ぬわけにはいかない。死ねない。」と思つてはみるものの、「年齢順に死を迎える」などは望む術なく、「この世での積み残しは、あるのが普通」と思い定めて、これからの人生を「まあまあ、可もなく不可もなし」で、笑つて生きられたら上々として、手を打つことにしようか。

(二〇〇九年十月末日)

秋風に襟を立てつつ)

(福岡市在住)

高齢期の母を翻弄した「世帯単位」の枠組み

水田 りゆう

「二人で自立して暮らす」と、言い続けた父母の、老後設計が狂い始めたのは、母が七七歳のとき。母の夜間の起居に、誰かの手助けが必要になったときだ。

母は、在宅で、「父の助けを借りて暮らし続けるつもり」だったが、八〇歳の父は、母の入院を希望した。

父は家事のできる人だったが、市の担当者は、誰もが「男の家事は無理」と、母の老人保健施設への入所を、スナナリ幹旋してくれた。父も億劫だったのかもしれない。

それまでかなり優しかった父の、予想外の反応に、動揺し、腹を立てた母だったが、仕方なく、三か月の約束で、老人保健施設に入所した。月一回遠距離介護に通う私にも、その時点では、「それで様子を見るしかない」と思えた。これが母の受難の幕開けであった。

さて、父が一人で暮らす実家には、さっそく、寡婦の叔母が、「兄の世話に」と入り込み、いとこまで集合した。

父は、人が変わったように、母が懸命に貯蓄した「夫婦の老後資金」を、叔母や自身の縁者

たちに大盤振る舞いし、特定宗教にも入れあげた。

また、父は、「ワシの年金で、夫婦の生活（施設への母の支払いも）は十分だ。（戦争の時代を生き抜いた老親世代の年金は多額だ。老親の年金を支える私たち世代が、真面目に働き続けても、年々目減りする年金に悩んでいるというのに）。余ったカネは、全部まとめて、（叔母に）渡してやれ」と、真顔でいう。実際、かなりの金額が叔母たちに渡り、母の願い（在宅暮らしのために家政婦を雇う費用）などは、父の頭の片隅にも無い様子だった。

約束の三か月を前に、父は、突然、母を他の施設に移してしまった。

父いわく「娘のお前が、仕事を辞めてウチへ同居して面倒見るなら、（母を自宅に）引き取るのが、そうでなければ、引き取らん」と。

叔母もシタリ顔で「父親が難儀しているのに、娘なら、仕事なんか辞めて母親の面倒をみるのが勤め」と。

兄と弟は、「俺たちは無理」と無関心。私は、他県でようやく軌道に乗せた自分の仕事を、「娘だから」の理由で辞めてしまうことは、できなかった。

結局、父と私のせめぎ合いの中で五年が経ち、母は老人保健施設と病院の間を行ったり来たりしながら、確実に老人性痴呆を進行させ、寝たきり状態になっていった。

母の不幸の最大要因は、専業主婦として一所懸命貯蓄した「二人の老後資金」が、「父一人

の財産」になったことだ。世帯単位の世界ではあっても、夫婦別産制のもと、高齢の母は無一物。世帯単位の自分の必要経費を夫に請求する権利を行使する方法すら、知らなかった。

たとえ、請求できても、父は、「ワシが働いたカネ、ワシがどのように使おうとワシの勝手」と固く信じ、実際、父のおカネは、父が諒承しなければ、ほんの1円だって、母の自由には使えない。

反対に、叔母の店の回転資金にと、父が湯水のように注ぎ込む「夫婦のおカネ」は、母がいくら拒否しても、阻止する手段はない。

真面目に専業主婦でがんばった高齢期に、夫の介護をせず、自分が先に病気になった（とんでもない？）女性に、この国は、こんな酷い虐待制度をもっていたのだ。

兄や弟を溺愛する母を、あまり好きではなかったが、母の不幸は、「日本の女性問題」だった。あんなに帰宅を切望した母を、施設入所のままで「死なせる」のは、「同じ女の一人として」忍びない！

「せめて最晩年だけでも母を自宅に引き取り、在宅で看取ってやりたい」と決意した。

一年をかけて転職して……。

ところが、「それはダメです。いくら娘さんでも、お母様が意思表示できないときは、お母様の意思を決める第一位の代弁者は配偶者・お父様です。お父様の同意がない限り、あなたは、お母様を引き取れません」と、市の福祉担当者は断固宣言するのだ。「世帯単位」の……つまり、

「世帯主である父」の意思優先だと。

母の願いに反対する父が、母の意思の代弁者——なんて。

それじゃあ、母の本当の意思は、誰が尊重してくれるの？

悩んだ。……が、とりあえず、衰弱した母の引取りを最優先することにした。

私が「全面的に母の面倒を見る」ことを、父と兄弟が了承し、母は六年ぶりに施設から退所し、私の自宅に帰ってきた。私はその後すぐ、家庭裁判所に、「母の成年後見人」の申請手続きを進めた。

この手続きは面倒だったが、スナナリ受理された。現に私が自宅に母を引き取っていたこと、父も高齢で、母の面倒は、とても看られないこと、国が在宅介護を奨励していたこと。一方、兄弟は、湯水のように叔母に入れあげる父のふところを心配し始めていたこと。そして、寝たきりで要介護5の母の在宅介護には、ホームヘルパーや訪問看護師の派遣など、「父の配偶者としての母の、婚姻費用分担請求」による経済的サポートが必須だったためである。

私は、晴れて母の成年後見人となり、やっと父に扶養される母の、「生きている配偶者」としての経済的な権利を含めた、すべての「母の意思」を、代弁することができた。

「もう何にもわからんのに、あんな母親をひきとつても」と、兄弟は言ったが、自宅に連れ帰り、電動ベッドに寝かせて、「もうこれで、何処へも行かんでいいんよ。私らと一緒に暮らそうね」と言ったときの、母の顔にひろがった嬉しそうな笑顔は、本当に嬉しい驚きだった。

（愛媛県在住・六五歳）

先を行く女性たちと共に生きて

井上 日磨美

日本女性の平均寿命が八七歳になったそうで、九〇歳以上の方は、珍しくない。

私の母も、姑も、九〇歳を超えて、二人とも、まだまだ元気である。

ただ、日常のいろんなことができなくなってきた。

片付けができない。お金の管理ができない。今、話したこと、したことを、忘れる。何度も同じ物を買う。火にかけてあったことを忘れる……。『介護の必要は』と問われれば『NO』だけれど、全くの一人暮らしは、できない。同居を考えるが、環境が変われば認知が進むらしい。うーん、こんな時、ちょっとしたサポートがあればいいのに……と思う。

『介護にかかわらないサポートの必要性』を考えて、『サポートの有償ボランティア』を立ち上げて十年になるが、私たち六〇代の後に続く世代の人が見えてこない。

長寿国は、福祉国家を目指さないと、振り返ったとき後ろにだれもいないことになりそうで、怖いものがある。私自身、奈良、大阪を往復していて、消耗している。

これって、行政に働きかけるしかないのかな？……。

結果が出るまで体力、気力がもつか。〈親より先に逝けない気持ち〉だけがある。

二〇〇九年夏

(奈良県橿原市在住)

潤いある老いの道をゆく

小池 寿哉

一所懸命歩いてきた遠い遠い道を、ふと立ち止まってふり返ってみると、いろいろなことが、思い出が、走馬燈のように頭の中をかけめぐる。

「光陰矢の如し」。

——刻々と時は流れてゆく。

今こうしてペンを走らせていると、あの日、あの時のことが、——あの友、この友の顔が、昨日のことのようになつかしく、はつきりと浮かんでくる。

戦争という大きな障害はあったけれど、無事復員でき、そこから私の青春の心は芽生えた。子ども会の育成、男女平等を考える会、そして家庭科の教師をしていた妻と共に、住みよい高齢社会のために、生き生きと協力し、すごした人生。

——よく道で行き交う方がたから、「お元気ですね。おいくつになられました」と声をかけられると、「大正七年生まれです」と微笑みながらの会話に、若さを感じるひとときでもある。

新婚三年で、二児をかかえて夫と死別。真剣に生きてきた母。家内外のことを、一人で忍耐強くこなした母の姿に、心から感謝し、尊敬し、いつも「お母さん有難う」の心で生きてきた。その母も、十四年前、九八歳で「さようなら」したけれど、母の愛に育てられた、母と共に生きた人生が、私の心をいつも豊かにしてくれたような気がしてならない。

家庭科教師を退職してから、〈高齢社会をよくする会〉をつくり、女性学で老後を楽しむ妻と共に、心を若くして明かるく歩こうと、楽しく語り合い、励まし合って、前向きに元気に歩いている。

そして常に心にあり、モットーとして語り合っていることは、

「男社会の慣習を見直そう」と、

「いつも心に若さを忘れないこと」である。

体は老いても、心は、いつも青春で――。

楽しく元気で前進しよう！

（新潟県岩船郡在住 91歳）

八一歳のパワー

森田 みどり

ずいぶん前のことになりますが、私が中学の非常勤講師をしていたときの話です。教室の後方の席で、私のことを「くそばばあ」と言っているのが、聞こえました。

とつさに、「今、くそばばあと言っているのが聞こえましたが、そういう人は、間もなくくそじじいになります。時間の問題です」と言いました。

〈くそばばあ〉と思っている生徒が、真剣に私の話を聞くはずがないので、それでは授業の意味がない、と思ったからです。

すかさず生徒は言いました。

「地獄耳」。

そこで笑ってしまった私でしたが、友人が言うには、「もう一言、だめ押しが必要。ぎゃふんとさせる一言が……」。

年長者をバカにする、謙虚であらねばならぬことが通じない風潮は、恐ろしいとさえ、思います。

午後の授業が騒がしく、やりにくかったとき、「生徒にバカにされている」と思った私は、

次の授業のとき、覚悟したのでした。

「女だと思ってバカにしているらしいが、誰から生まれたと思っているのだ!! 女をバカにすることは、自分をバカにすることだ!!」と、言つてやろうと。

そう思つて生徒の前に立つたとき、気魄が顔に出ていたのでしょうか、教室は静かでした。

*

八一歳になった今、私は、「私に何ができるか」を真剣に考えています。

その一つとして、福島県矢祭の「もったいない図書館」の手作り絵本に応募しました。戦争孤児の話で一石投じたかったです。

「『本当にあつたことなの?』と、若い友人の小学生の息子が言った」と聞いて、「よかった」と、思ったことでした。

八一歳のパワーです。

(東京都在住 81歳)

有能で美しい老人でありつづけたい

中村 道子

女「この頃、わたしの化粧品が、いつの間にか減るの。おかしいと思っていたら、犯人は、おばあさんだったの。」（一同笑）。

男「むだなのにねえ」（一同冷笑）。

こんなテレビの画面を見た。

そのおばあさまも悪いけど、若い人たちは、「老人が美しくありたいと思うのは、むだ」と思っているのかと、寂しい気持ちになった。

私たちが一番美しかった時代は、戦争の最中と、終戦後の貧しい時代だった。

クリームはおろか、顔を洗う石鹸もなく、疎開先の他家の井戸端で、たつぷりと水を使うことさえ許されない日々を送ったものだ。悲しかった。

しかし、私が高齢になった今、思い当たる。その頃、すでに更年期を迎えていた母は、日々衰える肌を思っ、若い私以上に悲しかったのではないかと。

自分が高齢に達しなければ察することのできないことが、あまりにも多い。

かつて、私たちの先輩も、老いについての後輩の無知識に、「いやはや」と思いながら過ごしていたにちがいない。

いつのまにか、昼の巷は老人ばかりのようになり、心やさしい若い人びとは、助言や介護に尽力してくれている。

こんな時代は初めて訪れたので、高齢社会についての知識は、概ね、学問上のものだったり、想像上のもので、すべてが適切とは言いがたい。

私は今、先人の言葉を、余りにもうかつに、自分に無関係のように聞いていたことを、後悔と反省をこめて思い出している。

私自身、体力や容貌は、日々確かに衰えているが、心は、常に高所を向いて発展しつづけていると感じる。

「常に好奇心に充ち、昨日より今日、新しい発見があることに喜びを感じて、生きている」と確信できる。

私の知る多くの高齢の友人たちは、皆、日々をそのために生きているように思う。死に至るまで、知る限りの面白いことを後輩に伝えていきたい。

後輩の方がたは、それらを大いに利用してほしい。一日でも長く、有能で美しい老人でありつづけたい。

森崎民子さんのご要望に応えて

斎藤 千代

「老いを考える」——このテーマ、難しかったのだろうか？ 御原稿がなかなか集まらない。

責任上、私も一筆書かなくては……と考え込んでいたとき、博多の森崎民子さんから、私の誕生祝いのおはがきが届いた。

そのおはがきを読んで、驚いた。

「斎藤さんは、私がお目にかかって以来、ちつともお年を召されませんね。きっと不老長寿の秘訣をご存じなのでしょう。いつか『あごろ』で、公開願えませんか。今回の『老いを考える』期待しております。」

森崎さんに初めてお目にかかったのは、たぶん〈あごろ全国会議〉が博多で開かれた年。

あの頃は、毎年一回、全国各地の拠点の持ち回りで、全国会議が各地で開かれ、どこで開かれた会議も、とても楽しかったが……、さて、それが何年だったかは、思い出せない。

森崎さんも、石原さんも、二十代だったように記憶する。とすれば、三十年間も、私が変わっていないとは！

お世辞とは重々承知しながらも、ショックだった。

——これは間違いなく、「そのように喜ばせて、なるべく現実もそうなってほしい」というお心づかいだろう。とすれば、策略と知りつつ、その策に載るのが、《高齢者》の心づかいということか……。

たしかに私は、本当の年齢より、たいてい十歳以上、若く見られる。

「観られること」と「現実」の間には、もちろん大きな差があるが、できるだけ若々しくありたいと願っているのは事実である。それは、「高齢者で若々しく見える人が好き」だからである。私の女性問題学習の師である山川菊栄先生も、田中寿美子先生も、実年齢より二十も三十も若く見える方だった。そして、お年を重ねられることに、その御言説は、ますます若々しく、力強くなられた。それは、身近な者にとって、どれほど励みになったかわからない。両先生に学んだ者として、その、《言外の教え》を実践することは、先生方への、ささやかな感謝になるだろう。

また、私の父は満百歳、母は九四歳で、それぞれ天寿を全うしたが、高齢になっても、呆けは、ほとんど見られず。姿勢も、歩き方も、考え方も、最期まで嬰鏢ぐいせうとしていた。そのことは、周囲の者をこの上なくエンカレッジした。だから、自分も、願わくば、少なくともボケの程度を最小限にしたい、と思いつけている。

そのために実行しているのは、毎日、2 kmを、20分で歩くこと。——早朝、まだ人けのない新宿通りの歩道を、「歩幅75センチ、1 kmを10分」の速さで歩く。

私は、子どもの頃から猫背だが、できるだけ背筋を伸ばして歩くと、からだも心も、シャンとする。そして一日の仕事——それはかなりの重労働だが——を処理する元氣が出る。

自分の年齢のことは、口にしない。「もうトシだから」と卑下するのは、人がしているのを見ても好ましい感じではないので、卑下は、しない。その代わり、仕事には、いつも自分のベストを尽くす。

八四歳の年齢相応に、髪は白くなり、新聞も眼鏡なしでは読みにくくなったが、仕事は、一日十四時間は、働いている。私が年齢よりは若く見えるとすれば、働き続けているからだろう。

元氣で働き続けて居られるのは、他人様からお給料を頂いていないためである。

自営だから、私の職場の人びとは、みんな働き者ぞろい。その働きぶりに励まされて、私もピッチをあげて働いている。

きびしい仕事を続けていても疲れないのは、「編集という仕事が好きだから」でもある。

常に厳密さを要求される仕事は、緊張感があり、ボケているわけにはいかない。また、すぐれた筆者の方がたの御原稿を拝読するのは、この上ない学習であり、「なんと恵まれた職業だろう」と、感謝している。

と言って、若いときから、いつも満足できる仕事をしていたわけではない。十代の終わりに、父と母は、祖国の敗戦で、四〇年以上も住み慣れた家も、家財のすべても捨てて、引き揚げて

きた。そのとき父は、すでに七五歳、母は六三歳になっていたが、引き揚げ先の、祖父の晩年の旧居、三千坪の庭を開墾して、そばをつくり、陸稲ながら米までつくった。

私が大学を受験したのは、そのような情況の中だったので、合格の発表を見ても、入学手続きをしなかった。国立の大学が初めて女性に門戸を開いたのだから、試験は受けてみたくて、受けたものの、学費は皆無だった。試験に合格したことは、父にも母にも知らせなかった。

そのうち、大学から、「授業料免除の制度もあるので、入学手続きをするように」との連絡がきたので、手続きの最終日、受付の窓が閉まりかかっているその窓に手を入れて、危ういところで入学手続きを完了。その後、授業料免除に加え、奨学金も得られたおかげで、なんとか学ぶことができた。

しかし、アルバイトを続け、親に送金しながらの通学の無理で、重い結核になり、入院。病床で卒論を書いて、どうにか卒業資格は得たが、級友たちが、大学あての求人で得た恵まれた職場にそれぞれ就労したとき、私はまだ病床にいた。

三年間の病床生活から、やっと父母と共に暮らせるようになったとき、大学への求人の季節は終わっていた。仕事は、知人の紹介による家庭教師しかなかった。

そんなある日の新聞に、「文章を書くことの好きな人、学歴、性別を問いません」とあるのを見て、「学歴・性別を問いません」が気に入ったので応募。幸いにも六百人に一人の「二人」として採用されたが、仕事はコピーライターで、必ずしも全面的に評価できない製品のコピーを書くのは、楽しい仕事ではなかった。

結婚し、子どもに恵まれたのを理由に退社して、出版社の試験を受けて合格したが、その当時、保育園は、ほとんどなかった。「ポストの数ほど保育所を」と、働く女たちが、どこでもきびしい運動を続けていた時代だった。二年がかりで保育所づくりの運動を成就させ、その仲間たちで、〈女による女の会社、BOC〉を創ったが、その会社の営業からスタートすることになり、片手に頭痛薬、片手にトランクリザーを持って、一つ一つ仕事を開拓していったのは、いま思い出すと、若さゆえにできたことだと思う。

同居する姑に仕える苦勞に比べれば、社会で認められている仕事は、苦勞も大きい喜びも大きく、それが、私が「実年齢より若く見られる理由」ではないかと思う。

父が百歳になって、なお嬰鑠としていたのは、百歳になっても自分の研究を続け、それを書物にする夢があったからだろうと思う。恵まれた家に生まれ、恵まれた学校で学び、自分の望む仕事を持ち続けることができた父は、幸運というほかないが、父の生き方を細かにたどってみると、必ずしもいつも運が良かったわけではない。ただ、どんな時でも、父は決して愚痴は言わなかった。自分の信念を持ち続け、信義にそむくことは、しなかった。

九四歳まで生きた母の苦勞も大きかったろうと思う。母は、結婚してからは、家事・育児に忙しく、父のような、「生涯の仕事」を持ち続けることはできなかったが、九十を過ぎても、多くの本を読み、社会の動きに深い関心を持ち続けて、自分の排泄物は、明治の女らしく、最期まで自分で始末し続けて、ある早朝、誰にも知られずに旅立った。



私が、森崎さんの眼に、「不老長寿の秘訣を知っている人」と、映っているとしたら、その原因は、「明治の人らしく、いさぎよき生き抜いた父と母を見て育ったから」だろうと思う。

日々、生存者が少なくなっていく「大正生まれ」の誇りにかけて、私も、「いさぎよく生き抜き」たい。

「お金のない『あごろ』。早く廃刊したら」という大合唱のなかで、私が「あごろ」は、まだまだ、しなければならぬ仕事がある」と思い続けているのは、案外、「仕事をし続けている限りは、精いっぱい、生きていける」と、心のどこかで思い込んでいるためかもしれない。森崎さん、これでお返事になりましたか……。

あなたの お原稿を「本」にする お手伝いをします

『あごろ』を発行している〈BOC出版〉は、〈あごろ〉会員の皆様のお作品を本にする仕事も しています。

今年刊行しました、倉田侃司先生の『今こそめくもりを』も、鈴木光子さんの『いつのエラ』も、たいそう好評でした。

どうぞ、いつでも、ご相談ください。(この二冊は322号の読書室でご紹介しています。)

TEL 03・3354・3941(代表) FAX 03・3354・9014

各政党の〈高齢者対策〉

(文書による「回答を、到着順に掲載しました」)

日本共産党

高齢者が安心してくらせる社会をつくります

高齢者が安心して暮らせる社会をつくることは、政治の重要な責任です。

ところがいま、自公政権のもとで、高齢者を「じやまもの」あつかいする悪政が横行しています。お年寄りを差別し、際限のない負担増をおしつける後期高齢者医療制度に、全国の高齢者が怒りの声をあげています。国保料(税)、介護保険料の相次ぐ値上げが家計を圧迫し、療養病床の削減、介護施設の経営危機・人手不足は、「介護崩壊」ともいうべき深刻な事態を引き起こしています。くわえて、「消えた年金」「消された年金」問題です。自公政権の高齢者

いじめ、無責任政治はひどすぎます。

高齢者世帯は年所得200万円以下が42・8%、年100万円未満も15・7%にのぼるなど(06年「国民生活基礎調査」、貧困で厳しい生活を余儀なくされている人が数多くいます。高齢者に、「自助努力」、「自己責任」を強要し、負担増と福祉のきりすてをすすめる政治では、生活破壊と貧困化がますます深刻化し、老後不安はつのるばかりです。日本の70歳以上の高齢者は2017万人となり、初めて2000万人を突破しました(08年9月15日現在の推計)。戦前、戦中、戦後の苦難の時代に身を粉にして働きつづけ、家族と社会のためにつくしてきた人たちです。

日本共産党は、高齢者が大切にされ、安心して老後をおくれる社会の実現をめざして全力をあげます。

後期高齢者医療制度は廃止します——「長生きは罪なのですか」……自公政権が08年4月実施を強行した

「後期高齢者医療制度」に、全国の高齢者が不満をつのらせ怒りの声をあげています。75歳という年齢をかさねただけで、今まで入っていた国保や健保から追い出されるといふ差別医療は世界に例がありません。しかも、年金からの天引きで、2年ごとに際限なく保険料が引きあげられ、受けられる医療内容も別建てで制限します。まさに「うば捨ての制度」です。政府は、「抜本見直し」を言い出していますが、後期高齢者医療制度はきっぱり廃止すべきです。療養病床の削減計画をストップさせ、安心して入院治療・療養ができるよう体制をととのえます。

高齢者の医療費を無料にします——日本共産党は、窓口負担ゼロをめざして負担軽減に踏み出します。その第一歩として、75歳以上の高齢者の医療費は無料にすることを提案します。自公政権が来年度からの実施を決めた70〜74歳の窓口1割から2割負担への2倍の値上げを撤回させます。69歳以下は2割に引き下げます。

国民健康保険の高い保険料（税）が、高齢者世帯の家計を圧迫しています。日本共産党は、国の責任で、国保料（税）を一人当たり年1万円引き下げる緊急提案をおこなって

ます。これは、この間、国が減らしてきた市町村国保への財政支出のごく一部を元にもとすだけで実現できます。

年金を充実させます——公的年金は、老後の暮らしをささえる柱です。ところが、国民年金しか受けていない高齢者は910万人、その受給額は、平均で月額約4万7000円にすぎません（05年）。月2万円、3万円という低額年金、また無年金の人々も膨大な数にのぼるなど、きわめて劣悪な水準です。抜本的な改革が必要です。

日本共産党は、安心できる年金制度改革として、掛け金なしでも、一人で月額5万円、夫婦で月額10万円の年金がうけとれる最低保障年金制度の創設を提案しています。全額国庫負担によるこの最低保障額の上に、それぞれの掛け金に応じて、給付を上乗せするようにします。そうして、国民年金満額の人なら、現在の月6万6千円を月8万3千円まで底上げします。

「消えた年金」「消された年金」問題は、6万9000件を超す年金記録の改ざんに社会保険庁の職員が関与していることがあきらかになりました。まさに、国家による詐欺にひとしいものです。一人も被害者をださず、一日も早く解決するという立場で、国が解決に責任を果たすことを求

めます。国が管理・保有している情報をきちんと提供する
こと、相談・問い合わせ、未払い金の支払いなどに対応で
きる体制を抜本的に強化すべきです。

公的年金等控除など高齢者増税を見直し、「天引き」をやめさせます——この間に行われた高齢者の
所得税・住民税の増税について、公的年金等控除の最低
保障額を140万円に戻すとともに、所得500万円以下
の高齢者には老年者控除を復活します。

介護保険料や、今年10月から開始されようとしている住
民税の年金からの特別徴収（天引き）については、「天引き」
の強制をやめさせ、各人の希望で普通徴収に変更できるよ
うにします。

介護保険制度を改善します——「老老介護」に疲
れ果てた、高齢者夫婦の痛ましい無理心中事件が後を絶ち
ません。著しく不足している介護施設・在宅サービス、高
い保険料・利用料負担など、「保険あつて介護なし」の深
刻な事態を改善することが急務です。

介護保険財政にたいする国庫負担割合を5%引き上げ、

介護保険料の値上げを抑え、保険料、利用料の減免制度の
拡充をすすめます。所得の少ない高齢者は、介護保険料・
利用料を免除します。また要介護度が実態より下がる新認
定制度は中止し、ホームヘルプサービスなど給付の制限を
やめさせ、改善をすすめます。

介護の人材不足を打開するために、事業所にたいする介
護報酬を大幅に引き上げ、国の責任で職員の賃金を月額3
万円ひきあげる緊急措置を実現します。

特別養護老人ホームを大幅にふやし、一日も早く待機者
を解消します。小規模・多機能宅老所、グループホームな
どが地域にきめこまかくとのえられるよう、行政の支援
をつよめます。

高齢者むけ住宅を増設します——高齢者で、現在、
居住している住宅で困っている人は4割を超えます。一方、
特別養護老人ホームやケア付住宅などへの入居希望者も増
えています。（内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する
調査」06年）。

住宅のリフォームがすすめられるよう、介護保険の住宅
改造費を拡充するとともに、自治体の住宅改造助成制度の

新設・拡充をはかります。高齢者むけケア付住宅・施設の整備を急ぎます。

公営住宅やUR（住宅都市再生機構）の賃貸住宅の建設をふやし、高齢者むけ家賃減免制度の拡充をはかります。

民間賃貸住宅に暮らす高齢者への自治体の家賃補助制度の普及をすすめます。

就業・雇用を保障します——働く意欲と能力がありながら、まっさきにリストラの対象となるのは高齢者です。ハローワークに通っても、希望どおりの仕事につけるのは皆無に近く、中高年齢者の再雇用はきわめて厳しいのが実情です。

高年齢者雇用安定法が改正され、年金の支給開始年齢の繰り延べにあわせて、65歳までの段階的な雇用延長がすべての事業主に義務づけられました（06年4月）。事業主は、「定年の引き上げ」「継続雇用制度の採用」「定年の定め廃止」のいずれかの措置を講じなければなりません。「継続雇用制度」については、法の趣旨からも、希望者は全員再雇用となるよう、国は企業に指導・監督をつよめるべきです。年齢による賃金差別はやめさせるべきです。アメリカ

カやEUなどで実施されているような、「年齢による差別を禁止する法」（仮称）を制定することも必要です。

地域の実情におうじて、高齢者の就労・社会参加の場をひろげることも大切な課題です。シルバー人材センターについて、賃金や労働条件、災害補償など改善をはかります。また高齢者の就労の場の確保のために活動している団体にたいして、行政が支援をおこなうようにすべきです。

安心・安全のネットワークをつくりまします——人暮らしの高齢者（65歳以上）は年々増えつづけ、430万人にのびります（2010年）。誰にもみとられず亡くなるという痛ましい孤独死が各地でふえています。貧困と格差の象徴です。医療制度の改悪や冷たい生活保護行政、介護保険の導入を機に高齢者福祉にたいする行政の責任が大幅に後退したことも背景にあります。

行政が責任をもって、地域住民と協力しあい、高齢者を地域でささえる安心のネットワークをつくるのが急務です。

自治体やNPOなどがとりくんでいる、高齢者への配食サービス、見守り活動、緊急通報システムなどの普及・拡

充をはかります。高齢者が積極的に外出し、住民同士で会食や交流などができるミニ集会所をきめこまかにととのえることも必要です。

自治体と地域包括支援センターが、介護保険の対象者だけでなく、広く地域のお年よりの実態を把握し、安心のネットワークをつくりあげていくうえで役割を果たすことが必要です。そのためにも、国が地域包括支援センター、在宅支援センターへの職員の増配置や財政保障をつよめるようにすべきです。

（日本共産党 2009 年総選挙〈各分野政策〉高齢者より）

社会民主党

後期高齢者医療制度を廃止します

- 「後期高齢者医療制度」は病気になるリスクの高い層だけを切り離し、高齢者の医療費削減を目的に設計されています。将来、医療内容が制限されかねないうえに、保

険料負担は上昇率が非常に高く、持続可能な制度とはいえません。同制度を一旦廃止し、老人保健制度にもどします。

- 保険者機能の強化、財政の安定化、医療供給体制などの面から、市町村国民健康保険の適正規模を検討します。
- 在宅医療を中心に据え、切れ目のない医療と保健、福祉を結ぶ「地域ケア」の実践を広めます。

- 患者や家族の要望を踏まえた実践を通じ、患者の尊厳を大切にした終末期医療や看取りのあり方を探求します。

年金記録問題を解決し

年金制度の信頼回復を図ります

- いわゆる「宙に浮いた年金」「消えた年金」「改ざんされた年金」など年金記録の正確な回復作業を促進します。
- 年金記録がまちがっている可能性が高い人について、一定基準による早期の救済策を検討します。

- 事務局体制を強化し、記録が回復した年金の支給を迅速に行います。

年金に関する情報提供と情報共有をすすめます

●年金記録を政府と国民が共有し、毎年双方でチェックする仕組みをつくります。毎年送付する「ねんきん定期便」には、前年の加入記録や所得、年金見込額、過去の加入記録、積立金の運用成績、年金制度運営のための行政コスト・間接コストなどを掲載します。

●保険料の履歴や将来の受け取り見込み額を自分で確認できる「マイ年金手帳」をつくります。

●公的年金の老年者控除等を復活するとともに、年金からの税・保険料天引きをやめさせます。

年金保険料の流用を禁止します

●年金保険料の用途を年金給付に限定します。

●運営管理業務における公平性、効率性、透明性を確立します。

●年金積立金管理運用独立行政法人に対する国のチェックを厳しくします。

最低保障機能を備えた

わかりやすい年金制度をつくります

●年金制度を一元化し、転職や結婚などで移動する必要の

ない、公平でわかりやすい制度にします。新しい年金制度は、自分の賃金が年金受給に反映される「所得比例年金」（財源は保険料）と、社会が支え合う「基礎的暮らし年金」（財源は税金）の組み合わせです。

●「所得比例年金」は、だれもが無理なく支払える所得比例の保険料（給与所得者は労使折半、自営業者らは全額負担）で、納付した保険料に見合った年金額になります。

●「基礎的暮らし年金」は無年金や低年金を防止する最低所得保障の機能を果たします。全額税財源による社会連帯のセーフティネットです。「所得比例年金」の受給額によって額は異なり、所得比例年金がゼロの単身で月8万円を保障します。

●国民の合意形成を早急に行うべく国会で議論を開始し、高齢者が生活できる年金額が手元に残るように、医療・介護の自己負担（保険料と利用料）や税制のあり方を総合的に見直します。

●「所得比例年金」の保険料は税と一体徴収します。総合課税化を推進する「公平番号制度」を早期に導入し、所得を正確に捕捉して不正を防止します。

【介護保険・高齢者福祉】

利用者・高齢者の費用負担を軽減します

- 利用料、保険料など、費用負担が引き上げられ、必要なサービスを利用できない高齢者が増えています。保険料の段階区分をより細かく設定します。低所得者の利用料負担は、所得に応じた負担率に改善します。

サービス制限、認定制度、利用限度額などを見直します

- 訪問介護、福祉用具など軽度認定者に必要なサービスが利用できるように基準の見直しを行います。同居家族がいる場合の生活援助、院内介助など、サービス利用の一律的な制限を是正します。

- 要介護認定基準の改定により、要介護度が軽くなりサービスが減らされ、利用者から不信の声があがっています。認定結果と要介護者の生活実態やニーズとの乖離が生じないよう認定方法を抜本的に見直します。ケアマネージャーなど現場の専門家に認定システムの移行を検討します。

- 利用限度額を大幅に引き上げ、重度認定者の在宅介護体制を強化します。

介護報酬の大幅引き上げ・労働条件の改善と人材育成に取り組みます

- 良質な介護サービスの確保、介護労働者の低賃金改善のために介護報酬の基本部分を引き上げます。利用料や保険料のアップにつながらないよう国の費用負担割合を増やします。

- 専門性を高める研修制度の充実、施設の人員基準の見直し、事務負担の軽減など、介護労働者が働きがいをもって仕事が続けられるように、労働待遇を改善します。

介護サービス基盤を整備します

- 介護療養病床を全廃する計画を中止し、地域に必要な病床数を確保します。待機者が38万人にもなる特養ホームの緊急整備を行います。

- 24時間の生活を支える在宅介護、在宅看護の態勢を整備します。

総合的な高齢者福祉政策を充実します

- 認知症の予防・早期治療・介護の質的向上、家族への支援態勢などを行います。
- 地域包括支援センターの機能を強化するとともに、老々介護や独居、虐待、低所得など、高齢者の様々な問題について自治体が責任をもって解決ができるよう態勢を整えます。

(社民党第45回衆議院総選挙 総合政策ガイドより)

民主 党

年金・医療

年金記録被害者への迅速な補償のため、一定の基準の下で、「一括補償」を実施する

【政策目的】

- 年金記録問題の被害者の補償を一刻も早く進める。

- 年金記録問題の再発を防ぐ。

- 公的年金制度に対する国民の信頼を回復する。

【具体策】

- 「消えた年金」「消された年金」問題への対応を「国家プロジェクト」と位置づけ、2年間、集中的に取り組む。
- 年金記録が誤っている可能性の高い受給者等を対象に、記録訂正手続きを簡略化する。
- コンピューター上の年金記録と紙台帳の記録の全件照合を速やかに開始する。

- 年金記録を訂正した人が、本来の年金受給額を回復するまでの期間を大幅に短縮する。

- 全ての加入者に「年金通帳」を交付し、いつでも自分の年金記録（報酬月額を含む）を確認できるようにする。

【所要額】

2000億円程度

年金保険料の流用を禁止する

【政策目的】

- 公的年金制度に対する国民の信頼を回復する。
- 保険料流用を禁止することで、年金給付の水準を少しで

も高める。

【具体策】

- 年金保険料は年金給付だけに充当することを法律で定める。

【所要額】

2000億円程度

一元化で公平な年金制度へ

【政策目的】

- 公的年金制度に対する国民の信頼を回復する。
- 雇用の流動化など時代にあつた年金制度、透明で分かりやすい年金制度をつくる。
- 月額7万円以上の年金を受給できる年金制度をつくり、高齢期の生活の安定、現役時代の安心感を高める。

【具体策】

- 以下を骨格とする年金制度創設のための法律を平成25年までに成立させる。

＜年金制度の骨格＞

- 全ての人が同じ年金制度に加入し、職業を移動しても面倒な手続きが不要となるように、年金制度を例外なく一

元化する。

- 全ての人が「所得が同じなら、同じ保険料」を負担し、納めた保険料を基に受給額を計算する「所得比例年金」を創設する。

- 消費税を財源とする「最低保障年金」を創設し、全ての人が7万円以上の年金を受け取れるようにする。「所得比例年金」を一定額以上受給できる人には、「最低保障年金」を減額する。

年金受給者の税負担を軽減する

【政策目的】

- 年金受給者の負担を軽減し、高齢者の生活の安定を図る。

【具体策】

- 公的年金控除の最低補償額を140万円に戻す。
- 老年者控除50万円を復活する。

【所要額】

2400億円程度

歳入庁を創設する

【政策目的】

8500億円程度

- 年金保険料のムダづかい体質を一掃する。
- 年金保険料の未納を減らす。

【具体策】

- 社会保険庁は国税庁と統合して「歳入庁」とし、税と保険料を一体的に徴収する。
- 所得の把握を確実にを行うために、税と社会保障制度共通の番号制度を導入する。

後期高齢者医療制度を廃止し、国民皆保険を守る

【政策目的】

- 年齢で差別する制度を廃止して、医療制度に対する国民の信頼を高める。
- 医療保険制度の一元的運用を通じて、国民皆保険制度を守る。

【具体策】

- 後期高齢者医療制度・関連法は廃止する。廃止に伴う国民健康保険の負担増は国が支援する。
- 被用者保険と国民健康保険を段階的に統合し、将来、地域保険として一元的運用を図る。

【所要額】

医療崩壊を食い止め、国民に質の高い医療サービスを提供する

【政策目的】

- 医療従事者等を増員し、質を高めることで、国民に質の高い医療サービスを安定的に提供する。
- 特に救急、産科、小児、外科等の医療提供体制を再建し、国民の不安を軽減する。

【具体策】

- 自公政権が続けてきた社会保障費2200億円の削減方針は撤回する。医師・看護師・その他の医療従事者の増員に努める医療機関の診療報酬（入院）を増額する。
- OECD平均の人口当たり医師数を目指し、医師養成数を1・5倍にする。
- 国立大学付属病院などを再建するため、病院運営交付金を従来水準へ回復する。
- 救急、産科、小児、外科等の医療提供体制を再建するため、地域医療計画を抜本的に見直し、支援を行う。
- 妊婦、患者、医療者がともに安心して出産、治療に臨め

るように、無過失補償制度を全分野に広げ、公的制度として設立する。

【所要額】

9000億円程度

介護労働者の賃金を月額4万円引き上げる

【政策目的】

- 全国どこでも、介護の必要な高齢者に良質な介護サービスを提供する。
- 療養病床、グループホーム等の確保により、介護サービスの量の不足を軽減する。

【具体策】

- 認定事業者に対する介護報酬を加算し、介護労働者の賃金を月額4万円引き上げる。
- 当面、療養病床削減計画を凍結し、必要な病床数を確保する。

【所要額】

8000億円程度

(民主党 政権政策Manifesto 2009年7月27日発行より)

自由民主党

高齢者医療制度等の見直し

高齢者医療制度について、高齢者の方々の心情に配慮し、すべての世代の納得と共感がより得られるものとなるよう、よりよい制度への抜本的な改善・見直しを図ります。

- 75歳を過ぎたサラリーマンの方は、引き続き、支える側として、現役の制度に加入し続けられるようにするなど、年齢のみによる区分を見直します。

- 特に所得の低い方について、保険料の9割軽減措置を継続します。

- 特に所得の低い方が、より安心して医療機関にかかることができるよう、外来の窓口負担の上限(月額8,000円)を半減します。なお、高額療養費制度の見直しについては、2009年末までに結論を出し、実行します。

- 65歳から74歳までの方の窓口負担割合(70～74歳…予算措置にとり1割から2割への引上げを凍結中、65～69歳…3割)について、負担能力を踏まえた適切な水準とします。

●保険料の支払方法について、今年度からの口座振替との選択制を進めます。

●複数の病気にかかったり、治療が長くなりがちといった高齢者の心身の特性に合わせた新たな医療サービスの提供などを進めます。

●高齢者の方の保険料負担が過大にならないよう、安定的な財源の確保と高齢者医療の公費負担の拡大等に取り組めます。また、当面、財政状況の厳しい健保組合の負担軽減策を講じます。併せて、名称を高齢者医療制度に改めます。

年金記録問題の速やかな解決

基礎年金番号に未統合の5000万件の記録の解明・統合に努めつつ、インターネットなどの利用により残された記録の内容をプライバシーに配慮して、国民に開示し、自分の記録の有無についての参考としていただきます。

また、コンピュータ記録と約8億5千万件の紙記録との突合せを、お申し出の有無にかかわらず、すべての受給者加入者について計画的に進めます。

社会保険庁の様々な問題を一掃するため、新たに公的年

金の運営業務を担う日本年金機構を平成22年1月に設立します。日本年金機構においては、外部委託の推進など業務の適正かつ効率的な実施を徹底しつつ、年金記録問題への対処と迅速な救済を行います。年金記録問題については解決に向けて着実に進め、来年末を目途に解決させます。

将来とも安定した年金制度の構築

年金制度が将来にわたって国民の老後の生活を支える柱となるよう、年金制度を安定させ、充実させます。その上で、3年以内を目途に無年金・低年金対策のための具体的な措置を講じます。また、非正規で働く方への年金保障に向けた見直し、在職高齢年金の見直し等を行います。なお、被用者年金制度の一元化については、早期に実現をします。年金制度については政争の具とすることなく、超党派による協議機関を早期に立ち上げる等党派を超えて議論を行い、財源問題も含めた社会保障制度の一体的な見直しと整合的なものとして見直しを行います。

介護サービスの改善と職員の処遇改善

地域の介護ニーズに応え、施設と在宅の両面にわたり、

介護サービスの改善を図ります。特に、今後3年間で、特養、老健及びグループホームを約16万人分整備することを目標に取り組みます。

介護に携わる人材が意欲とやりがいをもって良質なサービスを提供できるよう、介護報酬の3%アップ改定に加え、介護職員の処遇改善に努める事業主に対して職員の給料一人当たり月平均1・5万円の引上げに相当する金額を助成し、専門性と職務の重要性に応じた賃金体系の普及・定着を目指します。また、介護職員が働きやすい職場づくりを推進し、現在介護職員の研修やキャリアアップの支援、介護労働者の職場環境の改善を進めます。

高齢者の方々が住み慣れた地域で、より長く元気に、安心して暮らし続けることができるよう、介護予防の推進や、地域包括センター等における認知症支援体制の強化など認知症対策の総合的な推進を行います。

平成24年度の介護報酬改定時においては、介護保険料の上昇を抑制しつつ、介護報酬を引き上げます。療養病床再編については、適切に措置します。

(自民党 重点施策 2009年8月4日発行より)

公明党

【安心の医療】

長寿医療制度

現行の保険料軽減措置の継続

- ・低所得者等の保険料負担の軽減措置を継続します。

- ・被用者保険への継続加入措置の創設

- ・被用者保険の被保険者であった方については、被用者保険に引き続き加入できるように配慮措置を講じます。

高額療養費制度の見直し

- ・高齢者の外来における窓口負担の自己負担限度額の引き下げを行います。

公費負担割合の引き上げによる保険料水準の抑制

- ・公費5割、現役世代の支援金4割、高齢者の保険料1割の負担割合のうち、公費負担の引き上げを行い保険料負担の軽減を図ります。

前期高齢者医療制度および一般の医療保険制度

70歳以上1割負担の継続

●70～74歳の窓口1割負担を継続します。

公費負担による前期高齢者医療制度にかかる被用者保険の財政調整負担の軽減

●前期高齢者医療制度における財政調整による健康保険組合等の負担増の軽減を図るため、公費を投入・拡大します。
高額療養費制度の見直し

●外来医療における高額な医薬品の利用の拡大等による負担増を踏まえ、自己負担限度額の引き下げや外来医療での受領委任払いの適用など、高額療養費制度の見直しを行います。

「利用者負担総合キャップ制」(仮称)の創設

●医療・介護・自立支援給付等の自己負担を合算して総合的な負担の上限を決め調整する「利用者負担総合キャップ制」(仮称)を創設します。

国民健康保険制度の広域運営の拡大と一元化の検討

●当面、国民健康保険の都道府県単位の財政調整の強化により広域化を図るとともに、都道府県単位の一元化された地域保険の創設に向け検討を進めます。

「暮らせる年金」

年金制度全般への対応

被用者年金の一元化

●被用者年金(厚生年金と共済年金)の一元化を早急に実現するとともに、厚生年金、共済年金の個人単位化を進め女性の年金権を確立します。

未納・未加入対策

●被用者年金の適用の拡大を進めるとともに、社会保障カードを早期導入し、減免制度の確実な適用等により国民年金の未納・未加入問題の解消を進めます。

国民年金基金の制度を改善

●国民年金基金の加入期間の延長や保険料の小口化などを進め、利用しやすい制度へと改善します。

無年金・低年金への対応

低所得者への加算年金の創設

●低所得者(単身世帯で年収160万円未満。それ以外は200万円未満)に対して、基礎年金を25%上乘せする

加算年金制度を創設し、最低保障機能を充実します。(現在満額で66、000円の国民年金の場合、83、000

0円程度に引き上げ)

受給資格期間の短縮と保険料追納期間の延長

●年金受給資格期間を25年から10年へ短縮し、無年金者の発生を抑えるとともに、保険料の事後納付期間2年を5年に延長します。

「特定障害者給付金支給法」の改正

●無年金障がい者の幅広い救済を行うため、給付金の支給対象の拡大を目的とした「特定障害者給付金支給法」を改正します。また、国民年金の強制適用の対象となっていないながら、未加入あるいは保険料未納で、「障害年金」を受給できない方や、1982年1月の国籍要件撤廃前に障がいを負った無年金の外国人について、「特定障害者給付金」の支給対象とすることを検討します。

※「特定障害者給付金支給法」…国民年金制度への加入が任意となっていたときに未加入であったため、

「障害基礎年金」等の受給権のない障がい者に「特別障害給付金」を支給する法律

(公明党第45回衆議院選挙届出パンフレットより)

国民新党

「思いやりのある医療・介護制度」

平均年額合計3・2兆円の医療福祉政策緊急対応

1、公平・簡素な医療保険制度の確立

公平、簡素かつ持続可能な医療・介護保険制度確立の為、現在、全国で地域別・職域別・年齢別に4000以上も存在している健康保険組合を統合し、保険制度の一元化を図る。保険料または税として歳入庁が一括徴収を行い、各県に創設された医療保険基金に對して、人口・年齢構成・疾病構造などの地域特性等を考慮して分配する。保険料(税)の不足分は、一般税収より必要額を基金に繰り入れるものとする。各県の基金は保険者機能を行使し、健康増進事業や支払査定業務を行い、剰余金が発生した場合の使途は各県の独自判断により運用可能とする。同時に医師不足や看護師・コ・メディカルスタッフ・介護職員不足に對し得る診療報酬制度の見直しと、国民の医療機関における窓口負担の軽減化(小児・高齢者は原則10%、現役世代は20%

負担)を図る。

(医療保険制度として8000億円、介護諸制度については別掲)

2. 医師・看護師不足対策

全国で10万人規模の医師不足状態に抜本的に対応すべく、大学医学部定員の増加と学士入学制度の拡大(日本版メデイカ尔斯choolの創設)を柱とした医師増員計画を策定する。各大学の定数を概ね20人程度増員し、増加分は地域医療枠として奨学金制度の活用と共に、地域医療を担う人材の育成を図る。また歯科医・薬剤師から医師への道もメデイカルスchoolにおける3年間程度の教育を経る事により医師国家試験受験資格を提供する事により拓いてゆく(通常の4年生大学卒業生は4年間の履修を基本とする)。大学医学部およびメデイカルスchool創設により、年間2000名程度の医師数純増を図り、従来の医学部卒業生と併せ、15年間程度の増員期間を経る事により我が国の医師数は欧米先進国水準に近づいてゆく事となる。

(医師養成分として平均年額300億円、医療従事者全体として600億円)

3. 地域医療・勤務医対策

地域における絶対的な医師不足の影響で地域医療が崩壊の危機に瀕している状況を踏まえ、臨床研修制度における新卒医師配置を各県毎の医師数を考慮したマッチング制度の見直しを行い、地方重視の傾斜配分(各県毎の研修医定数制)として、地域における求人が円滑な充足を図る。また勤務医の過重労働を緩和する為の即効性のある施策として、コ・メデイカルスタッフの大幅増員を行い、同時に各々の職種に応じた職能分担の見直し・確立を図ると共に、特に医師不足が顕著である地域・診療科の勤務医の報酬を見直す事が出来る様、地域医療機関等への補助金の支給を行うと共に、診療報酬における技術料の一部を勤務医に対して直接支払が可能となる様、支払制度の変更を行う。

(技術料等引上…2000億円、コ・メデイカルスタッフ増員対応…2000億円、地域医療・不足診療科対策支援…3000億円)

4. 医療の質の向上および医療事故対策

医療事故と萎縮診療の防止および医療の質の向上、そして国民(患者・家族)の安心を高める為、公的な第三者機

関における医療事故調査委員会と医療事故全般を対象とした無過失補償制度を確立する。これらにより正確な事故原因の究明と情報公開、更に患者・家族への適切かつ迅速な補償を行ってゆく。また一連の原因究明・補償制度の確立を通じて、先進諸外国の如く、正当な医療行為に対しては刑事的免責が図られる制度運営を目標とする。

（事故調査委員会運営費用…100億円、患者救済制度運営基金…500億円）

5. 安心出来る介護サービスの提供体制作り

現状の介護保険制度・報酬体系は介護事業者の安定した事業運営を支える事が出来ず、結果として圧倒的多数の介護労働者が過重労働・低賃金の中、現場から立ち去ってゆく悪循環を作り出している。また介護サービスが必要な方々も認定要件の強化等により、十分なサービスが受けられない状況が拡大しているといわざるを得ない。今後の高齢化社会の進展により更なる介護労働力が必要になる状況下において、介護保険制度・報酬制度・人材育成に関する抜本的な見直しを行う。また保険制度においては、高齢者の特性を考慮すれば本来、医療と密接不可分であり、療養病床

問題に代表されるように、保険制度を分離した事の弊害が目立つようになってきている。また自治体毎の介護保険制度も医療制度同様に早くも破綻への道を歩みつつある。そこで介護保険制度についても、医療保険制度同様、全国一元化を図ってゆく。その上で最終的には医療保険と統合し、医療と介護を無駄なくシームレスに提供出来る保険制度の創設を中期的な目標とする。また介護報酬については、事業運営の実態に応じた改定を適宜行い、同時に高齢者の窓口負担率を所得に応じて軽減可能な制度作りを行う。

- 介護サービスの地域基盤整備、人材確保政策…1・1兆円

（平均介護報酬の15%拡充、平均介護職員給与の3万円上昇等）

- 介護サービスの拡充政策…3000億円

（ケアマネジャー判定とサービス提供体制の柔軟な運用、認定マニュアルの見直し等）

- 高齢者負担率の軽減（10%負担より平均7・5%負担へ）…2000億円

（国民新党 政権公約2009・医療制度版より）

裁判員制度を考える（連載2）

「始まった裁判員裁判の問題点」

五十嵐 二葉

二〇〇九年八月三日に裁判員裁判が始まって四か月、一事件に何頁も使って報道した新聞、特番を組んだテレビの、「ご祝儀報道」も小さくなり落ち着いてきた中で、裁判員判決は、十二月一〇日で一〇六件となり、そこには各事件に共通する裁判員裁判特有の問題点も見えてきた。それらの問題の原点は、制度の運用が、いわば二つのキイワード「裁判員の迷惑を最小限に抑える」「裁判員にわかりやすい」だけを軸に行われたことにあり、それは裁判員報道に「裁判の公正」、「無罪の不処罰」が、一度も登場しないという事実、端的に現れている。

一〇〇年に一度の「司法改革」と言われながら、僅か二か月半の国会審議で成立し、その後施行までの準備期間が五年間もあったのに、政府・裁判所は、市民参加に必要な具体的な制度設計もしないまま、なにがなしに始められたのが現在のやり方で、それが「市民の司法参加」の正しい方法なのかを、根幹から検証する視点がどこにもない。

そんな現状の問題点を、字数の範囲で、その一部、しかも簡単になるが、あげてみよう。

1、そんなに急いでどこへ行く——審理日程・審理時間の切り詰め

第一に「裁判員の負担を軽くするため」として、刑事裁判の審理日程、審理時間が極端に少なくなった。もともと裁判員裁判は、二一にのぼる一連の迅速化法案の一つとして立案されたもので、審理の切り詰めは、政府・裁判所からすれば制度を作った目的であり、予定通りなのだろう。しかし実際に正確に計算して見ると、その切り詰めぶりは驚くほどだ。

私は、九月二九日から一〇月二日まで、初めて本格的に争う事件といわれた福島地裁の郡山支部一号事件（以下「郡山」と略）を傍聴したので、審理を分単位で計算して、それと裁判員対象事件とほぼ重なる従来の「争いのある法定合議事件」（以下「従来」と略）の過去五年の平均と比べてみた。するとその短縮ぶりが、はっきりわかる。

従来の審理期間一一・八カ月が、「郡山」では四日間になった。審理時間は従来は一八〇〇分程度あったのが、「郡山」では合計で一四三〇分となった。それだけでも従来の二割減だが、審理の実質時間は五八五分で、従来の三分の一以下になっている。裁判員が拘束されるのは四日間なのに、なぜ審理時間がこんなに短いのかというと、裁判員制度に特有の「選任」や「評議」などに九三四分と、審理時間の約倍近くを取られるからだ。その上、どの事件でも、裁判長が裁判員に被告や証人への「質問」をさせるために頻繁に入れる休廷が大幅な時間を取る。

こうして切り詰められた公判日程から、どういう結果が出て来るか。まず、公判期間が短いため、従来は可能だった、裁判期日と期日の間の弁護活動⇨公判中に出てきた検察側の主張への反論や、被告に有利な新しい証拠の収集など⇨が、不可能になった。裁判員裁判のために新しく作られた「公判前整理手続」で審理の予定を決めて、公判になってから新しい証拠や主張が出ることはない建前だが、実際には証人の証言などから、整理手続では出ていなかったことが、出て来ている。しかしその場合でも、公判が連日、日いっぱい、法廷で出てきた新しい証言などについて、被告と弁護士が打ち合わせすることすら困難で、まして反証を探すことは不可能になる。

「被告は犯人ではない」と無罪主張をする事件はまだないが、多くの事件で、素人である裁判員からも「審理が不十分だ」という感想が出ているほどだ。今後冤罪が争われる事件で、真相を解明するために必要な審理ができるのか危ぶまれる。英米の陪審裁判をはじめ、ヨーロッパ大陸の参審制でも、裁判長が時間を切り詰めて被告側の防衛活動を制約するようなことはしていない。裁判員制度を導入した日本の刑事裁判は、こんなに審理を端折って、一体どこへ行くのか。

2、ビジュアル裁判で失われる真実

「裁判員に分かりやすくするため」に、公判に、パワーポイント、コンピューター・グラフィックスなどのメディア機器を使う「ビジュアル化」が行われているが、裁判という手続きの性質からして、それが許されることなのか、非常に疑問なところがある。

たとえば刺し傷の部位や程度を示すCGは、捜査側の誰かが作成する。裁判員が直接その傷を見るのと違うのは勿論、それを写した写真とも違って、作る人の判断が入るという性格（伝聞性）を避けられない。伝聞性で客観性・正確性が失われ、正しい審理ができない結果になるので、伝聞証拠は禁止するのが刑事訴訟法の原則だ。作られたCGが、もとの傷そのものの、あるいは写真とどう違うかも、裁判員には確認できないことを考えれば、問題の重大さが理解できるだろう。全国一号事件の弁護人は、「現実の傷を写した写真よりも、検察官が出してきたCG（人体にナイフが刺さった絵）の方が残酷性がより強く感じられた」と言っている。

本来メディア機器を裁判に使う意味は、それが客観的だからだ。イギリスでは、犯行現場などを陪審に見せるために、現場を撮影したビデオを、解説など一切つけずに、無言でそのまま通して法廷で上映する。捜査官の主観を可能な限り排除するためだ。視覚化するならば、こういう使い方をすべきだが、日本の裁判員制度での使い方は、逆に、捜査官や検察官の主観が、より強く入る使い方になっている。今後、被害者の傷が、本当に被告の持っていた刃物で出来た傷なのかが争われる事件などで使われれば、大きな間違いが起こり得る。

3、「調書裁判」の新たな形

現代の刑事裁判は、証人が直接、法廷で自分の口から事実を語り、反対尋問を受けることによって証言の正確性を試される「直接主義・口頭主義」が、万国共通の原則だ。日本でも法律上

は、そうになっているが、従来は事実上ネグられて、捜査官が作る「供述調書」を証拠に使う「調書裁判」が行われていた。「直接主義・口頭主義」は、素人の裁判参加には、とりわけ欠かせないので、これで日本の刑事裁判もやっと近代化すると思つて裁判員制度に賛成した人も多かったのだが、フタを開けてみるとそうはならなかった。被告や証人の「供述調書」を法廷で検事が読み上げて、証言の代わりにするやりかたが多用されている。しかもその調書は、取調べの最後に、検察官が法廷での立証を見越して法律的にそつがないように作つた「仕上げの調書」だ。捜査官の見方で事件の事実が語られるのが「調書裁判」なのだが、それが、より精錬され、しかも1で書いた「切り詰められた審理」では、証拠とされた「調書」の内容が正確なのか、事件の真実を伝えているものなのか、これまではできていた程度の吟味をする時間もない。

4、裁判員の質問

これまでのどの事件でも裁判員が証人や、多くは被告に質問し、メディアはそれを「裁判員制度の成功の証」のように報道してきた。しかし公判での質問（交互尋問）には、厳しいルールがあり、裁く側（裁判官・裁判員）は、当事者の尋問していない事項を、質問してはならない。しかし、報道で見ると、「裁判官がそのルールを裁判員に教えていない」としか思えない。

被告を一方的に糾弾したり、非難するだけだったりの「質問」も見られる。これでは「市民が裁く」ことが、被告の反感を生むだけになり、更生を妨げる虞おそれもある。

5、守秘義務の壁

メディアが「裁判員の質問」ばかりを追うのも、他に「裁判員裁判らしさ」として報道できることがないからに、ほかならない。本来の「らしさ」は、裁判員が「評議・評決」によって判決を決めることにあるはずだが、それが罰則付きの守秘義務に阻まれて取材も報道もできないからだ。「判決後の裁判員会見」には、裁判所職員が同席して、予め釘を刺されている裁判員は、その顔色を見ながら当たり障りのない発言に終わる。事後に職員が「この発言は報道しないように」とメディアに言うこともあり、メディアは、それに従っている。これでは市民参加が司法をどう変えたのか検証できない。アメリカでは判決後は陪審員が評議・評決の内容を自由に話し、それが制度を検証し発展させる不可欠の資料とされ、陪審制度は日々改善されている。

6、裁判員判決 厳罰と同情の二極化

裁判員裁判の判決はくつきり二分されている。介護疲れからの父親への殺人未遂など、裁判員にとって「たまたま間違いを犯してしまった隣人」と感じられる被告には従来より軽く、励ましの「メッセージ」をつけたりする。自分たちと異質な「犯罪者」「社会の敵」と感じる相手には、重い。そんな被告も同じ人間であることを理解するためには、裁判はあまりにも短いのだろう。

（弁護士／九州大学・新潟大学・一橋大学大学院講師、山梨学院大学法科大学院教授を歴任）

「五十嵐 二葉のゼミナール」Ⅱ

「人を裁く」 って何?」

尋問は難しい

裁判員第一号事件、二号事件、三号事件でも、ほとんどの裁判員が質問しメディアはその都度大きく取り上げた。

しかし尋問は、裁判に携わることを仕事にしている弁護士や検事にとってすら、最も難しい仕事だ。東京地検では、裁判員裁判に向けて、検事たちに、「尋問演習」を繰り返してきた。弁護士会も法廷技術の勉強会をしている。

「尋問技術」「供述の心理学」といった本が、世界中で何十冊も背かれ、法律職に携わる人は読んで勉強している。尋問は生徒が先生に判らないことを聞くように、単純に知りたいことを聞けば、望む答えが返ってくるものではない。

人は誰でも、自分にとって不快なことでも、聞かれたことをすべて正直に答えるわけではない。思い違いも、言い間違いもある。証人が嘘を言っても、否定しても、最後には真実を言わざるを得ないところに詰めていくのが裁判での尋問なのだ。

東京の一号事件で、初めて裁判員がした質問が、大きく報道された。

この事件では、「被害者の人となり、殺人につながるトラブルの原因となったか」が問題で、証人（被害者の長男）の法廷での証言と、警察官が作った彼の供述調書とは食い違いがあるが確認したのかという質問だったのだが、証人はその調書を「読んだかどうかとも覚えていない」と答えただけで、裁判員は「はい。ありがとうございました」と言って尋問を終わってしまった。

この尋問は、「食い違いがなぜできたのか」から、法

証言と、どちらが真実だったのかを糾すための質問の
はずだが、裁判長が「裁判員の意図を補足」と報道され
た尋問をしたが、裁判員は途中で引き下がってしまった
ために、警察の供述調書は「証拠としての価値がない」
という証拠（法廷尋問調書）を作ってしまう結果で終わ
っている。

二号事件でも、裁判員から、「弁護側の冒頭陳述で『能
無し、早く金を返せ』という暴言がありました、言い
ましたか」と質問があり、証人（被害者）から、「ない
です」と言われ、裁判員は、「ありがとうございます」
と、そこで尋問を終わっている。

プロがしたのであれば、目的を達しない、落第の尋問
だ。そして尋問は、目的を達しない場合には、成果ゼロ
ではなく、逆の結果、マイナスになるのだ。

昨日も学者と弁護士の裁判員実務の研究会で、有能な
若手弁護士から、あるテーマについての尋問は「難しい。
僕にはできない」という声があがった。プロだから怖さ
がわかるのだ。

市民参加の歴史が長い欧米では、市民裁判官は、ほと
んど、質問をしない。尋問の難しさ、質問をすること、

証拠を作ってしまうことの重大さを、知っているからだ。
「裁判員が質問した」という、そのことだけを、裁判
制度の成果であるかのように報道するメディア。本来の
市民参加制度のハイライトである「評議・評決」につい
て、「守秘義務」の壁に阻まれてアクセスできないことが、
「質問した」ことだけで、成果にしてしまう大きな理由
なのだが、刑事手続の目的は、「事案の真相を明らかに
する」こととしている刑事訴訟法第一条を思い出して
ほしいものだ。

お説教も難しい

「黄色い髪 公判までには切りなさいと 言う我 弁護
人を 少年は鋭く見返す」

二十数年前に担当した事件のあとで詠んだ短歌だ。

暴走族だった少年の今で言えば茶パツは、当時はまだ
珍しかった。裁判官の印象が悪いので、いま切っておけ
ば、公判までには黒い髪が少しのびると思って、初めて
の面会の時に、言ったのだが、少年の、それまで穏やか

だった目が、射るようになった。

「自分のためを思ってた言っているのだ」とはわかる。でもその髪は、不遇な彼にできる、たった一つの自己主張の方法だったのだ。「切れ」と言うのは、もつと何回も面会をして、心が通じ合ってからでなければ、いけなかったのだ。忘れられない。

裁判員裁判も三例目になって、自信が出てきたのか。

あるいは被告人が若いから？ 事件が強姦という殺人より軽い犯罪だから？——青森地裁の事件では裁判員の質問が、お説教とでもいうものになってきた。

空き巣に入って、物色中に帰ってきた女性を強姦した被告を、「どうして逃げなかったのか」と聞いた。女性裁判員は、「今考えれば逃げられたが、急に人が帰ってきて、足がすくんで扉に隠れた」と返事した被告に「その時、逃げていたら、Aさんの事件は、なかったと思うのになえ」。

「白髪交じりの男性の裁判員」は、「一八万円の給料から借金を払った後で、飲み食いするのが普通感覚」だ。それをやらないで、なければ盗みに入るのか」「そこが一番残念。普通ちよつと考えられないわけなんです」

と「身勝手な被告論す場面も」(朝日新聞9月4日付)

刑事事件を起こす人は、皆、不幸を抱えている。心身ともに幸せに育てられた子どもは、決して犯罪者にはならない。犯罪を犯した人は、良いことをしたと思ってい

るのではない。「普通ならこうする」「こうすべきだ」とお説教をしても、彼／彼女は、そんなことは百も知っている。知っていてもできなかった人が「ほんとにそうだった。これからは言われたようにしよう」と思うようになるのは、言った人が、自分のことをほんとうにわかって、我が身のことと思うからこそ言うのだ、と信じられたときだけだ。

裁判員裁判は、審理を短くするために、証拠を減らし、裁判員は、彼／彼女の人生のほんの一部、犯罪という特殊な頂点から見える氷山の一角しか知ることができない。裁判員とは比べものにならないくらい被告人のことを知り、唯一の味方の立場にある弁護人でさえ、被告人からそれだけの信頼を得られるとはかぎらず、その状態でお説教をしても、被告人の心には届かない。かえって一層、心を閉ざすかもしれない。

彼／彼女が、被告という立場上、裁判員には言い返せず、だから何も言わないとしても。あの茶パツの少年のように、鋭い目で見返すことすら、しないとしても。

裁判員の役割は、審理に立ち会って起訴された事件に正しい判断をすることだ。

裁く立場になったから、論ずこともできる、と安易に思うことは危険だ。

自分の子どもだって、まずいことをした時にするお説教の仕方次第では、反省せず、却って反発されることは、わかっているでしょう。

映像裁判は正確か

これまでの、どの裁判員裁判でもそうなのだが、郡山の事件でも、法廷内には傍聴席から見える大型のスクリーン2つのほかに、裁判官、裁判員、検察官、弁護人、証言台の、それぞれの前に、小型のモニターがあつて、冒頭陳述や論告弁論でも、証拠調べでも、そこに要点をまとめた大きな文字や、図形、現場の見取り図や人体図

などの絵や写真が映し出された。

「素人である裁判員に、わかりやすいように、映像も使つて法廷活動をする」―裁判員裁判になつて始まつた新しい方法だ。

その方法が取られた多くの事件で、裁判員は、「検察側の説明は、わかりやすかつた」と言っている。弁護側はそうした映像資料をつくる技術や人手の点で、組織や新型の機器を持つ検察側になわなない。どうしても検察側に軍配が上がる。

郡山事件で、弁護人は、事前には、自分は映像は使わないと言つていたというが、実際には冒頭陳述をA3一枚の図にまとめたものを、プロジェクトorの上で移動させて映したのが一回と、検察側がつくつた「犯行再現」の写真のうち三枚を映しながら、被告人質問をしていた。裁判の映像化は、時の流れなのだろうか。

ただ、大変気になることがある。

まずパワーポイントなどで映し出される文字情報だ。郡山事件では、検察側証拠の供述調書は、画面を動かしながら、全文、モニターに映し出されていた。

しかし、事件によっては、内容を要約した大きな文字を映し続けながら、調書を朗読する方法もとられるだろう。すると裁判員には、その大きな文字の印象が強く、元の文章には書いてあった細かい事実の印象が抜け落ちてしまうおそれがある。つまり映された大きな文字が、裁判員の証拠判断になってしまう結果だ。

次に映像だ。映像は正確だと思われがちだが、実は、逆になることもある。

たとえば殺人事件で被害者の受けた傷がどんな傷だったか。――これまでの裁判では、法医学者が解剖で撮った、たくさんの写真と、分厚い鑑定書に文章で書いた解説（「鑑定意見」とその「理由」という）で、裁判官に学術的に説明されてきた。

しかし、裁判員に分厚い鑑定書を読んでもらうのは無理だし、死体や傷口などの写真は、残酷すぎて裁判員にショックを与えるうえ、理解しにくいということで、極く少数の写真のほかは、コンピュータ・グラフィクスなどを使つての絵を、モニターに映して見せる方法がとられている。

問題は、裁判員に伝えられる情報として、これで正確

だろうかということだ。

傷は、体の表面からの写真だけでは、「深さや体内での状態」は、わからない。だが、コンピュータ・グラフィクスは、実際の傷が自動的に絵に変わるわけではない。それを作った人が、自分の判断で単純化して作るものだ。厳密には証拠とは言えず、意見に近い。

郡山では、百科事典から映してきたような人体解剖図を映して、検察官が赤いライトで、傷の場所を示した。

これでは、さらに意見に近くなる。

裁判員裁判を経験したある弁護士が言っていた。人体に凶器のナイフが刺さっている絵が検察側によって作られ、モニターに映されたのだが、それは、実際の死体の状況より、ずっと残忍に見えるというのだ。

彼が担当した事件では、非常に重い刑が言い渡されたのだが、殺人の罪名を争わない事件でも、懲役五年から三〇年という大きな幅のなかで、刑を決めるのに、とくに一般人である裁判員は、犯行がどれほど残忍だったかに大きく影響されるだろうと言われている。その心証にインパクトを持つて迫る映像が、どう作られるかで、刑の重さが決められて行く。

そして効果的な映像を作る設備や技術を、一般の弁護士は持っていない。

機器や人手で優る検察の考え方が、裁判員に対して弁護側より大きな影響を与えるアンバランスな裁判になる危険性を、どのようにして防ぐか、まだ誰も解決策を持っていない。

「むかついて」いいのか

「むかつくんですよね」——仙台地裁の、強姦致傷事件の法廷で、十一月十九日、男性裁判員が被告に対して声を荒げて言ったと報道された。

この裁判員は被告に、「逮捕されて運が悪かったと思っ
ていませんか」と聞き、「思いません」。「今は二度と
繰り返さないという気持ちはありますか」「はい」など
とのやり取りが続いたあとで、さらに身を乗り出して、
「どれくらいですか」と聞き、被告がすぐに答えないと
いると「昨日からずっと同じ答えですよね」「もうしま
せん」とか「反省しています」とか、当たり前前の答えし

か返ってこない」と憤った。

「片手か両手かなんて関係ない(被害者の首を絞めた
時のことを言っている)。昨日からこの場で聞いていて
むかつくんですよね」と、強い口調で発言し、さすがに
裁判官が「もうその辺で」とさえぎってやめさせたとい
う。とんでもないことだ。裁判員になるということを履き
違えるのとはなはだしい。

自分は「裁く者」なんだ。悪いことをしたやつをとっ
ちめて、とことん反省させ、自分が良いと思う反省の言
葉と態度を示させる。そういう権限があるのだと思っ
ているようだ。

一体、どこで、そういう思い違いを身につけて、法壇の
上にのぼったのか。

過去のある時点で起こり、わずかな痕跡しか残ってい
ない「犯罪」と呼ばれる事実について、その場を見たわ
けでもない他の人間が、あとから、「事実はこうだった」
と一応決めなければならぬ。そのうえで、被告とされ
た人ひとりの自由や、死刑のある日本では命をも奪うと
決める。「裁く」とは恐ろしいことなのだ。

恐ろしいことだが、誰かが、それをやらなければなら

ない。職業としてそれを選ぶ人も、市民参加としてその立場に置かれる人も、少なくとも、間違つて人の運命を狂わせてはならないことを肝に銘じて、厳肅に、謙虚に、その判断をすることしかない。

このコラムのタイトルを「人を裁く」って、何？」としたのは、その怖さを根本から考えた上で、裁判員になつてほしいからだ。

大体、「もうしません」とか「反省しています」とか、当たり前のか。被告の中には言葉がとてもうまい人がいる。問題の裁判員が満足するような言葉を器用にならべて、軽い刑を勝ち取れる人もいるし、不器用で、きまりきった言葉しか言えないが、心から反省している人もいる。その裁判員はそれを見抜けるほど、犯罪と犯罪者を知っているつもりか。

犯罪は、その人のそれまでの生涯の不幸の現われだ。どのように裁かれるかで、不幸の中から、こん身の努力で正しく生きる決意をするかどうかが決まる。

裁く人から「むかつく」と言われた被告が、裁判というもの、社会というものに反感をもち、再犯を繰り返す

人になったら、その発言は、司法に対し、社会に対して、取り返しの付かない罪を犯したことにほかならない。

何のための守秘義務

鹿児島県内で初めての裁判員裁判は、一月二十六日に、被告の早期の立ち直りを期待した懲役五年の判決があり、裁判自体は「まずまずのスタート」と、報道された。ただ、判決後の裁判員会見で「評議の中で自分の意見が反映されたか」との質問に、地裁側が「評議の中身に及ぶ」と、待ったをかける問題が起こり、南日本新聞の社説も疑問を呈している。

鹿児島地裁のやりかたは、評議の秘密を非常に幅広く解釈していることになるが、これまで裁判員裁判が行われた各地の裁判所によって、守秘義務の解釈には、相当な違いが出ている。

静岡地裁浜松支部で一〇月三〇日に終わった裁判の後の会見では「四人の裁判員が、再び裁判員に選ばれることに難色を示し、うち一人は『重要なところは裁判員

の意見が反映されなかったと感じる」と、評議の進め方に不満を述べ「他の裁判員も評議への不満ととれる発言をした、と報じられたが、裁判所側は、「評議の秘密に当たるか協議し、違反に当たらない」と判断した。

裁判所によってこうした違いが出るのは、裁判員法七〇条「評議の秘密」が「経過並びにそれぞれの裁判官及び裁判員の意見並びにその多少の数」を漏らしてはならない、という漠然とした文章なので、裁判員制度のあるべき姿の根本的な考え方によって、条文の読み方が変わるからだ。

なぜ裁判員に「守秘義務」を罰則までつけて科すのか。これまでの裁判所側の説明では「自由な評議ができなくなるから」とされてきた。

先日、現職の裁判官とこのことで意見を交わした。彼は「と言うより、本音は、裁判の権威を守るためです。自分の判決が、五対四のきわどいところで有罪にされたなんて分かれれば、被告は司法に不信を抱くじゃないですか」と言う。

私は言った。「でも五対四は事実でしょう？ 事実をブラックボックスに入れることによって裁判の権威を守

ろうという発想は正しくないと思いますよ。スエーデンでは、参審員は自分の少数意見を判決書に書き込むことができます。裁判は人間のすることだから、間違いもある。一票の差で評決された認定が正しいこともあるし、間違っていることもある。事実をありのままに開示して、上級裁判所の判断に委ねるし、世論の批判にも委ねる。それが「討論民主主義」の時代と言われる現在の司法の権威ではないのでしょうか」と。

聡明な彼は、わかってくれたと思う。「自由な評議」を保障するためなら、個人名をあげて発言内容を明かすことを禁止すれば足りる。前にも書いたが、アメリカでは、判決後は陪審員が審理や評議について自由に公表する。

現在、世界共通になっている近代裁判手続・証拠法は、こうして今の姿に成長してきた。

日本も、遅れて導入した市民参加司法を正しく軌道に乗せるために、ブラックボックスを開いて意見を交わさなければならない。

（南日本新聞ウェブより承諾を得て転載）

「政權交代」雑感

牧 梶郎

八月三〇日の総選挙では民主党が圧勝し、五〇年以上続いた自民党政治が、ひとまず幕を閉じた。九月一八日には、民主・社民・国民新党の連立による鳩山内閣が発足し、臨時国会が開催された一〇月二六日には、鳩山首相の所信表明演説がなされ、現在は国会での本格的な論戦が始まっている。新政権発足からまだ二か月足らずであり、政權交代の恩恵は、まだ国民にまで及んでいないが、変化の兆しは、随所にみられる。本格的な検証は、これからの課題であろうが、政權交代について、この間、感じたことを、思い出すままに随想風に書いてみたい。

「政權交代」の功労者

選挙の投票日の夕方は会合があつたが、開票速報に間に合うように家に帰った。放送開始と同時に、民主党の過半数獲得が確実視され、政權交代が現実のものになっていた。

民主党のこれほどの圧勝は、選挙直前は、ともかく、一年前には、ほとんど誰も想像はしていなかったらう。

しかし、「このまま自民党に政治を任せておくわけにはいかない」という流れがあったのは、確かである。ただ、その流れに竿をさし、動きを加速するものがなければ、こうも見事に政権交替は、なされなかったらう。

一般的には、「今回の選挙は、自民党が破れたのであって、必ずしも民主党が支持されたわけではない」といわれている。そうだとすれば、政権交代の功労者は自民党であり、なかなしく党を率いた麻生総理大臣ということになる。たしかに、自民党の一年における最大の変化は、麻生太郎が福田康夫に代わって総理・総裁の座についたことである。麻生は福田の「無能」に、「無知」をつけ加えて、自民党の退潮にだめを押した、といえる。

一方で、「民主党を選挙で勝てる党へと変身させたのは小沢一郎だ」との声もある。参院選以来の農村行脚や、勝てる候補への絞り込みは、今回の選挙でも力を発揮したといえるだろう。公明党の太田委員長、北側幹事長、冬芝元幹事長に、選りすぐりの候補者を立ち向かわせ、揃って落選させたところなどは、なかなかであるし、長崎で薬害肝炎訴訟の原告女性を当選させたのなどは、見事というしかない。

しかし私としては、今回の政権交代選挙での最大の功労者は《年越し派遣村》ではないかと考えている。「日本の社会は、どこかおかしくなった」とは、誰もが漠然と感じてはいたのだろうが、その事実を形で示したのが、派遣村だったのだと思う。正月という、誰もがテレビを

眺める時期に、毎日のように画面に登場した、職も住居も食べるものもない若者の姿は、「なんで、日本は、いつからこんな酷い国になっちゃったのか、この国を壊しちゃったのは誰か」という思いを国民の胸にわき起こらせたにちがいない。それが、「もう自民党には政権を任せておけない」という国民の声につながったのだと思う。

民主党政権には大きな期待が寄せられているが、「民主党になって社会が変わった、変わらそうだ」と感じさせるためには、したがって、まず《派遣村》に見られた若者の貧困と雇用の問題に、はっきりした政策を打ち出すことではないか、と考える。

鳩山首相の政治手腕

小沢一郎が秘書の献金疑惑で民主党の代表を辞任し、鳩山由紀夫が後任として選ばれたとき、民主党支持者の多くは、そのリーダーシップに多少の懸念をもったに違いない。「寄り合い世帯的な民主党をまとめていくには、小沢のような豪腕が必要とされる」と、考えるからである。自民党の側も、そこに期待したと思われる。

ところが、強面（こわもて）の小沢が裏方に回り、ソフトな鳩山が前面に出ること、選挙は、かえって民主党に有利に進んだ。かくて政権の座を手にした鳩山だが、彼が首相としてのリーダーシップを問われる最初の局面が、組閣人事だった。

任命された各大臣の顔ぶれを見てまず感じたのは、ある種のアンバランスである。社民党の

福島党首や国民新党の亀井代表はもとより、菅、岡田、前原、藤井などといった実力者や論客を揃えた半面で、名も知らず、いかにも頼りなさそうな大臣も、何人かいた。この顔ぶれを、鳩山首相は、きちんとまとめていけるのか？

しかし、夜半を過ぎてからの記者会見では、各大臣とも、鳩山首相から指示されたという政策課題を真剣に語っていた。これまでの自公政権による組閣記者会見では見られなかった情景だった。

鳩山総理に任命された各大臣は、その後もマニフェストにもとづいて、それなりにがんばっている。特に前原の国土交通相への起用は、なかなかのヒットかもしれない。八ツ場ダム中止を言明して譲らないところや、国家が管理するダム関連予算を凍結したことなど、目立ちたがり屋の前原としては格好の課題とはいえ、まずまずの仕事ぶりといえよう。本人は、もつと格の高い大臣、例えば日米関係を担当する外務大臣などを狙っていたのかもしれないが、組閣の翌日からテレビに露出されるポジションであったことで、本人も、まんざらでもなかったのだらう。うるさ型の前原を、ダム問題で手一杯にさせるのも狙いだったとすれば、組閣人事に見せた総理の手腕は、なかなかのものである。とはいえ、普天間基地移転問題など、最近では、閣内の意見の不一致が目立ってきており、総理の指導性が本格的に問われるのは、これからだろう。

「所信表明演説」の反響

鳩山首相は、一〇月二六日の衆参両院の本会議で、就任後、初の所信表明演説をおこなった。

その一部をテレビのニュースで聞き、全文を新聞で読んだが、政治の抱える問題を、できる限り自分の言葉でわかりやすく語ろうとしたその姿勢は、悪くない。特に、「政治には弱い立場の人びと、少数の人びとの視点が尊重されなければならない。そのことだけは、私の友愛政治の原点として、ここに宣言させていただきます」や、「私は、『人間のための経済』への転換を提唱したいと思います。それは、経済合理性や経済成長率に偏った評価軸で経済をとらえるのを、やめようということです」といった言葉は印象的である。そのせいか、読売新聞社説も「エピソードを交えた、平易な言葉による演説に、政権交替を実感した人もいたに違いない」と評し、産経新聞の主張も「役所言葉を排し、国民へのわかりやすさを強調したかったのだろう。首相としては、最初の国会演説を脱官僚依存にふさわしい内容となるよう、工夫を凝らしたといえる」と、そのところは認めざるを得なかったようだ。

ただ、そこは自民党政治を長年支えてきた両新聞であり、このままで終わるわけがない。

「理念だけでは政治は動かない」「理念は、法案や政策として具現化されねばならない」(読売)、「政策を、具体的にどう実現していくか、が明確に示されておらず、説得力に欠ける」(産経)と、結局は、「政策の具体性が明言されていない」と難癖をつけるのを忘れていない。両紙とも最大の懸念は日米関係で、「懸案の米軍普天間飛行場の移設や、海上自衛隊によるインド洋での給油活動について、明確な方針を示さなかった」、「海外に派遣する自衛隊が、より能力を発揮するには、憲法改正や集団的自衛権の行使容認に踏み込むことが求められる。そうした言及がないのは、現実性に乏しい」と、外交政策でのマニフェストからの軌道修正を要求している。

しかし、「所信表明」とは、「施政方針演説」とは異なつて、もともと本人が信じているところを述べることであり、政策の具体化などより、どのような理念に基づいてこれからの政治を行うのかをはつきりさせることのほうに眼目がある。その意味では、所信表明に盛り込まれた《いのちを守り、国民生活を第一とした政治》、《居場所と出番》のある社会、「支え合つて生きていく日本」、《人間のための経済へ》、《架け橋》としての日本といった理念には、これまでの政治には、絶えてなかった「人間」へのまなざしがあり、その面は大いに注目される。朝日新聞社説の、「さまざまな格差や痛み、制度のほころびが深刻になる日本社会にあつて、正面から『社会の作り直し』を呼びかけた率直さが、新鮮に響いたのは確かだ」という評価は妥当だろう。

その上で「所信表明」をつぶさに読んで、気にかかるところがある。それは、「さまざまな格差や痛み、制度のほころびをもたらししたのは何か」という点で、その責任を、へしがらみや既得権益にもとづく政治家と官僚のもたれあい」に求めてはいても、決して財界には向けないことである。この点では、「家庭内暴力や殺人に見られる家庭崩壊には、従業員を人間扱いしない経営者に責任がある」と日本経団連を批判した亀井金融大臣のほうが、はるかに的を射ている。

そのせいか、鳩山首相の所信表明演説に対して、日本経団連御手洗会長は、「日本の将来の発展を見据えて政治を大きく変えていこうとする意気込みが十分に伝わってくる、メッセージ性の高い所信表明だ。力強かった」（二七日付毎日新聞）と評価しているらしい。こんなところにも、鳩山政権の内包する弱さがあり、表明された理念を 政治の具体に実現していく上で、米国だけでなく国内にも、大きな障壁があることが予想される。労働者派遣法の抜本改正をめ

ぐる攻防では、労働政策審議会での経営者側の強烈な巻き返して、早くも民主党政権が動揺をきたしていると聞く。やはり、最後は「市民がさまざまな運動を盛り上げることなしに、変革は期待できない」ということだろう。

左翼の反応

総選挙の翌日に、共産党は声明を出し、まず冒頭で「国民の暮らしや平和を壊してきた自民・公明政権が、国民のきびしい批判を受け、歴史的な大敗を喫し、自公政権は退場することになりました」「有権者・国民がくだしたこの審判を、日本の政治にとっての大きな前向きの一步として歓迎するものです」とし、今後は、民主党政権に対して「良いことには協力、悪いことにはきっぱり反対。問題点はただす」という立場で、「現実政治を前に動かすために奮闘」する、とした。

今回の政権交代に関し、伝統的左翼諸党派は「自公政権の退場」を評価し、概して好意的であるのに対して、よりラジカルな新左翼系党派は「本質的に何も変わらない」と、やや冷淡なようである。これは、伝統的左翼は、長い間、自民党と議会で対峙して負け続け、その手ごわさを思い知らされてきただけに、その敗北・敗退に、ひととき感慨が大きかったから、と思われる。一方、新左翼系は、反体制・反権力ということでの街頭運動中心で、議会政治の具体にかかわってこなかったために、「民主党であろうとも政権党は所詮国家権力だ」という意識が

強いせいであろう。

一方で、今回の政権交代を《官僚政治の打破》という観点から評価する左派は、新旧左翼、おしなべて少ないようである。それは、生産手段への関与の仕方で「階級」を定義し、「権力は階級間（資本家vs労働者・農民）で争われる」というマルクス主義の階級闘争論にとらわれ、「官僚は、階級ではなく、権力さえ取れば、後はどうにでも手なづけることのできる動揺する階層でしかない」と考えているからだろう。

しかし、明治以来の日本の歴史をつぶさに見れば、独自の利害をもったグループとして、官僚が国家の統治システムを今日まで一貫して動かしてきたという事実には、リアリティがある。日本の国民に市民社会を成立させる基礎である〈自立・共同の精神〉を根づかせず、江戸時代以来あいかわらずの「お上意識」を植えつけ続けたのは、何よりも官僚による「由らしむべし、知らしむべからず」の中央集権的統治であった。それは、元勲政治の明治初期だけでなく、国会開設後も引き継がれ、敗戦後も形を変え、百数十年にわたって生き残ってきた。

この「知らしむべからず」の対象は、日米間の各種密約に見られるように、時に、政治家や経済人にまで及んでおり、政・官・財の黄金のトライアングルを支えてきた要は官僚だった、といってもいいだろう。その官僚が実質支配する政治へ、「政権党が責任を持つ政治家主導の政治へ」の転換を目指すという民主党が、内閣を作って挑戦するのである。それは、〈維新〉といっている事態かもしれない。

とはいえ、自民党はともかく、官僚が、このまま手をこまねいて政治家に屈するはずはない。

必要な情報を隠したり、過剰な情報を流したり、抜け穴だらけの法案を作ったり、手練手管をいろいろ使って抵抗するはずである。「天下りの禁止」では、早くもその兆しが現れている。彼らの望みは、「抵抗している間に民主党の支持率が下がり、来年の参議院選挙で議席を減らし、来たるべき衆議院選挙で自民党が政権党として復活すること」であろう。

こうした官僚の抵抗を抑さえ、マニフェストにある国民的課題を実行していくために民主党に求められるのは、共産党が掲げるように、「官僚よりも事に通じる努力」と「国民運動との共同で政治を動かす姿勢」でしかないだろう。年越し派遣村が厚労省の講堂を解放させたように、官僚を抑えるには市民運動との連帯が何よりも重要であるが、今は、課題の選別とスピードが必要とされている。

その後と今後

以上を書いてから一月ほどだったが、この間、鳩山首相の指導力を問うようなマスコミ報道が続いている。その最たるものが、普天間基地の移設問題をめぐっての報道であろう。防衛相や外務大臣が早々と「県外・国外移転は無理である」旨の発言を繰り返し、自民党やマスコミからは「日米合意を守れ」「辺野古しかない」「年内決着」の大合唱である。一方で、社民党は、三党合意を基に、あくまで県外・国外移設を迫っている。そんな中で鳩山首相だけが、「最後は自分が決断する」として、すべての可能性を検討し続けるように指示を出してきた。とはい

え「日米合意は尊重するが、沖縄県民の切実な願いも無視できない」との立場は、たんなる「問題の先送り」であり「決断力のなさ」を露呈した、と見られかねない状況である。

十二月十五日に開かれた基本政策閣僚委員会では、与党三党の実務者協議機関で「辺野古への現行計画を含め、改めて移設候補地を検討する、期限は当面定めない」という政府方針を決定した。「日米合意通りであれば、初めから苦勞する必要がある」との鳩山首相発言からは、「可能な候補地の検討」が、単なる優柔不断から来たものではなく、対等な日米関係へ向けての確固とした信念であるらしいことが見えてくる。マスコミは「米国の反撥は必至」と、あいかわらず米国の顔色を伺っているが、そもそも基地を貸すかどうかの決定は日本の主権に属するはずなのに、拉致問題の時と違って、マスコミが一切その点を指摘しないのも不思議である。政権交代により、政治の五五年体制はようやく終焉を迎えたが、マスコミは、あいかわらず旧い思考回路から脱け出られないということだろう。

民主党の今後に要望されるのは、国民の期待が大きく、官僚が反対しにくく、かつ連立内閣として合意している問題、すなわち、労働者派遣法の抜本改正、障害者自立法の応益負担の廃止、後期高齢者医療制度の廃止、高校学費の無料化、核密約問題の再調査と公開、などを市民運動と連帯してすみやかに実現することである。これらの問題を「先送り」するようだと、民衆の決断力のなさが疑われることになるだろう。繰り返すが、「課題の選別とスピード」こそが、改めて問われている。



責 任

堀場 清子

一九四五年八月

ポツダム宣言を受諾して

日本が無条件降伏をしたとき

中国北部の山西省では

軍司令官澄田贖四郎中將率いる

北支那派遣軍第一軍の將兵 五万九千人が
八路軍と対峙していた

「山西皇帝」と呼ばれた軍閥の閻錫山は

日本軍によって 省都太原を追われ

西南部の山岳地帯に逼塞していた

降伏に先立つ七月末

重慶の連合国戦争犯罪委員会極東太平洋小委員会は
湖南・武漢の作戦での残虐行為に関し
時の師団長だった澄田を

戦犯に指名していた

（米軍の占領下にある日本に帰国すれば
裁判にかけられる恐れがあった）

この三つ巴の情況が

いまだに解決を見ない悲劇の因をなした

閻錫山は

重慶の国民政府から受降長官に任ぜられ
第一軍は閻に降伏することとなった

閻は太原に帰還したものの

麾下の山西軍は弱体で

八路軍に抗しえないこと明らかだった

ポツダム宣言では

「日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除」されたのち

「各自ノ家庭ニ復帰シ」と規定していたが

閩は日本軍の武装解除をしなかった

それどころか 全軍が山西省に残留し

八路軍と戦うことを要求した

戦犯の澄田は 太原の高級住宅地に豪邸を与えられ

運転手付きの高級車と女中を配されて

晴れば釣り 降れば麻雀に興ずる日々だった

いかにすればポツダム宣言をすりぬけて

将兵を残留させうるか

第一軍首脳と閩側とで協議が続いた

将兵各個人の「自願」とし

現地除隊の形式をとって 復員手続きをすませる
というのが その結論だった



「特務団」と呼ぶ部隊の編成がはじまった

日本軍の体質は戦時と少しも変わっていなかった

上官の命令は やはり天皇の命令だった

「お前残れ」と命令されれば拒めなかった

残留を美化する宣伝も流布された

米軍占領下 危殆に瀕した天皇制を擁護する

焼け野原となった日本の復興をはかる

主力部隊の復員を助ける 等々

一九四六年春

主力部隊は山西省を離れ

二六〇〇人の特務団が残留した

武器に刻された菊の紋章こそ削ったが

日本軍の軍服のまま 日章旗を掲げ

「天皇陛下万歳」と叫んで戦死した

その数 五五〇人にのほり

七〇〇人以上が捕虜となる運命だった

一九四七年

八路軍は人民解放軍と名称をあらため

四八年に入ると 本格的な反抗に転じた

四九年四月 内戦の最後の部隊となった太原城は

三〇万余の解放軍に包囲されていた

陥落は時間の問題だった

すでに二月 澄田は日本軍の陣地を廻って

「日本から 二万の義勇軍を連れてくる」と放言し

閻錫山の用意した飛行機で太原を脱出

上海からアメリカの豪華客船で横浜へ帰った

(すでに東京裁判も終わり

彼にとって日本は危険な地域でなくなっていた)

三月 閻錫山も飛行機で脱出した

捕虜となった日本軍将兵には

さらに数年にわたる収容所生活が待っていた

辛い年月の後 ようやくに許されて

引揚げ船から舞鶴港に降り立ったとき

はじめて知ったのだった

「現地除隊」とされていたことを

軍命によって残留したにかかわらず

復員軍人として扱われないことを

軍人恩給が支給されず

戦死者の遺族にも その手当てがないことを

それらの不当を訴えて 裁判を起こすまで

さらに半世紀がすぎた

「軍命」を証する資料を揃えたにかかわらず

裁判は全面敗訴だった 控訴審でも同様だった

最高裁は一度も審理を開かず 上告を棄却した

命令のままに戦った自分たちを

「蟻の兵隊」と元兵士らは自嘲した

「脱走兵」の罵言も浴びた

それにしても軍司令官たるもの
戦争が終わったからには

部下の将兵を無事に家族のもとへ返す責任はないか

最後の一兵が引揚げ船に乗るのを見届けた上で

自身の処理を決すべきではなかったか

それが責任というものではないか

敗戦後の中国全土では

五万人の日本軍将兵が戦死したという

(そのひとりひとりを 妻が 母が

どれほど切なく待ちわびたか)

それほど多くの

責任を果たさぬ司令官がいたということか

注、奥村和一・酒井誠「私は「蟻の兵隊」だった」(岩波書店)、

池谷薫「蟻の兵隊」(新潮社)、米濱泰英「日本軍「山西残留」

(オーラル・ヒストリー企画)による。

NPO 平塚らいてうの会
2010 年 らいてう講座

小森陽一さん



「漱石とらいてう」を語る

大学の授業はもとより、憲法 9 条にかかわる大中小の市民学習会や講演会での講師、講演、先日はテレビで太宰治について文学者として深く語った小森陽一さん。まさに神出鬼出、没する暇なしの小森陽一さんを、ついに「らいてう講座」にお招きすることができました。

そうです、小森さんはそもそも漱石の研究家なのです。漱石とらいてうは、同じ 2 月生れの 19 歳違い、らいてうが 25 歳で『青鞥』を発売したとき、漱石は 44 歳でした。もし、漱石がもう少し長生きしたらー。

小森陽一さんのプロフィール

東京大学大学院総合文化
研究科教授、「九条の会」事
務局長、1953 年東京に生れる
北海道大学、同大学院に学

新しい時代の最先端を走る小森さんが、漱石とらいてうを現代に引き寄せて、どんな出会いに私たちを誘ってくださるでしょうか。是非多くの方のご参加をお待ちしています。

日 時 2010 年 2 月 13 日 (土)

午後 1 時 30 分～4 時

場 所 東京文化会館 4 階大会議室

(JR 上野駅 公園口から 1 分)

参加費 500 円

主催・お問い合わせ先

NPO 法人平塚らいてうの会

〒112-0002 文京区小石川 5-10-20 5F

TEL/FAX 03(3818)8626

北朝鮮の法律家との出会い

弁護士 笹本 潤

二〇〇九年の六月に、ベトナムのハノイで、法律家の国際組織である国際民主法律家協会（IADL）の大会がありました。大会は四年に一度開かれ、平和や人権の問題で活動する法律家（弁護士・法学研究者）が、世界中から多勢集まります。

今回は、全部で四〇〇人の法律家が世界中から集まってきましたが、その中でも特に注目したのは北朝鮮の法律家でした。私は、アジアのNGOの集まりに出ることもありますが、北朝鮮の市民と出会うのは初めてで、貴重な経験でした。

そして、この国際大会が開かれた二〇〇九年六月という時期は、北朝鮮が、四月に人工衛星ロケットを発射し、五月に核実験を行った直後でした。ですから、北朝鮮の法律家が、世界やアジアの平和について何を語るかに注目していました。

北朝鮮の代表と言っても、あくまでも一人の法律家にすぎません。しかし、通常のNGOとは違い、彼らの発言は北朝鮮政府にかなり近い考えだと思えます。

*

平和の分科会では、世界の平和や核廃絶について議論がされました。

まず北朝鮮の法律家は、「二一世紀を平和の世紀にしなければならない」というところから始め、イスラエルのパレスチナ人に対する虐殺やガザ侵攻を非難し、「国家の主権が侵害されていること、アメリカのイラク侵攻やアフガン攻撃は、国連憲章にも反すること」を述べました。イスラエルやアメリカの軍事行動には非常に批判的です。この点は、他の国の法律家とも同じスタンスです。そしていよいよ東北アジアの情勢に入ります。

「二一世紀には、アジアは世界の経済の牽引車となり、二一世紀はアジアの世紀になる」と言います。大きな視点でアジアを捉えています。

「アメリカは、東北アジアを、ロシア・中国を牽制するために戦略的にコントロールしようとしている。東北アジアの緊迫した状況は、今でも残っている冷戦の影響でもある。」

「冷戦終結後、アメリカは、ヨーロッパでは兵力を減らしたが、アジア太平洋地域では兵力や兵器を温存している。東北アジアにはミサイル防衛が導入され、新しい軍拡競争が始まっている。軍事施設も年々増えている。」

「アメリカは韓国における軍事力を増強しようとし、戦略的機動性を果たそうとしている。韓国の米軍基地は再編されてきて、アジア大陸全域における軍事行動を支援するためのものになっている。」

と指摘します。

アメリカの冷戦後の世界戦略と米軍再編の現状分析も、しっかりしています。東北アジアに今でも冷戦構造が残っているのは、このようなアメリカの軍事戦略に原因があると私も思います。「アメリカは、フオール・イーグル、フリダム・ガーディアン、リムパックなどの一連の共同軍事演習を行なってきた。韓国やアジア太平洋地域の軍事力を高めようとしている。」「アメリカは、すでに北朝鮮、中国、ロシアを、先制核攻撃の仮想敵国としている。朝鮮戦争で戦争が起これば、大変恐ろしいことになる。超大国同士の争いが世界大戦に発展するおそれ大きい。」

「朝鮮戦争の非核化の最大の障害がアメリカにある。アメリカは、この地域を軍事的に圧倒しようとする戦略を推進している。東北アジアの平和を守るために、アメリカは軍隊と基地を引き上げるべきだ。韓国と日本からも引き揚げ、核兵器を想定した軍事演習、ミサイル防衛もやめるべき。」

と、アメリカが東北アジア、朝鮮半島の平和に与える軍事的な脅威を指摘します。

そして、日本についても、

「同時に、日本が核武装しようとしている動き、日本が軍事大国になってこの地域の覇権を広げようとする動きを阻止するべきだ。」

「日本はすでにアメリカや西欧に次ぐ軍事大国である。日本の軍事支出は約五〇〇億ドルに及んでいる。日本は、核兵器を製造する技術は世界で最大で、運搬手段でも世界的な技術を持っている。核兵器を四千発作れる大量のプラトニウムを保有し、いつでも核武装しようと思え

ば核武装できる。」

と、日本の軍事的な脅威を警戒しています。

この点は、北朝鮮の人だけが言っているわけではありません。日本ではあまり報道されませんが、韓国やフィリピンなど、他のアジアの国の人も、日本の軍事大国化の動きに対する動きを警戒しています。この発言で取り上げられている、軍事演習、ミサイル防衛、核武装化の動き、そして9条改悪の動きなどは、すべてアジア諸国にとつての脅威となっています。

「現在、日本とアメリカは、北朝鮮が東北アジアや朝鮮半島の安定を阻害している、というイメージを植え付け、日米の国民をだまそうとしている。北朝鮮を軍事的脅威と宣伝する一方で、米軍再編、共同軍事演習によって、日米は軍事力を高めようとしている。」

「理性的な人であれば、北朝鮮が日米に先制攻撃するとは、もちろん考えないであろう。アメリカが北朝鮮に攻撃しない限り、北朝鮮から攻撃することは、考えられない。朝鮮半島の人びとは五〇年以上、戦争の脅威にさらされてきており、平和を希求している。」

と、アメリカの軍事行動が東北アジアに与える影響や、マスコミを使った宣伝を強調します。四月五日の人工衛星の発射や、五月の核実験については、

「北朝鮮とアメリカで対立を解決し、平和条約を締結すべき。アメリカは核使用の脅しなど、ブッシュ時代の政策をやめるべき。」

「北朝鮮は、人工衛星を打ち上げる権利がある。発射に関しては、事前に通告もしてきた。四月五日の人工衛星の発射の後、国連の安保理で議長声明が出されたが、アメリカが提案し、

北朝鮮への制裁が厳しくなった。」

「このようなアメリカの脅威のもとで、私たちは、どうやって生き残ればいいのか。私たちは自己防衛力を高めないと生き残れない。一番大切なことは南北の対立を解決し、平和条約を締結し、韓国からアメリカ軍をなくすことである。」

と、北朝鮮の自己防衛の必要性を強調します。

*

北朝鮮の法律家の発言は、今の東北アジア、朝鮮半島をめぐる軍事的緊張の実態と原因を、的確に表しているのではないでしょうか。

北朝鮮が、アメリカ・日本・韓国の軍事的脅威に対して、ミサイルの発射や核実験などの軍事的手段で対抗しているのかどうかについては、議論のあるところだと思います。しかし、少なくとも、北朝鮮がアメリカなどの軍事的脅威があるために、対抗手段を取らざるを得なくなっていることは、理解できます。北朝鮮の軍事的行動が、決して「何をするかわからない国」というだけだとは、片づけられないことを意味します。

今後重要なことは、アメリカの核の脅威をなくし、東北アジアの軍事的緊張を少なくするためにも、オバマ大統領が言った「核なき世界」の方向で、核保有国の大幅な核削減を実現していくことです。それこそが、北朝鮮の核問題の根本的な解決になるのです。

二〇一〇年五月には、ニューヨークで核不拡散条約（NPT条約）の再検討会議が開かれます。五年前の前回の再検討会議では、ブッシュ大統領が核削減を議題にもしませんでした、



平和への権利の分科会

オバマ大統領になってからは議題になりました。この会議に向けて、アメリカなど核保有国に核削減を求めていく運動を大きくしていかなければなりません。この課題は、私たち東北アジアの平和にも直結するのです。

さらに、北朝鮮の核問題が、今後解決の方向に向かうかどうかは、今後の日本の9条改正論議にも影響します。北朝鮮をめぐる軍事的緊張が解決されずに、さらなるミサイル発射や核実験が起これば、日本の改憲勢力は必ず「北朝鮮の脅威」をあり、9条改正の動きを加速させていくでしょう。その意味でも、朝鮮半島の情勢、世界的な核廃絶の動きの帰趨から目を離せません。

東北アジアの軍事的な問題は、世界的核廃絶の運動、日本の9条改正反対の運動と、切っても切り離せない関係にあるのだと思います。

(2009・11・27)

(右から) じゅん／日本国際法律家協会事務局長

明治は「栄光の時代」だったのか 司馬本『坂の上の雲』に異議あり

福田和男

NHKが二〇〇九年十一月二九日の日曜日から放映するスペシャルドラマ『坂の上の雲』の影響を懸念する声が高まっている。この番組は二〇一一年まで一三回、毎回九〇分の大規模企画で、一回に大河ドラマ数本分の制作費をかけていると言い、出演者も、渡辺謙(語り)、阿部寛、本木雅弘、香川照之など、豪華な顔ぶれとなっている。番組PRのため、『坂の上の雲』ゆかりの地を訪ね、明治という時代と現在を浮かび上がらせるという趣旨のミニ番組が、二〇回の予定でスタート、地元の松山放送局では、十月に、秋山好古・真之兄弟や、正岡子規、東郷平八郎ら登場人物のパネル展を開催した。NHKは、番組の企画意図をこう説明している。

「二一世紀を迎えた今、世界はグローバル化の波に洗われながら国家や民族のあり方をめぐって混迷を深めています。その中で日本は、社会構造の変化や価値観の分裂に直面し、進むべき道が見えない状況が続いているのではないのでしょうか。『坂の上の雲』は、国民ひとりひとりが少年のような希望をもって、国の近代化に取り組み、そして存亡をかけて、日露戦争を戦った、『少年の国・明治』の物語です。そこには、今の日本と同じように『新たな価値観の創

造に苦悩・奮闘した明治という時代の精神」が、生き生きと描かれています。この作品に込められたメッセージは、日本がこれから向かうべき道を考える上で大きなヒントを与えてくれるに違いありません」

「祖国防衛戦争」論

憲法で表現の自由が保障されている以上、番組の中止を求めるつもりはないが、『坂の上の雲』には、いくつもの史実の誤りがあり、これを正しておくことは、視聴者のためにも重要と考える。司馬は、生前、『坂の上の雲』は、なるべく映画とかテレビとか、そういう視覚的なものに翻訳されたくない作品でもあります。うかつに翻訳すると、ミリタリズムを鼓舞しているように誤解されたりする恐れがありますからね」と話している。それを押しのけた上での、今回のテレビ放映には、背後にどんな動きがあったのかも、気になるところだ。

『坂の上の雲』は、一九六八年四月から一九七二年八月まで産経新聞夕刊に連載され、単行本、文庫本を合わせて、これまでに二千万冊が売れたという。一言でいえば、明治を「栄光の時代」と描き、日清・日露の戦いは「祖国防衛戦争」と位置づける。アジア太平洋戦争は批判するが、それも、「参謀本部が明治の先人たちの良き教えを引き継がなかったからだ」と分析する。とくに看過できないのは朝鮮に対する見方で、例えば次のように書いている。

「そろそろ戦争（日清戦争）の原因にふれねばならない。原因は、朝鮮にある。といっても、

韓国や韓国人に罪があるのではなく、罪があるとすれば、朝鮮半島という地理的存在にある」「韓国自身、どうにもならない。李王朝はすでに五百年もつづいており、その秩序は、老化しきっているため、韓国自身の意思を力でみずからひらく能力は、皆無といってよかった。」「日本は、その歴史的段階として朝鮮に固執しなければならぬ。もし、これを捨てれば、朝鮮どころか日本そのものもロシアに併呑されてしまうおそれがある。この時代の国家自立の本質とは、こういうものであった」

朝鮮民衆の戦いを弾圧

簡単に言うと、「気の毒なのは朝鮮の地理的位置で、朝鮮は無力で、帝国主義時代の宿命下にあった」という趣旨である。「遅れた国は、植民地になる運命にある」という、吉田松陰や木戸孝允ら、幕末から明治維新期にかけての「征韓論」と通じるものがある。折しも来年、二〇一〇年は「韓国併合一〇〇年」。この考えを韓国や北朝鮮の人びとが受け入れるはずはない。明治に移る一〇年前の一八五八年（安政五年）、日本が米国と修好条約を結び、鎖国を解いて自由貿易を開始したのに比べると、朝鮮の李王朝は、依然として鎖国と封建社会に固執していたが、それを民衆が撃ち破ろうとしていた。数十万人が蜂起した「東学農民党の乱」（韓国では「東学農民革命」と呼ぶことが多い）は、一面では、日本やヨーロッパの朝鮮への侵入に対する「斥洋斥倭」という要求も掲げていたが、農民の主な攻撃対象は、腐敗した地方の役所・役人だった。それに、日本が出兵し、弾圧した。東学農民党軍を韓国の南端に追い詰め、三〜五万人

を殺害したとされる。東学農民党の鎮圧で、日本軍は韓国にとどまる口実を失ったにもかかわらず、撤退をこぼんだ。その結果、朝鮮と旅順などを戦場にした日清戦争が始まったのである。「朝鮮から清国軍を追い出す」という、「清との戦争の口実」を得るため、景福宮を攻撃し、朝鮮国王を拉致した。さらに、日清戦争後の一八九五年、「閔妃一派がロシア寄りで反日的政策をとっている」として、日本公使の三浦梧村らが日本軍を王宮に乱入させて、閔妃を殺害した。

「遅れた国」として見下ろす

司馬が描く「栄光の明治」は、はやくも一八七五年（明治八年）、朝鮮に大砲を打ち込んだ。この江華島事件の主役、井上良馨（のちに元帥）らは、「朝鮮を日本が支配しなければ、他国にとられてしまう。そうならないために、はやく日本から朝鮮を攻めるべきだ」と主張していた。明治政府は、不平等条約を改正するため、近代国家とされた欧米に対し、異常に卑屈な態度をとった。一方、清や朝鮮をはじめとしたアジアの国々には、「遅れた国」として、見下し、福沢諭吉の「脱亜入欧」をイデオログに、徹底した差別政策をとった。

司馬は、「栄光の明治」の証として、日清・日露戦争では、戦争捕虜は丁重に扱い、アジア・太平洋戦争時のような虐殺を日本軍は行わなかったと主張する。これも、東学農民党や閔妃の殺害法で破綻するが、ここでは日清戦争の時の「旅順大虐殺」を挙げておきたい。

実は、私は九月に、中国・撫順市で開かれた「平頂山事件国際シンポジウム」に参加した後、遼東半島の突端、旅順に向かった。日本人にとって、旅順は日露戦争の激戦地として知られ、

今も、二〇三高地や、乃木大将とステッセルが会見した水師營、ロシア軍のトーチカ跡などを巡る観光客が多い。しかし、今回の私の目的は、市中心部からやや離れた白玉山という山麓にある「萬忠墓」まで足を伸ばすことだった。

萬忠墓——ここには日清戦争で日本軍によって虐殺された「官兵商民男婦被難者一萬八余名」(碑文)が埋葬されている。一八九四年十一月、旅順市内に侵攻した日本軍は、逃げまどう中国人兵士や市民を殺戮した。その数は二万とも三万とも言われる。遺体は集団で焼かれ、骨灰を白玉山東麓に埋葬し、虐殺を覆い隠すため、日本軍は、「清国將士陣亡之墓」と書いた木碑を建てた。

数年を経て、虐殺の実態が暴かれ、碑は「萬忠墓」に改められ、萬忠墓祈念館も建てられた。事件記念日の一九九四年一月二日には「日清戦争旅順殉難同胞百年祭」が執り行われた。

連続性をもった侵略の歴史

ところで、日中一五年戦争は、一九三一年九月一日の〈柳条湖事件〉によって始まったが、板垣征四郎や石原莞爾らによって謀られたこの事件に対し、「政府や軍が、ただちに厳正な処罰をしていれば、その後の三光作戦(中国人を殺し、焼き、奪い尽くす行為)や、南京事件などの大量虐殺は防げた」という議論がある。一九三二年九月一六日に起きた、撫順炭鉱に隣接した平頂山村の住民三〇〇〇人を虐殺した平頂山事件も該当するのだろう。しかし、そうだろうか。



旅順市内にある「旅順虐殺祈念館」

こうした議論は、司馬遼太郎の「参謀本部が明治の良き教えを引き継がなかった」に沿うもので、言わば日清・日露戦争以前を「良」とし、それ以降のアジア・太平洋戦争を「悪」として、歴史をことさらに切り離そうという考え方である。しかし、すでに述べたように、この切り離しは無理である。日本は、明治政府の成立と前後して、アジアを植民地化する野望を強め、天皇制に基づく思想教育の徹底で、その実現に動いた。

『坂の上の雲』は、日本が起こした戦争の真実と本質を見誤らせる記述が多く、「読み方注意」の本であり、それが映像化されれば「見方注意」の番組である。

（ふくだ かずお／ジャーナリスト）

連載 食の安全を考える 2

郡司 和男

日本の食の根幹を脅かす水源林買収と 遺伝子組み換え作物栽培の動向

「日本の豊富な水資源が外資に狙われている」

こんな話が以前から言われていた。二年前、米国の外資系ファンドが、サッポロビールの買収提案をした際には、「外資の本当の狙いはサッポロビールのもつ取水権」と、取り沙汰されたこともあるほどだ。

ビール会社に限らず、酒造会社は、名水が湧き出したり、豊富な地下水がある土地を所有するなどして、取水権を持っているケースが多い。

昨年五月、福岡県久留米市の老舗・醸造会社「富安」（清酒「富の寿」の醸造元）が、民事更

生法適用を申請したが、この「富安」に、韓国の焼酎メーカー、眞露（じんろ）が買収を働きかけ、業界に大きな衝撃を与えた。

もし眞露（じんろ）に買収されれば、創業一七九〇年（寛政二年）という老舗がもつ取水権も、韓国資本の手に落ちることになる。

資本に国境はない。いくら「湧き水が出るところは、日本の国土だ」と騒いでも、水利権は韓国資本が掌中に収めることになる。

日本の食糧自給率の低さが大きな問題になっている。穀物自給率でみると、世界で日本より低い国は、ジャマイカ（0%）、パプアニューギニア（3%）、イスラエル（4%）、リビア（11%）、アルジェリア（18%）の五か国しかない。

水は食糧生産には不可欠である。その根幹である水を外国資本に牛耳られることは、「その水で作られた食糧は外国産ということになる」のだから、より自給率の低下を招くだろうし、日本という国の存在自体が問われる事態になろう。

こうした懸念がより現実のものになろうとしていることが、この春、東京財団がまとめた「日本の水源林の危機」という報告書で明らかになった。なんと中国資本が、日本の水源林を買収しようというのだ。

報告書には、こう指摘されている。

「……二〇〇八年一月、紀伊半島の奥地水源林（三重県大台町）に、中国資本が触手を伸ばした。ダム湖上流部に広がる森林を伐採し、そこで得た木材を名古屋港から中国へ輸送すると

という構想だ。しかし、仲介にあたった国内のバイヤーは、地元自治体の慎重姿勢により、計画半ばで断念し、新たな物件を求め、ターゲットを別のエリアへ移した。

同年六月、長野県天竜村でも同様の動きがあった。中国でも事業を展開するバイヤーが、東京から現地に足を運んだ。中国の木材需要や飲料事情を、案内する森林組合職員に語りつつ、山を探した。林業不振の中、スポンサーは不明だが、同様の話が各地で聞かれる」

さらに、報告書は、中国資本の真の狙いについて、こう記す。

「森林買収のさらなる動機は、『水』である。中国や日本では、ペットボトルの水に対する需要が、急速に伸びており、特に中国では、一九九七～二〇〇四年の間に、需要が四倍となり、年間消費量は二六億ガロン（九八億リットル）に達している。世界の需給が逼迫していく中、各国の水源地を確保しようとする動きが活発化している。この一連の動きとして、我が国の水源林に注目が集まる。」

報告書では、「全国各地で同様の話が出ている」とある。これを、サンケイ新聞（〇九・五・一三）が、追跡取材をしているが、昨年秋季に、岡山県真庭市でも、中国から森林組合に水源林を伐採した製材の買収話を持ちかけられたという。

同記事によると、「中国を中心とした外国資本が森林を買収しているのではないか」との情報、昨年六月から長野県に寄せられ始めた。そのため、長野県は、実態把握のため、全国の都道府県に聞き取り調査を始めたが、売買が成立したケースは確認できなかったという。

しかし、この調査結果を信用することはできない。

というのは、現在の法制度では、登記簿に記載されない限り、森林の所有権移転を速やかに把握する方法はない。森林の所有権移転が、登記簿に記載されるのは、数年先のことから、所有者が売却を否定すれば、それまでだ。「気が付いたときは、水源林の所有がすべて外資になっていた」ということにもなりかねない。

実際、水源林ではないが、対馬（長崎県）など、知らぬうちに、韓国資本にあちこちの土地を買収され、今、大慌てしているのだ。

もし水源林が外国資本に買収されているとしたら、どうなるのか。山間部で地下水の汲み上げを規制する法律は今のところないから、ペットボトルに詰め、大量に中国なりに、持ち込んでも、手の打ちようがない。大変な水汚染の中国では、日本のミネラルウォーターが、富裕層ばかりではなく、都市の一般市民に飛ぶように売れている。水源地にミネラルウォーターの取水工場でも建設されたら、いつしか水源は枯渇化してしまうだろう。

日本は国際的な水利権争奪戦に対して、あまりにも無頓着といえる。映画〇〇七シリーズでは、ボリビアの水利権を扱ったものもあるように、水をめぐる国際紛争は数多く存在している。中国とチベットの紛争も水利権が絡んでいると言われる。中国の大河の源流の大半は、チベットにある。もし、チベットの独立を中国が許せば、生命線の水を抑えられ、中国の存在基盤が怪しくなる。「そのために、中国は、チベットの独立運動を厳しく弾圧している」といわれる。その中国が、日本の水源林に目を付けたというのだ。

外国資本による不動産買収の規制、とくに水源林買収の規制措置は、緊急な課題であろう。

遺伝子組み換え作物に対しても、水資源確保と同様の危機感を持つ必要がある。日本では、遺伝子組み換え作物の商業栽培は、今のところ認可されていない。にもかかわらず、在来種の種子に、遺伝子組み換え作物の種子が混入、北海道で組み換え大豆の栽培が発見されている。

世界的には、中国、アフリカなどで、遺伝子組み換え作物の栽培面積が急速に拡大している。組み換え作物を栽培すれば、国が買い上げてくれるし、資金も援助してくれるから、発展途上国の農民は、なだれを打って組み換え作物を栽培しだしている。

米国が遺伝子組み換え作物を全世界に広げている理由は、何なのか。

食糧増産、減農薬、低コストなど、さまざまな利点をあげているが、（そのほとんどが根拠のないものであることが、明らかになりつつある）最大の狙いは、世界を米国食糧戦略の中に取り込むことである。

特許の網に保護された「遺伝子組み換え作物」を全世界で栽培させれば、巨万の富が米国に集まる。

遺伝子組み換え作物は、子孫を残さないように、品種改良されている。農民がかつてに種子をとり、自家栽培させないためだ。必然的に農民は、毎年毎年モンサント社など遺伝子組み換え企業から、種苗を買わざるを得ない。

モンサント社などの遺伝子組み換え企業、そして背後にある米国政府が、最終的な狙いとしているのが、〈遺伝子組み換え米〉の栽培である。

米は日本人の主食だけでなく、世界数十億人の主食である。この巨大な食市場を〈遺伝子組み

換え米」の栽培で支配しようとしているのだ。鎮痛剤「アスピリン」の製造で知られる「バイエル社」は、遺伝子組み換え米をEU市場で流通させるための承認申請をすでに済ませ、早ければ年内に、申請の結果が出る。早晚、日本の食品安全委員会にも申請が出されるはずだ。

大豆、米、小麦、トウモロコシと主要穀物が、一握りの大企業に支配されることにもなりかねない。同じ遺伝子組み換え品種が全世界に拡大すれば、遺伝子組み換え品種に異変が起きるときは、全世界でも一斉に起こる。そうなったとき、未曾有の食糧危機が全世界を襲うことになる。

遺伝子組み換え作物栽培の推進派は、「遺伝子組み換え品種は、従来の品種改良と、なんら変わらないし、自然界で起こる突然変異のようなもの」と、いう。しかし、大きな嘘がある。それは、人類が長い年月、稲などの品種改良をしてきたのは、交配を通してである。その交配の過程を省いているのが、遺伝子組み換えである。交配を省いていることが、どういう結果となつて出てくるかは、まだこれからのことだ。

そして、徹底的に違うことは、品種改良を行なってきた多くの先達たちは、その土地・風土にあった強い作物を作り出し、地域に貢献しようという気構えであったことだ。

モンサント社など遺伝子組み換え企業に、そうした姿勢があるとは、とても思えない。もしあるならば、日本も含め、これほどまで、世界各地で遺伝子組み換え作物栽培に反対する運動が広がることはないはずだ。

いずれにせよ、水源林買収の動き、遺伝子組み換え作物の動向と、日本の「食」は、その根源から、脅かされているのは間違いない。

(ぐんじかずお／ジャーナリスト)

窓

わだつみのこえを平和へつなく―― 講演・映像・戦没学生遺稿遺品展を開催して

渡辺 総子

二〇〇八年夏の大集会を終えたときには、身も心もくたくただったので、来年はできないね、と言い合っていたのに、半年が過ぎてみればプラスの面ばかりが思い浮かんで、新年度の理事会では、やはり今年も開催、頑張りましょうということになり、昨年、一昨年と同規模の「八・一五集会」と「平和のための戦没学生遺稿・遺品展」を、八月十三日から十五日までの三日間、平均年齢七〇代半ばの老々男女ががんばって開催にこぎつけた。

この大集会は、「日本戦没学生記念会（通称わだつみ会・会員制の任意団体）」と「NPO法人わだつみ記念館基金・わだつみのこえ記念館」との共催だが、わだつみ会は六〇年の歴史があり、毎年八月

十五日と十二月一日（学徒入営の日、学徒不戦の誓いの日）に講演と映画上映で「不戦・平和」の活動を積み重ねてきた。そして、二〇〇六年には、平和運動の拠点として「わだつみのこえ記念館」を開設、以後はこの二団体が協力して諸活動を進めている。上記の他にも「わだつみフォーラム」の随時開催、「きけわだつみのこえ」の読後感想文募集などを共催している。

今年の集会は、「今もつづく戦争」というテーマで、半田滋さん（東京新聞編集委員）の「変わりゆく自衛隊―とめない日米一体化」と、石島紀之さん（中国近現代史研究者）の「空襲の二都物語―重慶と東

京」の講演を十五日に、記念館所蔵の『きけ、わだつみの声』（新旧）、『ニュース 学徒出陣』ほか八本のビデオ上映を、十三日、十四日の二日間に、ホールに付随する広いロビーでは、わだつみのこえ記念館特別展示として、二四台のケースと二一枚のパネルを使って、戦没学生の遺稿・遺品・遺影を、元朝鮮人学徒兵についても、遺影や遺稿掲載紙、書籍などを展示した。

わだつみ会関連では、『きけわだつみのこえ』の諸版や集会ポスターなどで、六〇年の歩みを伝えた。さらに今年は戦没画学生慰霊美術館「無言館」から三点の遺作品をお借りした。

ちなみに昨年は京都大学、明治大学、学習院大学が保管する遺稿・資料を、二〇〇一年と二年には、岩手県戦没農民兵士の手紙、松阪市市民戦没兵士の手紙、ニューギニアの遺骨収集・展示を精力的に行なっているNPO法人「太平洋戦史館」から遺稿遺品をお借りして、幅広く戦没者の無念の思いを伝える展示会も開催してきた。

会場の江戸東京博物館は諸条件がよい。公立なので借用費が安い。そして、博物館本体の常設・企画展示はもとより、ホール隣の特別展示室では、毎年魅力的な催し物がある。夏休み中だから、都内・地方からの家族連れがたくさん訪れ、ついでにと寄ってくださるという利点もある。無料だから入りやすいということもあるかもしれないが、毎年、延べ三千余人という参会者があるのは、NHKテレビ・ラジオのニュース、TBSラジオ「大沢悠里のゆうゆうワイド」が毎年取り上げてくれることによるだろう。

今年初めてスタッフに加わったTさんは、あとからあとから訪れて、熱心に遺稿を読む人たちを見て、人々の戦争への関心はすっかり薄れてしまったと思っていたが、きっかけがあれば、関心をもっている人びとがまだまだこんなたくさんいるのだねと感嘆していたが、実際、寄せられた感想文には「日記や手紙を読んで戦争があつたということを実感できた」「父や兄や、戦死者たちのこえを今一度思いだし、今何をなすべきか考えさせられた」「戦争の悲劇を

伝えるこうした展示会をつづけて開催して、二度と戦争を起こさない誓いの場としたい」「手記を凝視する老婦人、子どもに読み聞かせる親など、偲ぶ姿は真剣だ」等々が綴られている。

会場の隅に置いたカンパ箱には、少なからぬ額の応援があり、寄せられた感想文にも元気づけられた。「きけわだつみのこえ」をはじめ、たくさん並べた戦争関連の書物も最終日には、ほとんど売り切れてしまった。遺族の方々は、ここで一年に一度顔を合わせて兄弟を偲び、思い出を語り合う。私たちにとっては、実にさまざまな戦争体験談を伺える機会にもなっている。

今年もまたプラスの面ばかり思い起こされてくるが、来年は加えて、『きけわだつみのこえ』発刊（一九四九年）六〇年記念、わだつみ会結成六〇年（一九五〇年）記念事業がある。「やはり今年も開催、頑張りましょう」と言うには、若返りをはからなければ難しい。だが、それが大変な難問なのである。

（わたなべ ふさこ／わだつみ会事務局長、記念館常務理事）

本郷赤門近くに、ささやかながら常設展示の記念館をもっているの、ぜひ訪れていただきたい。開館日は、月・水・金の午後一時半から四時だが、団体には、曜日・時間の便宜をはかっている。近くには東京大学戦没同窓生の碑「天上大風」が、弥生門前には「東京大学医学部戦没同窓生の碑」がある。（両者とも医学部同窓生有志によって建てられた。東大当局は、構内への建碑も認めなかったとのことである）。

文京区には、ほかにも、たくさんさんの記念館・美術館・博物館・庭園があつて、それらを結んだ文京ミューズネットマップもあるので、当館のリーフレットと共に、ご請求あればお送りしたい。

所在地 東京都文京区本郷五丁目二九―三

赤門アビタシオン一階（喜福寺境内にある）

電話・FAX 〇三―三八一五―八五七一

e-mail: info@wadatsuminoke.org

ホームページ: <http://www.wadatsuminoke.org/>

年金記録の齟齬

——これも地震のせい？

押見 操子

年に一度のハレー乗りの祭典が、今年は柏崎市で開催されているので、朝の散歩のコースを変更して、鯖石川河口方向へ歩いた。

正面に、原子力発電所のあたりが見える。すこし前までは発電所ではなくて、消電所であったが、今は稼動している。早朝の雲は、海の上で、積雲がとき色に輝き、「神殿を守る玄武のような雲」が、六本足の怪獣と対峙しているように見える。

この静かな生活を、ずっと続けることができるのだろうか。いま私は五四歳なのだが、年金はどう

なるのだろうか。

今回は「私と年金」のことを書く。

年金つてなに

私が大学を卒業したとき、すぐは就職できず、半年ばかりして海外の仕事がきまった。ブラジルのビトリアというところで、二年数か月、働いた。

帰ってきたら、「国民年金を払いますか」というお知らせが届いたように憶えている。過去のことばかりとも覚えていないのだが、大学を卒業してからそれまでの分だったから、結構な金額だった。「払っても払わなくても良いが、払っ

たほうがよいようだが、どうなのだろうか」と父に聞いた。

父は政府系の金融関係機関に勤めていたが、既に退職していた。

父は、「払ったほうが良い。これは社会を支え、世代間の助け合いのようなものなのだ。どの家でもいづれ年寄りがもらうことになるのだから、働けるものが働いた分を積み立てて置くわけなのだ」と答えた。

父は大正十二年の生まれである。戦争で多くの方がたがご苦労されたことを実感している人だった。今思うと、父の説明は、結構苦しいものだったのかもしれない。

私は、「ああ、そんなものなのか、世代間の助け合いなのか。貯金とは違うものなのだな」と納得した。まだまだ先の話だし、そもそも、年金がもらえるまで生きているかどうか、わからないじゃないか、とも思った。

「社会を支える」ということは気に入ったし、払える金額を払うのだから、まあいいかと、払い込んだ。そして忘れていた。

年金のことは考えなかった

そのうち、都内の特許関係の会社に就職した。

就職情報誌を見ての応募で、ボーナスの金額が年額だとわからないで、この金額が二回ももらえるものだったくらいであった。

厚生年金に加入したのだが、これは、会社の方でちゃんとやってくれている、と信頼していた。

さて、昭和五七年、私は大学の先輩と結婚し、柏崎へと嫁いできた。

「年金的には、国民年金に加入することになる。ちゃんと手続きをするように」と、やめることになる会社でも言われた。考えてみれば、当時夫は会社員だったはずで、その企業の保険に入ればよかったのかもしれないが、私は国民年金に加入した。そのうち、夫が自営業になったので、夫も国民年金に加入した。

二人の子どもに恵まれ、必死で子育てをする時期がすぎ、大学の卒論指導の先生のご縁で、なんと

四十歳で再就職をすることになった。いま勤めている大学である。私は共済年金に加入することとなる。平成七年のことである。

年金不安

しっかりと憶えているわけではないが、平成十五年ごろから、「年金が危ない」と、危機感を感じ始めた。少子高齢化が進んで、昭和四十年代の社会と、平成の社会とは、成り立ちから違ってきてしまったのだ。

「年金の制度は以前のままで、破綻も目に見えているし、年金を払わない人も、多くなってきた。厚生年金も危ない」「当てが外れている。何歳までの人は良いが、そのあとの世代は、もう危な

い」とか、「年金を選択する年齢が変わる」とか、聞きたくない話は、聞きたくないのに、どんどんと報道される。

特に「結婚で姓が変わった人はあぶない」と言われた。結婚した大半の女性は、そうだ。ひどい話である。

「男性は大丈夫だが、既婚女性はあぶない」それって、……。

年金記録の照会

「心配なら、社会保険事務所に行ってきたらいいじゃないか」と夫が言った。報道各社でも、「社会保険事務所に行けば照会してくれる」と言っていた。

意を決して、職場を休んで平成十六年六月二四日、柏崎社会保険

事務所に行った。社会保険事務所は、柏崎駅南口を出て、しばらく行ったところにあった。新潟県合同庁舎に入っているわけでは、なかった。

混んでいるかと思ったが、訪れている人は、二人、三人で、女性の係員が、すぐ対応してくれた。「被保険者記録照会回答票」が渡され、納付済み年数が二百か月であることが記載されていた。昭和五二年から平成七年まで途切れることがなかった。係の方も「大丈夫ですよ。途切れていませんから」と、笑顔で言ってくれた。

やれやれ一安心である。「年金の記録が残っていないと騒がれた時に、柏崎は、ずっと取ってあったところのひとつだった」ので、

きっと大丈夫なのだろうと思っていたとおりでた。

ねんきん特別便

ところがである。「ねんきん特別便」が届いたのだ。平成二十年一月十八日付けである。私はびっくりした。厚生労働大臣は榊添要一氏である。一所懸命に、年金問題と取り組んでいると見ていた。書類には「心からお詫び申し上げます」の字もあり、「ともかく確かめてくれ」と言っているのので一刻も早く回答しようと思った。「どうせ、『訂正が無い』と回答すればいいんだ」と思って封を切った。ところが、とても嫌な気持ちになった。私の記録には私学共済の部分しかなかったのだ。「基礎年

金番号に結びついていない記録は五千万件ある」と言われているとしても、ひとごとであった。「政府の管理している国民年金を基礎にして、厚生年金や共済年金が結びついていないのだ」とばかり思っていた。しかし、そうではなかった。国民年金も、結びついてはなかった。この時期に「ねんきん特別便」がくるのは社会保険庁に明らかな記録がある人の分であって、「社会保険庁がこれだけ仕事をしているという証拠を作るためのものだ」とテレビで言ったのを聞いていたが、そうかもしれない。そうでなくても、とりあえず、やさしい仕事からかたづけると、いうのも納得できる話だ。その上、コンピュータへの入力ミスの問題

も浮上する。人名の入力は本当に難しい作業だ。私の名前は「そこ」だが「みさこ」とも読める。

しかし、それにしても、「被保険者記録照会票」は、何だったのだろう。柏崎社会保険事務所は、今はない。長岡社会保険事務所と合併した。合併すると記録がなくなるとは思われないが。

では、やっぱりあの「地震」のせいなのだろうか。地震のせいでもかまがわからなくなるのだろうか。

政府は、名前の変わった人の年金をすべて洗い出し、調査する気なのだろうか。これは時間がかかる。すでに年金をもらっている人から、とりかからなければならぬ。その上、考えたくもない「改ざ

ん」ということもある。

私は、訂正を書き入れ、あの「被保険者記録照会票」のコピーも同封して、社会保険庁に送り返した。「社会保険業務センターは、記録の調査を行い、その結果を改めて知らせる」とあった。しかし、平成二十一年十月十二日現在、知らせは無い。

年金記録のこれから

この八月三十日、衆議院選挙があり、政権が交替した。「年金調査業務は爾々と続いているのだろうか。模様眺めということでは中断しているのだろうか」——伝わってこない。それに、年金記録問題は、年金制度問題とも、複雑に絡んでいる。長妻昭厚生労働大臣は、年金全件照合に六万人を投じて四

年間で何とかすると表明した。今日の朝日新聞のトップ記事である。できるの？と、眼鏡を取り上げる。本格的な業務は来年秋以降になる見通しだそう。

「来年度の概算要求には記録問題対応として、総額二千億円程度を計上する」とある。

ああ、なんで、こんなに、ああ、なんでこんなことに。問題自体不愉快なあげく、この不景氣な時に、生産的でない問題に、と、いらいらせざるを得ない。

しかし、問題には両面がある。年金先進国として、この経験は国家的に価値があるかもしれない。また、現実、年金照合のノウハウは利用価値があり、この時期の雇用拡大に、つながるかもしれない。

とりあえず、今度の選挙で変わった政権のお手並み拝見というところだ。「年金記録の齟齬」という「人質」をとられながら。

＊

新潟国体が終わった。柏崎は、水球、卓球、ハンドボールの会場になった。会場は、なかなかの賑わいで、地元の選手も活躍した。この国体の会期に合わせたように震災仮設住宅の撤去が行われた。仮設住宅の撤去は復興が成ったことのシンボルのひとつに違いない。全国の皆さん、地震の時は、本当にありがとうございました。ご支援のおかげで仮設住宅も撤去できました。はからずも仮設住宅の撤去作業をご覧いただけることとなりました。(2009年10月12日)

「各地からの原稿」を お待ちしています

北海道から沖縄まで、南北に長いニッポン。各地の状況も、多種多様です。——あなたのお住まいの土地で、お感じになったことを、どしどし発信してください。

お待ち申し上げております。

〒160-0022

東京都新宿区新宿 1-9-4-1004 あごろ編集部

TEL 03-3354-3941 FAX 03-3354-9014

E-mail: XLV 05467@nifty.com

基地問題への怒りが結実！総選挙で革新圧勝に！！

浦島悦子

沖縄から「自公」が一掃された

去る八月三〇日に行われた衆議院選挙で民主党が圧勝し、沖縄では、四選挙区すべてにおいて自公の候補者が落選するという沖縄の国政選挙史上初めての状況が出現した。小選挙区制に対する危惧を感じつつも、この「大掃除」に、これまでにはさすがしさを味わったのは、私だけではなかったと思う。

基地問題をはじめ、長年にわたって沖縄を差別・愚弄し続けてきた自公政権に対し、「もうこれ以上我慢できない」と、県民が「ノー」

を突きつけたのだ。自民党の、利益誘導型政治と、それにすり寄って利権のおこぼれをもらうやり方が限界にきているという、にっちもさっちもいかない閉塞感が、これまでの自民党支持者をも離反させたのではないか。民主党を支持しているわけではないが、このまま、自民党に頼っている生き延びられないと感じている産業界も含め、ぎりぎりまで追いつめられた人びとが多かったということだろう。

基地問題を取り除かない限り、未来はない

降って湧いた災いのような新基地建設（普天間飛行場移設）計画に十三年間も翻弄されてきた私たち名護市東海岸住民にとっても、市民投票で示した住民意思を踏みにじり、どんなに声をあげても耳を貸そうともしなかった政権が崩壊し、全選挙区で新基地建設に反対する議員が選出されたことは、何ものにも勝る喜びであり、大きな希望を与えるものだった。

私の住む名護市東海岸二見以北は、大浦湾に面した静かで自然豊かな地域である。山がちで耕地が少なく、これといった産業もない

ために人口が流出し、過疎化に悩んできた。そこにつけ込むように持ち込まれた基地建設計画に対し、地域は一丸となって反対に立ち上がったが、地域住民をはじめ名護市民が心血を注いで表明した「基地反対」の市民意思（名護市民投票の結果）が、権力者によって、いとも簡単に踏みにじられて以降、私たちは、いくら声をあげても、自分たちの声が政治に届かない無力感を、味わわされてきた。

「権力に逆らっても無駄」という絶望感に加え、防衛省予算で、学校や公民館、診療所などが次々に改築あるいは新設され、地域振興という名目の補助金が注ぎ込まれるにつれて、地域には基地問題へのタブーが生まれ、住民が本

心を語れない重苦しい雰囲気が漂うようになった。貧しくとも助け合い、築き上げてきた温かで緊密な人間関係・共同性は、ズタズタにされ、集落自治は侵食される一方だ。

過疎の解消、地域興しは、住民誰もが望むところだが、地域興しは住民の心がひとつにならなければ達成できない。

それを阻んでいるのは、私たちの誰一人望まなかったのに持ち込まれた、新基地建設問題なのだ。二見以北の四小学校が、この四月から一つに統合され、三校が廃校になった事実は、基地がらみのお金や「振興策」が、決して地域を振興などしないことを、象徴的に示している。

太古の昔から地域住民の暮らしと文化を支えてきた海・山の自然

を壊し、巨大軍事要塞とも言われる新基地がもし造られれば、この地域に住み続けられるのか。地域住民は不安におののいている。

そして何よりも、基地は建設されない前から既に多大な精神的被害を与え、地域を破壊しているのだ。基地問題という重しを取り除かない限り、私たちの地域に未来はない。

新政権と高裁判決で 泡瀬干潟の保全へ

民主党を中心とする鳩山連立内閣が発足して二か月余りが経った。私たちの悲願をはじめ、自公政権下で踏みにじられてきた沖縄の民意の実現を求める県民の熱い期待に、新政権は、ほんとうにこたえてくれるのだろうか。

「国策」と民意が、現在、最も激しくせめぎ合っている沖縄の三つのホットスポット（いずれも沖縄島東海岸に位置しているため、住民運動の間では「東海岸三点セツト」と呼ばれる）のうち、沖縄市の泡瀬干潟の埋立て問題について、前原誠司沖縄担当相（国土交通相兼務）は、政権発足の翌日、「一期（工事）中断・二期中止」を表明。民主党の公約である「無駄な公共事業の見直し」に期待を抱かせた。泡瀬干潟埋立事業については、昨年十一月、那覇地裁が「事業に経済的合理性なし」として公金支出差し止めの判断を下し、それを不服とする沖縄市と沖縄県が控訴していたが、福岡高裁那覇支部（河邊義典裁判長）は、十月十五日、

一審判決を踏襲する判決を言い渡した。既に工事が進んでいる第一区域に沖縄市が策定中の新たな土地利用計画についても「経済的合理性があるとは認められない」とし、埋立てに公金を支出することは違法であると断じたのである。

「自然の権利」訴訟として同訴訟に取り組んできた〈泡瀬干潟を守る連絡会〉および〈訴訟を支援する会〉は、生物多様性の宝庫である泡瀬干潟とそれに続く浅海域が守られる展望が開けたことを喜び、「沖縄市長および沖縄県知事が上告を断念すること、一部破壊された部分については自然再生推進法に基づいて再生すること」などを要請した。国はこれまで、県とともに埋立事業を進めてきたが、

政権交代と控訴審判決によって、事業中止への道が大きく開けた。

このほか、国頭村に計画されている奥間ダムの見直し、県の事業だが国頭村内の林道着工の当面の見送りなど、明るいニュースが続いている。どれをとっても、長い間、地道な市民運動が積み重ねられてきたからこそその成果だが、それらが目の目を見つつあることが何よりもうれしい。

県内移設反対!! 沖縄の悲願に込めて!

一方、「三点セツト」の二つ 米軍普天間飛行場の辺野古移設（新基地建設）および東村高江の米軍ヘリパッド建設は、いずれも米国という相手のある問題だけに、事

は簡単ではない。民主党は選挙前から普天間基地の「国外・県外移設」を打ち出してはいたが、マニフェストには入れず、選挙後はさらにトーンダウン。政権発足後の鳩山首相の言動にもブレが大きく、外務・防衛・環境などの関係閣僚はてんでバラバラの発言を繰り返して、これらの報道の度に一喜一憂させられる住民は「自民党に翻弄されていたのと同じ」と怒っている。

十月九日、辺野古新基地建設に反対する座り込みが二〇〇〇日を迎えた。翌十日に辺野古の浜で開かれた市民集会では、新政権に対し計画の白紙撤回とアセス作業の中止を求めるアピールを採択した。十三日には、沖縄防衛局が作成した、辺野古アセス準備書に対す

る知事意見が提出された。仲井真知事は、新政権が方針を早急に示すよう要求。沖縄県環境影響評価審査会が答申した中身に沿って、内容の書き直しを求めたものの、手続きのやり直しは求めなかった。

知事は「県外がベスト」としながらも、これまで同様「やむなく県内移設を認め」たため、沖縄防衛局による辺野古の海での違法調査、現場の緊張関係はなお続いている。

沖縄防衛局はまた、ヘリパッド建設に反対する高江住民を「通行妨害」だとして仮処分を申し立て、係争中だ。

平和的な座り込みや監視活動、インターネットでの呼びかけや、マスコミのインタビューに答えたコメントまで「妨害行為」という

犯罪に仕立てようとする沖縄防衛局に対し、高江住民は、「新政権になった今こそ、国が住民の正当な表現行為を裁判に訴えるという前代未聞の暴挙をやめ、申し立てを取り下げる」よう要請した。

十一月八日には宜野湾市で「辺野古への新基地建設と県内移設に反対する県民大会」が開かれ、二万一〇〇〇人が参加した。政権発足後二か月もしないうちに「県外移設は困難」「辺野古しかない」「嘉手納統合」などと言いついてきた民主党政権に対して、十二歳の渡具知武龍くんは「大人になると約束を守らなくていいのですか？」と壇上から問いかけた。このまっすぐな訴えに、鳩山首相は誠実に応えてほしいと思う。(09・11・24記)



『明治国家と日清戦争』

白井久也著

社会評論社

B六判255頁2500円＋税

時代感覚の共有を射程に

白井久也著『明治国家と日清戦争』の書名は、一見、硬派の学術論文集のイメージをあたえ、いかにも堅苦しい感じである。しかし一読しての印象は、文章が丁寧で、わかりやすく書かれており、期せずして日本近代史の入りやすい啓蒙書になっている。

しかも、内容は、学術研究の第一線を担う研究者の水準を保

つ、歴史の叙述がすめられている。ジャーナリストの筆力が必要ならば、とうてい書けない文体になっている。

著者は日清戦争に関する膨大な研究の蓄積の成果（巻末の主要参考文献）を読破し、基本的な資料に目を通し、現代日本社会の思想状況に対する鋭い感覚で、改めて問題点を掘り上げ、見事に映像化した文体で読者に提示する。その点での波及効果が、本書を、警告の書に押し上

げている。各節の最後のページの二行目あたりには、その言葉が、必ずちりばめられている。新鮮な緊張を誘う魅力のひとつで、真珠のような役割を担う。現場主義を貫くジャーナリス

トの〈歴史的現実へ立ち向かう視点〉で、従来の言説や資料を批判・検証し、再構成の歴史像を創りだす。対象に迫る同様な方法は、ゾルゲ事件、シベリア抑留等の諸著作にも共通する。著者は、今を生きる「自覚する意識」に強い関心を示している。今を生きているこの現代へ向かい合う問題意識のありようが、過去の歴史と未来の歴史とを不可分に結びつける連続の接合材であると考えている。

周知のように、近代の日本の歴史は、幕末の内乱・内戦から始まり、周辺の国々への侵略戦争への連続として彩られている。

明治維新、西南戦争、台湾事件、日清戦争、日露戦争、日中戦争、アジア太平洋戦争と、間歇的に不連続に連なっている過去の戦争が、過去の日本人の行爲によって引き起こされたことは、紛れもない事実だ。その日本人の血を引き継ぐ現代日本人は、その厳粛な事実を眼を背けるわけにいかない。日本国家の形成のあり方の中に着目する、その主要なテーマは言うまでもなく、「憲法と天皇制」である。両者の密接な関係を、制度的な機構を作り出した支配者のイデ

オロギーの表出に向けて、激しく切り込む。

過去を切り取るスパンの尺度の中に、すでにある結論を誘導する価値観が潜んでいることの危険性を明快に指摘する。

「明治一〇〇年、戦後六〇年」等の論議は、切り取られた時系列に過ぎないが、その論理の裏に隠された支配的な歴史の野望を抉り出す。日清戦争に焦点を絞り込む理由を「今の日本を、正しく理解し認識することができる」と断言する。「その後の侵略、膨張の戦争は、日清戦争の延長線上に展開する」と。近代日本の政治機構は、日本人一人ひとりの青年を、アジアの各地に派遣する銃持参の〈憲

兵〉にしてしまった。その歴史過程を如実に示したのが、偶然の一致とは言え、本書の内容構成となっている。

本書の目次的な構成は、第一章 誤れる〈歴史認識〉、第二章 広島大本營の設置、第三章 天皇制国家の確立、第四章 連戦連勝の配当、第五章「極東の憲兵」への道、となっている。

本文の分析叙述の中で、私が特に注目してほしい点が少なくとも二つはある。侵略地域、植民地を取り上げたこと。その地域の人びとに対する厳しい弾圧と、むごたらしい虐殺である。戦争の本質を見る思いである。（山梨学院大学名誉教授 我部政男）



『高群逸枝の生涯』

— 年譜と著作 —

堀場清子編

ドメス出版

A5判251頁2800円＋税

「人は、その肉体は死んでも、記憶していて、その名を語る人がある限り、死なないものである」とは、古くから、言い伝えられて来た言辭である。

本書は、この言い伝えのとおり、詩人であり、女性学者でもある堀場清子氏によって、編集された年譜である。

高群逸枝の生涯（一八九四年）から死（一九六四年）までの年譜にとどまらず、父・勝太郎（一八五九年生まれ）、母・登代（一八

六四年生まれ）の生涯をもふくみ、加えて、高群逸枝死後から二一世紀の今日に至るまでの研究書・評論・随筆・詩・小説など、多くの書き手たちの手になる作品をも網羅した、壮大・緻密な年譜である。

高群逸枝は、その生涯のすべての時に、人を惹きつけてやまぬ言動があり、思い切った仮説を提出するだけの詩的直観力があつた。本書を読み進むにつれて、天才とは、まさしく宇宙原

理に自らを共振させ得る人を指すのだ、ということを得ることができる。

本年譜には、「高群逸枝」名がタイトルに掲げられていなくても、高群逸枝に言及した部分があればその著作をも、見逃さずに記されているのは、さすがである。

本書によって、私は、高群逸枝の仮説群のなかで、心に刻んで来た「多祖現象」（「母系制の研究」にいたるきつかけとなつた）、「女の霊能」（「女性の歴史」をつらぬく、主調音）「母性我」（これは老子の「谷神は死せず、是を玄牝と謂う」を、まっすぐに受け継ぐ精神である）寂滅（生物学では、人の第二三染色体の男

性を決定しているY遺伝子——

XY女性もいるので、揺らいではいる——は、個々の細胞の核のなかで、現代では九個にまで減っている。人類の初期は、X染色体と同じ数であった）などの発生因と成長過程を知ることができた。なかでも寂滅の予見は、『恋愛論』が書かれた頃には、Y遺伝子の減少は生物学の側からは、仮説さえも提出されていない領域であった。

このことから、高群逸枝の詩的予見力は、並なみならぬものであると知れる。

堀場清子氏は、人は高群逸枝にどのように接近しようと、この系譜のリストとの、対話圏を自らに作り上げることができる

ように、年譜を書いておられる。

本書を一行一行、じっくりと追っていけば、高群逸枝の著述過程についての、軽薄な批判などは、消えてしまう。

堀場清子氏が詩人であるので、自らの詩的内視力を、労多い年譜作りに重ねることができたと、私は、ひたすら感じ入っている。

附記 一時期、『招婚姻の研究』の記述に摘出された「高群逸枝による改竄」が騒がれた時があった。「兼家の家族形態を、故意に書き変えている」も、一例であった。

『女と男の時空』の編集会議でも、この問題は検討されて、「これはカードを取るときに誤

記であって、高群逸枝は原典を改竄できる位置には、いなかった」といった結論に達した。十五年戦争中は、学者による原典の故意の書き換えが、何度か起こり、出版社をあわてさせた事件もあった。

この点について、堀場清子氏は、本書のなかでは、

——栗原弘氏は、はじめ高群史学のもっとも深い傾倒者だった。高群の大部の遺稿『平安鎌倉室町家族の研究』（図書刊行会、一九八五）を校訂、出版し、夫人の葉子氏とともに、やはり高群の遺稿『日本古代婚姻例集』（高群書店）を校訂出版された。転じて高群史学へのもっとも痛烈な批判者となり、さらにその境

域を超え、重病を克服して、平安前期における新たな家族・親族像を抽出された。同書の発行日は、本稿の下限と決めていた橋本静子氏死去の日から、十日遅れる。しかし栗原史学の到達点を敬し、唯一の例外として揭示した。(P・242)

二〇〇九年に入っても、高群逸枝に関わる著作はつづいていく。たとえば、丹野さきら著『高群逸枝の夢』(藤原書店、二〇〇九年)は、その一例である。今後も、女たちと高群逸枝との対話圏は、本書を参照して多方面の枝から芽を出して、形を造るであろう。

(女性学研究者／河野信子)

状況に「返し風」を

第64号

2009年9月20日 発行



新沖縄フォーラム

【特集】

辺野古・環境アセスはいま

◆ハインタビュー

「環境アセス」徹底講義

◆真喜志好一 ◆花輪伸一 ◆浦島悦子

◆粕谷俊雄

◆八座談会

辺野古違法アセス訴訟をめぐる

◆ハインタビュー

伊芸区は今

◆シマだより

◆北の風・南の風 ◆沖縄・いま

◆城岳から ◆沖縄環境ネットワークだより

◆佐喜真美術館だより ◆強口冷口 ◆沖縄この三カ月

◆読者の集い(関西/関東) ◆編集後記

■定期購読の申込みは、はがきかFAXをお願いします。

あこちらから郵便振替用紙をお送りしますので、

ご希望の方は、年間4号分(2000円)または2年間8号分(4000円)をご送金下さい。

*バック・ナンバーあり。

発行所 〒900-1115 那覇市久茂地3-29-41 401号

☎&FAX (098) 861-1101

E-mail: netwind@atlas.plala.or.jp

〔惜別〕

弁護士

土屋 公献さん

土屋公献先生が亡くなられた。

二〇〇八年十一月、先生の著書『弁護士魂』出版のパーティが、練馬の御自宅近くのレストランで、ささやかに開かれた際にお会いしたのが最後だった。出席されたのも短時間であったが、先生が晩年のテーマとされた戦後補償裁判の関係者らが集った、良い会合であった。

その時も「何とか出版に間に合った」と言われたぐらいであったから、ご病気は相当悪く、夏を越すことも危ぶまれた。したがって、それなりの覚悟はしていたが、現実には計報に接すると、やはり「急であった」という感は否めない。

先生と私は、晩年の重慶爆撃損害賠償請求裁判の共同代理人という点を除けば、個人的には、それほど



つちや こうけん

2009年9月25日逝去 86歳

10月3日葬儀（於 東京・文京区 麟祥院）

二〇〇一年十一月十六日参議院議員会館にて

接点があったわけではない。年齢も、弁護士としてのキャリアも、ずいぶんかけ離れていたのだから、当然である。

一九七五年弁護士登録した私は、その年の五月に一斉逮捕がなされた、三菱重工爆破などを実行した、「東アジア反日武装戦線」(狼、さそり、大地の牙)事件の弁護人を務めることになったのだが、この事件の法廷が裁判所の強権的訴訟指揮もあって、いわゆる「荒れる法廷」となり、月四回という裁判所の期日指定により、被告、弁護団が、出廷拒否等の戦術をとり、法廷が空転した。

その際、第二東京弁護士会の副会長として、東京弁護士会、第一東京弁護士会の副会長らとともに、我われ弁護団と裁判所の仲介の労を取って下さったのが、土屋先生であった。先生自身、吉展ちゃん誘拐殺人事件の国選弁護人として、社会から指弾された事件を担当した際の苦勞から、我われに対する支援に手を差し延べて下さったと、私は勝手に理解している。

次に先生との接点は、花岡事件をめぐる和解に関してである。

和解を批判するグループが、土屋先生に再裁判の依頼に行ったようである。先生から問い合わせを受けた私は、和解について、『世界』『わだつみの声』などに書いた拙文をお送りした。しばらくして先生から「よく分かりました」というお返事をいただいた。依頼を断ったとのことだった。

重慶爆撃裁判の弁護団会議は、毎回、銀座の先生の事務所で行い、先生は必ず参加された。法廷でも、先生は率先して裁判所に意見を述べた。

「先の大戦末期、旧制静岡高校より学徒出陣し、一九四五年三月、小笠原の父島で、少尉候補生として撃墜された米軍パイロットの斬首を命じられたが、執行直前に他の者が代わって出たため、戦後戦犯の追及を受けることなく済んだ」というご体験については、先生の著書『弁護士魂』などで明らかにされているところであるが、一点、私には分からないことがあった。

というのは、敗戦後、復員した先生は、旧制静岡高校に復学されるのだが、そこで、応援団長などを務め、いわゆる旧制高校特有のバンカラな学生生活を送っているのである。もしかしたら、自分が戦犯として処刑されたかも知れないという極限の体験を経たにもかかわらずである。

いつか機会があったらそのことを聞いてみようと思つて密かに思っていたが、それも適わなくなつてしまつた。

二〇〇九年十月二三日、西松建設・中国人強制連行・強制労働損害賠償請求事件について、同社と中国人当事者らとの間で和解が成立した。

和解は、二〇〇七年四月二七日、最高裁第二小法廷判決が、西松建設の法的責任を否定しつつも、「本件被害者らの蒙つた精神的・肉体的苦痛が極めて大きかつた一方、上告人（西松建設。筆者（注）は、前述したような勤務条件で中国人労働者らを強制労働に従事させて、相応の利益を受け、さらに前記の補償金を取得しているなどの諸般の事情にかんがみると、上告人を含む関係者において、本件被害者らの被害

の救済に向けた努力をすることが期待されるところである。」と指摘したところを踏まえ、西松建設は、

①強制連行・労働の事実を認め、その歴史的責任を認識し、深甚なる謝罪をなし、

②後世の歴史教育のため、記念碑を建立すること。

③受難者に対する補償、慰霊、記念碑設立等のために、和解金として金二億五〇〇〇万円を支払う、とするものである。

この和解を、ドイツが二〇〇一年夏、設立した「記憶・責任・未来」財団——へのステップとなるよう活用してゆくことが肝要である。

この和解は、十数年にわたる中国人当事者、日本側支援者の活動による成果であるが、昨二〇〇八年四月、私たちは、前記最高裁付言を踏まえて、〈西松建設の最高裁勧告の実現を求める会〉を立ち上げて、活動してきた。土屋先生にも、その呼びかけ人の一人となって頂いていた。

この和解の成果を先生に御報告できなかったのが残念でならない。

（弁護士・内田雅敏）

新型インフルエンザ、働く女性を直撃

新型インフルエンザの流行で、保育所や小学校の休園、休校が相つぎ、働く母たちも欠勤……。各地で混乱が続いている。

「性犯罪被害者の氏名を教えないで！」 裁判員候補への告知に 女性団体が懸念

09年5月1日から始まった裁判員制度は、性犯罪も対象。裁判員選任手続きの過程で被害者の氏名や過程が裁判員の候補者に伝えられることに、NPO法人（女性の安全と健康のための支援教育センター）や、女性団体（アジア女性資料センター）などが、被害者の安全とプライバシー確保を求める署名活動を、ホームページで開始。

最高裁は、「今のところ、『被害者のプライバシー保護の観点から、情報提供の方法や程度を慎重に検討する必要がある』（たとえば、候補者全員に名前を伝えずに手続きを進めることは、ありうる。（被害者名を特定せずに、事件の概要を説明）。候補者が絞り込まれた段階で名前を明かすことができる）」と回答。——ただ、対応は各裁判所に任されている上に、「関係者とわかって裁判員に選ばれなかった人に、守秘義務はない」などの問題が発生している。裁判員法では、裁判員が裁判で知った秘密を第三者に伝えた場合は「秘密漏示罪」の対象になるが、候補者は「対象外」になっている。

お茶の水女子大副学長・戒能民江さん（法女性学）は、「自分が被害者であることが不特定多数に知られる」とわかれれば、被害届けを出すのをためらうだろう。被害者保護の観点から、性犯罪については、

制度の開始を遅らせるか、選択手続きを遅らせるかなどの、対応が必要」と憂慮する。

〈子どもホスピス〉を考えるセミナー始動

重い病気を持つ子どもと家族を支援する〈子どもホスピス〉のセミナーが、09年5月21日から、東京と大阪で始まった。東京は聖路加看護大学、大阪は大阪市中央公会堂など。

リトアニアに初の女性大統領誕生

09年5月の大統領選で、ダリア・グリボウスカイトさん(53)が当選した。

旧ソ連の名門、レニングラード大で経済学を専攻。リトアニアがソ連から独立後、米ジョージタウン大で外国史を学び、外務省と財務省で要職を歴任。2001年から財務相として、リトアニアのEU加盟交渉に携わった、自他共に認める〈財政のプロ〉。

04年の加盟以降は、EUでの、〈リトアニアの顔〉となる。

大統領就任後は、予算案への拒否権や閣僚の任命権を通じ、経済運営の実権を握るクビリウス首相に、中小企業減税や、輸出促進を求める意向。英露仏などの五か国語がペラペラの独身。趣味の空手は黒帯の腕前。

〈増える患者、減る女医さん〉を一変する運動

厚労省の、「平成18年度、医師・歯科医師調査」によると、女性の泌尿器科医は213人で、全体の約3・5%。内科は女性医が14・9%を占めているのに、極端に少ない。「泌尿器科」と言うと、「男性の生殖器を視る」というイメージが強く、女子医学士に敬遠されるのが原因。だが、尿漏れなどに悩む中高年女性は多く、「男の医師には視てもらいたくない」まま、重症化する例も多い。

この状況を変えようと、「女医大募集!」を呼び

かけたのが、東京女子医大東医療センター（東京・荒川区）の講師・巴ひかるさん（50）。

泌尿器科患者の六割以上を占めるのは、尿漏れや過活動膀胱の女性たち。「どういう時に洩れるのか？パッドを当てているか？」などの問診は、男性医師には、答えにくいのに、「女性患者が女性の泌尿器科医とめぐりあうのは、絶滅危惧種のワンマヤマネコと会おうのと同じくらい」という現状の打破に、〈女子泌尿器科医の会〉を発足。要望があれば、他の大学へも出張講義。しかし、現状では、まだ、どこでも女医不足。「困っている人がいれば、女医でなくても、まず泌尿器科の受診を」と呼びかけている。

中国政府、セックス・テーマパーク撤去命令

中国・重慶市では、09年5月、市内で建設が進むセックスを主にしたテーマパークⅡ〈性公園〉の即時撤去を厳命した。「低俗かつ露骨。社会に悪影響を及ぼす」と。

広がる子どもの貧困

「熱がでたので、休みます」——中学二年の男子生徒の父親から学校に連絡。実は工作などの費用が出せないためだった……。こんな例が急増している。

「彫刻刀を持つてくるように」と指示された日に休む子は、訪ねてみると、毎日朝食抜き。親が収入減で、昼夜働いたため、子どもの食事は菓子パン。学費意欲をなくした児童、不登校児童が、全国的に急増している。

実は反戦画家だった竹久夢二

東京・本郷の竹久夢二美術館の学芸員・谷口朋子さん（40）は、十三年前、ここに赴任したとき「夢二って、あんまり好きじゃなかった」と言う。「日清・日露戦争、大逆事件、大正デモクラシー、関東大震災、満州事変をよそに、何人もの女性を愛し、美人画を描いて過ごしていた人」と思っていたので。

しかし、夢二美術館の史料に触れて、印象は一変する。

幸徳秋水処刑の号外を、神近市子が夢二に届けたとき、夢二は、「フーン」とうなり、「みんなでお通夜しようよ」と呼びかけ、実行したという。

「DV被害把握不十分」と6府省に改善勧告

総務省は、5月26日、DV防止に関する政策評価（2007年3月～09年5月）の調査結果を公表。「地方自治体の支援センターの数は増えているが、

支援センターへの通報数や相談数は、二七都道府県のうち、六自治体が、内閣府への報告が不十分。

また、センターを持たない市町村の相談件数は、国に報告されない例も多く、被害実態の把握が不十分」と強調した。

「相談」と「通報」は分けて報告すべきなのに、岩手県などは、すべて「相談」としていた。また被害者保護のため、自治体は、住民基本台帳などの閲覧を制

限しているが、二七市のうち一市は制限していない。

市町村の〈食育〉は、目標の半分

このほど発表された政府の2008年度版、食育白書では、「メタボ（内臓脂肪症候群）を知っている人は89・7%だが、食育に関心を持つ人は、72・2%」。90%という目標には遠かった。また、子どもや20代男性の「朝食を食べない率」が減少する一方、30代男性では、逆に増加している。地方自治体の取り組みでは、全都道府県が食育推進計画を作成・実施しているが、「市町村での実施は25・5%で、目標の半にとどまっている」と警告した。

「移民統計充実度」、日本は世界最下位

米国のシンクタンク、世界開発センター（CGD）の、世界48か国・地域の「移民統計充実度調査」では、日本は、エジプト、エチオピアなどと共に世界

最下位のFに格付けされた。中国も韓国もC。米国はB。Aは、オーストラリア、カナダなど六か国。

増えた好き嫌いの幅

「子どもが嫌いなのはニンジン、ピーマン」と思いがちだが、日本スポーツ振興センターの調査によると、第1位はニガウリ。第2はレバー。肉の脂身7位、高価なウニやアスパラガスは14位など、比較的高価な食材も。子どもが口にする食材の種類が増えた分、好き嫌いの幅も広がったのか……。

大人気！ 片岡球子展

「あじら」300号記念号の表紙を飾った日本画の第一人者、片岡球子さんの追悼展が、東京・高島屋で、大好評を続けている。

「画家になる」と宣言して、生家からの仕送りを絶たれ、小学校で教えながら描き続けた異才は、母校

女子美術大学教授から愛知県立美術大学の教授に。50歳を過ぎてから、強い個性を発揮し続けた球子さんの個展は、今回も、深い感銘を与え続けている。

ファミリーホームを国が制度化

さまざまな事情で、家庭で暮らせない子どもを、五人、六人……と受入れていくファミリーホームを、今年度から国が制度化した。

日本では、保護した子どもの大半が施設に預けられ、里親に委託されるのは約1割。欧米より格段に低い。ファミリーホームは、11の都道府県と政令市が以前から導入。40以上のホームが開設されていたが、国が制度化したことで、自治体によって異なっていた要件が統一され、一人あたり15万円が人件費を含めた事務費として支給されるなど、財政的支援が充実した。

国は今年度中に50ホームの開設を見込むが、すでに10か所が届けた。

淑徳大学の柏女^{かしわめ}靈峰教授は、「経済的な基盤が確保されたことで、これまで施設で働いていた職員が、独立して開設するケースも増えるのでは」と期待。「施設と違って養育者が限定されるだけに、養育者が休息できる支援体制や不適切な養育を防ぐ研修が欠かせない」と主張している。

性犯罪被害者の保護を市民団体が要請

裁判員制度では、「性犯罪被害者のプライバシーが守られないおそれがある」と、〈アジア女性資料センター〉などの女性団体が、5月19日、最高裁に対応を要請。「確実な保護が講じられるまで、制度の開始を延期するか、性犯罪には裁判員が関与しないよう」求めた。

最高裁は、「性犯罪の場合は候補者を絞り込んでから被害者を示すなどの配慮を考えている」というが、団体側は、「被害者名が示されることに変わりはない。候補者に守秘義務はなく、これでは被害者

が被害を申告できなくなる」と指摘。「これまで、『法廷では性被害者の名前を読みあげない』など配慮してきたのに、大きく矛盾する」と訴えている。

〈活躍する女性たち〉 シヨウ・クリエイターにチャレンジ

1977年生まれ。東京のプロデューサーに最年少で抜てきされ、自ら生み出した新しい職業、〈シヨウクリエイター〉として活躍中の、小林香さん。2002年、東宝に入り、04年からミュージカルをプロデュース。07年日比谷に開館した〈シアター・クリエ〉のこけら落とし公演を担当。以降もプロデューサーとして活躍してきたが、09年7月退社。以後「シヨウクリエイター」の肩書きで活動を続行している。

「今まで、プロデュースの仕事をこなしながら、同時に、ステージの構成・演出・作詞なども手がけてきましたが、その活動の中で徐々に『自分の世界

観を表現したい」というクリエイティブな気持ちが強くなり、今までの分業的な創作方法ではなく、企画立案から最後までトータルで見たい、と思うようになりましたが、適切なものが見つからない。「ないのなら、自分でつくってしまおう」と、〈セヨウクリエイター〉という言葉を思いついたのです。

経験豊富な年輩者にも、指示を出さなければいけない仕事。できる限り時間をかけて、それぞれの方のお話を聞くことを心がけてきました。理不尽なことを言われたり、腹が立つことも多々ありましたが、相手の話を本気で聞けば、必ずどこかに理解しあえるポイントがある。それを探っていく、こちらから解決への姿勢を見せれば、相手も近づいて来てくれます。

裏のスタッフが、「自分たちが支えている」という誇りを持てている。舞台裏に、たくさん笑顔があります。その雰囲気は、必ず表の舞台にも現れる。——それを学べたのも、『プロデュースの仕事をして良かったこと』の一つです」と、ほほえむ香さん。

子どもの頃見た「チャップリンの映画」が原点。「納得いくものがないのなら、つくり出してしまえばいい」と、十代で自分のオーケストラを立ち上げたこの鬼才は、今後は地元の京都で、現代的なショーをつくるのが夢。「百年に一度の不況」と言われる今だからこそ、クオリティの高いショウをつくりたい」と言う。「会社をやめたとき、いろいろな人から、『アホちゃうか』と言われたけど、『自分のやりたいことをやる』のが私の生き方。自分の心の声に耳を澄ませて、『自分ならではの』の道を行います。人間に支えられた時間は限られていますしね、自分に正直であることが一番楽しいことだし、そうであれば世の中の動きに関係なく、人生は、良い方向に流れていくと信じています。」と言い切る32歳。

臨月まで対局を続けた女流棋士 岩根 忍さん

大阪府出身。棋士を目指す男性が中心の〈奨励会

で腕を磨き、2004年、女流棋士デビュー。09年、女流二段。通算70勝36敗の28歳。

「地方での対戦があるので、水戸の自宅と大阪の実家を行ったり来たり。子育ては、正直、大変です。子どもが寝ている時しか自分の時間がない。せめて夜、将棋の勉強をしようと思うけど、つい一緒に寝てしまう。」

「長男は、やんちゃで、思い通りいかないと泣くし、外出直前に暴れ始めたり。二人目も男の子だから、どうなるのか。」

「でも長男を実家に預け、東京や地方で対局する時は、二日会えないだけに、寂しくて眠れなくなるのだから不思議」と言いながら、「四月に、初めてのタイトル戦。マイナビ女子オープン五番勝負を戦うはずだったが、出産が早まり、延期に。皆様に申しわけない気持ちでいっぱい。」

夫にも、子どものお風呂や買い物を、いつも助けもらっている。そうした助けがあったからこそ、無事、次男を産めた。今は、夜も、二、三時間おき

に目を覚ます次男につきあう毎日。「寝不足で余裕はないが、必ず、いい将棋を指して、皆さんに恩返ししたい。」

お花を摘んできて、「ママきれいでしょ」と渡してくれる長男は、生まれたばかりの次男をだっこしたがつたり……。そんな二人を見ると、「彼らがやりたいことは、みんなやらせてあげたい」と思う。私は好きな仕事をしている。「二人とも、好きなこと、夢中になれるものを、早く見つけてほしい」と願っている元氣印。

バレエを言語に平和芸術家

2004年、〈ユネスコ平和芸術家〉に任命された、吉田 都さん。難民支援を目的とした公演など、社会人としての貢献が認められたもので、日本人としては、二人目。

「英国ではバレエ団の仕事に、病院や学校のエールなどでの公演が組み込まれています。寝たきりの

方がごらんになることも多く、ベッドで動けない患者さんが涙を流してくださったり。こうした活動が私は大好きで……。『私には踊ることしかできないのに、こんなに喜んで頂いていいのかしら』と、いつも思っていた折、スターダンサーズ・バレエ団（東京・港区）主宰の、故太刀川瑠璃子先生から、チャリティ公演のお話を頂き、『こちらからお願います』と即答しました』という。

最初のチャリティ公演の直後、ユネスコ事務局から就任依頼が舞い込んだのに、二の足を踏んだ。「活動に時間を費やすことが現時点では難しい」と。

返ってきたのは、「ひのき舞台での活動が平和芸術家の仕事です」。その一言に、心は逆転。——「踊って、貢献できるなんて、こんなにうれしいことはない」と、快諾。「舞踊は世界共通の言語です。肌の色・民族・宗教を超えて人の心に直接訴えかけ、魂を奮い立たせる。踊る側、観る側の双方に、生きる喜びをもたらすバレエは、誰にでも通じる言語。舞台で、精いっぱい（おしゃべり）をしたい、と——」。

でも、「バレエは高尚な芸術、万人向きではない」という誤解もある。たしかにバレエは伝統的に貴族など富裕層が愛好者だった。でも、入院患者や子どもたちの前でも踊ってきた私には、〈バレエの言語〉への確信があった。「〈バレエどころではない人びと〉にこそ、バレエを伝えたい。パンと水だけでなく、〈生きる喜び〉をお届けしたい。世界各地の子どもたちを訪ね、踊りを教えることができた——」が、私の夢です。」という吉田さんは、芸術家である前に、一社会人、一女性でありたいと、05年には、結婚もした。

00年に腰を痛め、ベッドの上で天井を見つめ、「踊れなくなったら何も残らない」と愕然として以来、「私」の生活も大切にしよう」と決意。

「日本人」「女性」といった核にも、無意識のうちにこだわり、「日本にいるときは会話に英語を混ぜまい」と頑張り、先日、美容院で「洗髪お願いします」と言ったら、美容師さんに、「シャンプーですね」と返されて大笑いになったという。

「ロンドンでは、あまりに男性的な女性が増えて、違和感を持つことも多い」。「社会進出自体は歓迎すべきことだけれど、生来の美点を失うのは、悲しい。日本の女性は、皆さん、たおやかで、日本に帰ってくるとホッとする。その根っこの部分を大切にしながら、地球のどこかで、自分にできることを積み重ねていきたい」という都さんは、95年にロイヤルバレエ団のプリンシパル（最高位ダンサー）に。

現在は日英双方に拠点を置いて活躍。07年、紫綬褒章と大英帝国勲章を受けた。

カンボジアの児童売春根絶を目指す

NPO法人「かものはしプロジェクト」の共同代表、村田香苗さん（28）。

児童売春の最大の原因は、貧困。解決策の一つとして、一昨年、同国の世界遺産、アンコールワット近郊の農村に、財布やバッグなどの民芸本をつくる工房を開いた。村人に職業訓練と仕事の機会を提供

し、安定収入をもたらすことで被害を防止しようと。

——「親に仕事があれば子どもは売られず、教育を受けられる。物やお金の寄付ではなく、（一家が安心して暮らせる支援）の道筋をつくりたい」と。

幼い頃、食べ物を残すたびに、父親は、やさしく諭した。「アフリカでは、一切れの肉で命が助かる人がいるんだよ」と。

その影響もあってか、中学生の頃には「人の役に立つ仕事がしたい」と思うように。大学は国際交流学部を選び、授業で東南アジアの児童買春の悲惨な実態を知った。

売春宿でドラッグ漬けにされたり、エイズで命を落とす少女も少なくない。「私は運よく日本に生まれたが、同じ時代に生きる一人として、何かしなければ」と、大学二年の夏、現地に。

タイで出会ったのは、買春被害に遭った母親からHIVに母子感染した、幼い姉妹。——電気ショックでおどされて、売春。なまなましい傷跡と、生気のない顔……。おとなしくて目立つことが嫌いなフェ

リス大の学生は、「このことを伝えるのが私の使命」と、一人で活動を開始。学校内で講演したり、NGOの勉強会や国際会議に参加したり、地道な活動を続け、出会った仲間たちと、2002年、(かものはしプロジェクト)を設立した。

いま現地の工房で働く女性は三十人に。ミシンを踏む音と明るい声がはじける。

「踊り子が二人、学校に行けるようになった。」都会の出稼ぎから戻って来られた。」など、続々届く報告を聞くときが、いちばん嬉しい。

「いつか世界中から児童売春をなくしたい。『そんなことは不可能』と言う人もいるけれど……」

——強い正義感と行動力が、磁力のように多くのサポーターを巻き込み、一步一步、前進してきた。その彼女たちの笑顔の写真が、事務所の壁いっぱいに並んでいる。

73歳 看護師 一年生

古希を過ぎて看護師国家試験に合格した、東京・中野の宮島静子さん。19歳で宮崎市の准看護師学校を卒業。県内の病院に准看護師として勤め、その後、上京。病院で働きながら高専看護学校の夜間コースに通い、28歳で結婚。三年の過程の半ばを過ぎた頃、妊娠で断念。結核やハンセン病などの療養所で働く。しかし06年、新宿区の聖母看護学校の入学案内を見て、「年齢制限はありますか」と質問。「ない」と知って受験、合格。夫には、入学が決まってから、相談したという。

病院の実習では、「ぜひ、うちの病棟に来てください。70歳を過ぎてても、はつらつと学ぶ姿を見せたい」と歓迎され、毎日、十時間勉強。72歳で、看護師試験に合格した。

今まで900人の通信教育課程の生徒を送り出してきた聖母看護学校生徒の平均年齢は、43歳だが、厚労省や日本看護協会に問い合わせても、70代の合格は、異例という。

しかし静子さんは、はつらつ。「若い頃と違って、

力仕事は無理だけれど、患者さんや施設の利用者を温かい目で見守っていきたい」に、周囲も大拍手。

介護職員から歌手へ

29歳で、プロのオーディションに合格した、沖縄宮古島出身の歌手・砂川恵理歌さん。五年前に、がんで亡くなった46歳の男性の言葉を歌う。「ちっちゃくていいから、私、もう一度、一粒の種になるよ」。深く悲しむ両親のために——と。

売上の一部は、ホスピスケアを夢見るNPOに寄付する。

がんの遺伝子解明に7年

埼玉県川越市生まれ。97年東大大学院理学系研究科博士課程を修了。02年6月から、がんに挑戦し続ける大木理恵子さん(39)。

「がんとは、正常な細胞が変化し、異常な増殖を

繰り返す状態。その過程が解明されれば、がん化を防ぐ戦略も見えてくる」と、6年がかりで、がんに関連する三つの遺伝子のp53、Akt、PHLDA3を調べ、がん化のメカニズムを解明。成果を米国の科学誌「セル」で発表した。

p53は細胞のがん化を防ぐがん抑制遺伝子。Aktは逆に細胞をがん化させる。p53が司令塔になって別の遺伝子に命令し、その働きでがん遺伝子を抑え、細胞のがん化を防いでいることはわかっていたが、p53の指示を受けて働く遺伝子の正体は、謎だった。

大木さんたちは、「がん細胞が死なずに異常に増殖する点」に注目。細胞死を引き起こす遺伝子PHLDA3が、p53の指示を受け働く遺伝子だ、と突き止めた。

しかし、遺伝子を特定するだけでは治療法は実現しない。

「具体的に、どのようにがん遺伝子を抑えつけているのかがわかれば、治療法の糸口になる」と、メ

カニズムの解明に挑み続けている。

父は白血病、母は大腸癌の研究者だが、東大に入った時から研究者を志していたわけではない。芸術やマスコミへの関心のほうが強かったが、それを覆したのは大学4年の時に読んだ分子生物学の教科書。

「細胞内の現象は、一つの分子から、すべて論理的に説明できる」とを知った。「生物学は暗記科目」と思っていただけに、衝撃を受け、研究者になることを決意した。

「研究者は、本当に研究が好きでないと、やれない。よく考えて決めるように」と話していた母は、喜んだという。大学院進学後は、週2回、研究室に泊まり込んで実験。今回の成果につながる細胞死や細胞増殖に関係する遺伝子の研究を重ねた。

後輩の大学院生らと共同研究するうち、「任期付きの研究職が増えて、優秀な学生が将来を不安視し、研究者を進路にしない傾向があることに気がついた。女性研究者は、結婚や子育てとの両立に悩む人も多い。「体力・知力に勝る若い世代こそ、安心して研

究できる環境が必要なのに」と、若い研究者への支援強化を訴える。

「一つの遺伝子の機能解明が、がん克服に結びつく。そんな分子生物学的な研究の重要性和、面白さを、若い研究者と共有して、研究を発展させたい」と励み続ける39歳。

細胞の中のリボ拡散の働きを研究 2009年度猿橋賞を受賞

シヨウジョウバエを使った実験で、「細胞の中の、RNA（リボ核酸）が、不要のたんぱく質をできないようにする仕組み」を突き止めて受賞した、塩見美喜子さん。

もともと研究者志願だったわけではない。京大・大学院で修士課程を終え、夫の留学先の米国に、共に渡る。専業主婦に専念するつもりだったが、夫の指導教授のすすめで技術補佐員に。「流れにまかせて」生化学研究にのめりこみ、博士号を取得。競争の激

しい米国でのスタートだったが、「アピール上手がそろそろ国際学会は苦手。一人で実験するのが楽しい」というマイペース派。

九年間の米国生活中、長女を産んだが、育児を大切に、夫と同じテーマで研究できる環境を求めて徳島大に赴任。昨年、慶応大医学部総会医科学研究センターに転任。結婚や出産でキャリアを断念せざるを得ない日本の女性研究者に、「研究を続けたい」という意志が大事。いつ機会がくるかわからない。見切りをつけないで」とアドバイス。将来の夢は「RNA干渉研究のかじとり役」という47歳。

森崎和江さん

『精神史の旅』全五巻を完結

60年代初頭、雑誌『サークル村』を離れた、詩人で作家の森崎和江さんは、その後も筑豊に住み続け、炭鉱の合理化が進むなか、(夫や男たちよりも、働く女性たちを愛し始めた女たち)に、より惹かれ、

このたび、著作『精神史の旅』を完成。朝鮮→炭鉱→沖縄・与論→東北・北海道、そして朝鮮に帰する精神の旅をまとめた。

『わたし佐賀市の旅』の先には、「日本」と「いのち」を見つけた

「命あるかぎり東アジアの平和を考えていきたい。日本の歴史の中で、一人の女が、こんなふうにか生きられなかったことを、孫の世代の誰かが知ってほしいと思います」と語る。

女性社長300人が不況を吹っ飛ばす!

「女の力で不況を吹っ飛ばそう!」と、5月17日、東京・表参道ヒルズに、第一戦で活躍する女性社長300人が集結。

オープニング講師は、ダイエーの元最高経営責任者で、東京日産自動車販売社長、林文子さん。「相手の話をよく聴き、思いやることのできる女性特有のやさしさを生かし、日本経済を元気にしてほしい」

とアドバイス。

発展途上国のアパレル製品や雑貨の企画・生産を手掛けるマザーハウス代表、山口絵里子さんは、「貧しい途上国にも、素晴らしい資質と可能性のあることを伝えたかった」と、創業時を回顧。

パネルディスカッションでは、ネットイヤーグループ社長CEOの石黒不二代さんらが「発展への道」について、それぞれの私見を展開。

石黒さんは、「価格競争に巻きこまれない質の高い商品」の重要性を強調。カフェグロープ・ドットコム社長、矢野貴久子さんは、「中・高校から経営を学ぶ体制をつくり、起業しやすい環境にすることが大切」と、教育の観点から訴え、アイラ・インターナショナル代表取締役・森本倫子さんは、「起業は人材。社員のことをよく知り、共にやっていく姿勢が大事」と人材重視を。ホッピービバレッジ副社長の石渡美奈さんは、「経営者はこの世に生きたしるし」を残すことができる。楽しみながらやって

いきましよう」と締めくくり、参加者たちに大きな希望と夢を与えた。

看護師の予備校を運営する女性

「患者さんの勇気を支える、看護師になってほしい」と、看護師試験対策専門の予備校を、さいたま市大宮で運営している、さわ和代さん。自ら授業もする。看板教授でもある。

看護系大学を卒業後、22歳で助産師として病院に就職。三年後、県職員として一年間、看護教育に携わり、その後、厚労省で六年勤務して退職、子育てと祖母の在宅看護に明けくれ、子どもが中学に入った頃、大学時代の恩師の誘いで、各種資格試験対策・予備校の講師に。やりがいと楽しさの毎日だが、複数の学校での講義に疑問を感じ、独立して開業。昔の仲間とめぐり会い、さわ研究所をスタート。資本金500万円で売上2億。社員は二人で前途洋々。「心ふれあう感動を！」がモットー。

会と催し

〈九条の会〉講演会

昨年十二月に亡くなった〈九条の会〉の呼びかけ人で、評論家の加藤周一さんの志を受け継ごうと、「九条の会講演会」が、二〇〇九年六月二日、東京・日比谷公会堂で開かれた。壇上には、知的で、おだやかだった加藤さんの顔が映し出され、会場いっぱい二千名余りが「憲法改悪を許さない」と誓った。同会呼びかけ人の、井上ひさし、大江健三郎、奥平康弘、澤地久枝の四氏が講演。梅原猛、鶴見俊輔氏がメッセージを寄せた。加藤さんのパートナーで、評論家の矢島翠さんも、あいさつした。

井上さんは、「私の良し悪しの判断の一つは、〈裏切り〉ということ。友だちを裏切れることは、したくない。その友だちは日本国憲法だと思っている。」と

くに9条、25条は、親友中の親友。彼らを裏切らないことを加藤さんから学んだ」。

大江さんは、「北朝鮮の人びとと私たち日本人が、本当の信頼関係を作るためには、私どもは、本気で憲法9条を守り、完全に実現しようとしていることを示すことだ。その大道を、はっきり示し、それを、周辺の国々に認めてもらえるならば、私どもの国と、他の核保有国との間の信頼関係を作り出す一番大きな条件になる」と話した。

奥平さんは、東京裁判を題材にした木下順二氏の演劇『審判』と一緒に観たとき、加藤さんが、「こんなに難しい芝居を、こんなにたくさんの方が観に来てくれるんだねえ」と話していたことを紹介。「後で考えたら、『だから日本の将来は、まんざらでもないよ』ということだったのかと思った」と話し、「『まんざらではない』と、ひと安心された加藤さん

を、本当に満足させよう」と呼びかけた。

澤地さんは、「若い感性、若い思考というのは、ゆさぶれば、分かる言葉で働きかければ、ああそうかと、きつと思う。市民運動は引き算ではないけない。

一人が二人になり、倍々ゲームのようになっていくことが市民運動の生命だと思う。いろいろな問題があるが、一点にしぼるとなると、「9条を守る」ということになる。その気持ちをも、人から人につないで、足し算にしていくことで、小田さんや、加藤さんのお気持ちを生かしていくことができる」と述べた。

また、矢島さんは、「世界の理想である憲法9条をゆるやかなネットワークのなかで根づかせることで、加藤の遺志は達成できる」と話し、最後に、「詩人・加藤周一」をしのび、加藤さんが作詞した「さくら横ちよう」（作詞・別宮貞雄）を、ソプラノ歌手の大橋ゆりさんが独唱した。

♪ 春の宵 さくらが咲くと花ばかり

さくら横ちよう

♪ 春の宵 さくらが咲くと

花ばかり さくら横ちよう

想いだす 恋の昨日 君はもう

こゝにいないと… ♪。

戦後間もない、東京・渋谷の情景を描いたこの歌を、加藤さんは、自分のどの著作よりも気に入っていた。

二〇〇四年六月十日、〈九条の会〉発足に際しての記者会見で、加藤さんは、次のように話した。

「第二次世界大戦のときもそうだったが、日本の常識と国外の常識が違うことが、よくある。

それが一九三〇年代には非常に大きくなり、最後には太平洋戦争に突っ込んだ。

今も、日本の常識と国外の常識が違う。もし疑う人があるなら、一歩でも外に出て、外国の人に聞いてほしい。日本のことを知っている人であれば、だいたい私の言ったことと同じことを言うはず。〈それに現実的な対応をしよう〉というのが、九条の会のアピールだ

《九条の会》は、小田実さん（〇七年七月に死去）に続き加藤さんを失い、七名になったが、発足時の九名の志は、大きく広がっており、九条の会事務局は、「この日の集会で、地域・職場・分野別など、草の根の「会」が七、四四三に達した」と発表した。

（東京・中央区9条の会）事務局 福田和男

《声なき声の会》

二〇〇九年六月十五日、年に一度の《声なき声の会》の集いが、東京・池袋の豊島区勤労福祉会館で行われた。

樺美智子さん

六月十五日は、一九六〇年・日米安全保障条約の国会への大規模な反対デモの最中、命を奪われた、東大生・樺美智子さんの命日である。

樺さんの学内葬の光景は、今も、忘れられない。正門から安田講堂までの公孫樹並木を埋め尽くした人びと。緑の樹に囲まれて、あたかも緑の炎が燃え

立っているかのようなだった。茅誠司総長の弔辞。白菊の献花。シンとした中に列が横に割れたと思ったら、ご遺族の、ご両親とお兄様の退場であった。

小林トミさん

その頃、中学の美術教師をしていた小林トミさんは、「誰でも入れる声なき声の会」と書いた横断幕を掲げて歩いたところ、一般市民がこれに多数参加し、無党派の反戦市民グループ《声なき声の会》が生まれた。当時の岸首相が、「声を出しているデモ隊等以外の声なき声は、私を支持している」と発言したことへの抗議だった。米軍の駐留を認める日米安全保障条約には、戦争の匂いがする。「戦争はいやだ」の意思表示だった。

その後、樺美智子さんの命日、六月十五日には、毎年、集会を開き、参加者一同が国会の南通用門で献花をし、黙祷を捧げてきた。

ある年などは、これ見よがしに金網付きの囚人護送車が横付けされていた。それを見た、京都から毎年

参加される鶴見俊輔氏が、「一度、乗ってみたいな」と、冗談ともつかず口にされたりした。

基地問題

今、普天間基地問題が、持ち上がっている。マス・メディアの扱いは、移転。「沖縄県内か県外か」の観点のみだが、廃止もありうることは、報じられない。「安保破棄」という選択の可能性を忘れたのだろうか。「日米同盟堅持」という言葉に、すりかえられてしまっている。もちろん、外国と仲良くすることは大事なこと。それと、「外国の軍事基地を、独立国が、半世紀も堅持し、〈思いやり予算〉と称する過分の負担までする」こととは別問題である。

そのことを、忘れないようにする人たちがいる。だから、毎年、初めての参加者が加わり、九六歳になる方も、参加され続けているのだと思う。そして、会の代表世話人である小林トミさんの死（二〇〇三年一月二日）を乗り越えて、機関誌「声なき声のたより」も一〇〇号を越えた。

ベトナム戦争のときには、〈ベ平連〉という反戦運動の母体にもなり、現実には脱走米兵を支援した。

意外なことに、この会の発足資金の提供者は、上坂冬子さん。一九五九年、「職場の群像」で、第一回、中央公論社思想の科学新人賞を受けて世に出た上坂さんは、そのときの賞金三万円を、上坂さんを見出した鶴見俊輔氏に託し、鶴見さんから事務局長の高畠通敏氏に……という発足資金の流れであったという。

今年の集会から

ソ・シエチヨルさんは、韓国から参加。

「二〇〇四年と今日で、二回目になります。現在、「グリーン・コリア」という市民団体で活動しています。日本の反基地運動と連帯しながら、日本での反基地運動のあり方とか、六〇年の安保闘争の当時の闘いの現場、草の根の市民運動の活動を、韓国にも紹介しようと思って記録をしています。平和は必ず勝つと思っています。だから平和を愛する日本と韓国がこれからもずっと長く付き合って、一緒に頑

張りたい。」と語った。

当夜の参加者には、土曜の夜、新宿駅西口で反戦の意志表示として、スタンディングしている人。憲法の空洞化に対して、今度は安保を空洞化していく「安保無効」の裁判をしている人。図書館運動を十七年続け、「図書館は、民主主義の砦」と気づいた人。「ベルリン市民との交流の中で、ドイツの兵役拒否の青年たちの受け皿をしているNPOが、北海道や、他にもあり、彼らは、福祉施設で働いていることを知った」と伝える人——できる範囲内で、毎日の暮らしの中から、平和への手がかりを求め続けている人たちがいるのだ。

「いままでの五〇年」と「これからの五〇年」

来年は〈声なき声の会〉が生まれてから五〇年目、資料を集めよう。記念の大きな集会にして、安保を問いたです年にもしよう。そして、「これからの五〇年」への道標にしよう、と、準備をはじめている。

(東京・杉並区 飯岡祐保)

「6・19福岡大空襲記念 2009平和のための女性のつどい」

敗戦の年、昭和二〇年六月十九日、福岡大空襲によって、福岡の街は、焦土と化した。

この日を朴して、この街を愛し、この地で戦火に尊い命を奪われた人びとへの哀悼を捧げる集会は、二八回目を迎えた。火の海を逃げまどい、肉親を失った哀しみや、あの日の凄まじい体験が、毎年語りつがれてきた。加えて、その年ごとに、必ず平和にちなんだテーマを選んで、人びとに語りかけ、最後に子どもたちに残そう戦争のない平和な世界を」と、呼びかけ続けてきた。

二〇〇九年のテーマは、「知っていますか、第五福竜丸のこと」

東京都立福竜丸展示館からパネルの一部を借りて、福岡市アジア美術館で五月二十八日から六月二日まで開かれた展示会は、この事件を知らない若い人びと

に、とりわけ衝撃を与えるものであった。

いま、なぜ「第五福竜丸」か。

五年前の一九五四年三月一日、マーシャル諸島のビキニ環礁で行われた米軍の水爆実験によつて、近くで操業中の木製マグロ漁船「第五福竜丸」が、水爆の「死の灰」を浴び、乗組員は皆、原爆症にかかり、半年後に久保山愛吉さんが命を落とし、(広島・長崎につぐ第三の被爆事件)とされる。

この事件への怒りから、原水爆禁止運動と母親運動が始まり、「第五福竜丸」の保存など、被爆体験を風化させない全国的な運動に拡がった。

講演会では、第五福竜丸展示館主任学芸員・安田和也さんが、福竜丸保存の現場から、「事件の歴史と、その時代」について語った。

米ソの水爆開発競争から狂気の核軍拡へ。それを背景とした第五福竜丸事件の実相の全容は明らかにされないまま、死の灰を背負った人びとの、半世紀の苦悩はもとより、美しい島を追われ、生存の権利

を奪われたビキニの島民の苦しみも、今も癒やされていない。――世界に二万発を超える核兵器。さらなる開発を意図する米軍と軍需産業。

展示パネルの中に、アメリカの科学者がビキニの島民を指して、「彼らは限りなくネズミに近い」と言い放つ言葉があり、怒りで体が震えた。

しかし、いま、確実に新しい動きも始まっている。世界に訴える日本からの核廃絶の訴えは拡がり、オバマ大統領をして「核軍縮から廃絶へ」と言わしめた。被爆国から平和の輪を拡げる努力を、やめるわけにはいかない。

「核兵器のない世界をめざし第五福竜丸の航海は続く」と締められた安田和也さんの語ることは、「五年前の事件は、過去のものではない」と、今に連なる重い課題を、未来に向けて投げかけた。

今年の集会では、冒頭で、高校生平和大使の一人、大神桜子さんが、私たち大人に向かつて、力強い(平和へのメッセージ)を語ってくれたことで、たのしい未来が見えてきた。(あごら九州 福田光子)

V A W W - N E T ジャパン 総合シンポジウム 「今なぜ、松井やよりを語るのか」

七月十一日(土)、二〇〇九年度の V A W W - N E T ジャパン総会の後、東京・四谷「幼きイエス(ニコラ・バレ)」にて表記のシンポジウムが、一般公開の形で開かれました。近畿大学教授・大越愛子さんの講演を核として、松井やよりさんの遺産をしっかりと引き継いでいく決意を確認しあった会となりました。当日の主な流れをご紹介します。

中原道子 V A W W - N E T ジャパン共同代表の司会で、まず、西野瑠美子共同代表(緊急の用件があつて総会のみ出席)のメッセージが読みあげられました。

N H K の女性国際戦犯法廷番組改ざんに対する裁判を松井さんが決意した熱い思いを、改めて思い起こさせる、力強いメッセージでした。

シンポジウムの主軸となった大越愛子さんの講演

は、「松井やよりの闘いの意義を、今、振り返る―ネオ・リベラリズムとナショナリズムに抗して」と題する堂々たる研究発表でした。

日本軍性奴隷制問題に取り組む最も具体的な成果として、二〇〇〇年十二月に開かれた「女性国際戦犯法廷」(以下、法廷)を取り上げ、「それも含めて、この二〇年間の闘いは、ナショナリズムとの攻防だけではなく、世界的なネオ・リベラリズムに、のろしをあげるものだったのではないか」と、大きな問題提起をしました。「その理論的視点を打ち立てたのが松井やよりであり、この法廷での判決こそ、松井やよりの思想の到達点であつた」と展開していく大越さんの講演は、聴衆の心を掴みました。この講演は、今後、論文として、さらに完成されていくとのこと。松井さんの闘いが学問的に位置づけられるうえで、きわめて心強い励みとなる発表でした。

講演の後、w a m 運営委員長の池田恵理子さんが、松井さんとの深い関わりに触れながら、法廷後の活動の拠点としての w a m の存在について語りました。

資料を整理し、研究を重ね、情報を発表していくなかで、ビデオとはまた異なる強い媒体としてパネル展示をとりあげ、今後さらに、松井さんの遺志を多角的に追求していく姿を見せてくれました。

さらに今年四月から松井さんの出身校である東京外国語大学で、大学院・総合国際学研究科教授となつた金富子^{キムフジ}さんが、「法廷があらゆる意味で正當に評価されていないこと。松井さんの業績の歴史的価値がフェミニズム研究者にも十分に認識されていない点」などを取り上げました。そして日本と韓国の若者たちに見るフェミニズム観を紹介し、「慰安婦」問題を社会的に埋没させないためにはどうしたらいいのか、今後への課題を投げかけました。

金さんの大越さんへの質問にあつた歴史修正主義とネオ・リベリズムの関わりについても、これから一層論議が深まり、忘れてはならない視点を指摘するものでした。

個人的な触れ合いの体験を言葉にすることが、も

う会えない人の存在を、まざまざと映し出すものであることも、金さんの話から強く感じました。

金さんは、「松井さんと議論しあつて、ついには互いに涙さえ浮かべて主張しあつたのが、単にチラシの色のことだった」と、笑つて話してくれましたが、松井さんの姿を目に見るようなエピソードです。

東京外語大、朝日新聞社を通じて、常に後輩として後を追つた私も、松井さんの新聞記者としての姿などについて、思い出すままに語りました。

「松井やよりさんというジャーナリストがいたそうですね」と問う学生がいるのが不思議ではない年月が過ぎようとしている今、活字や写真を通してだけでなく、生身の触れ合いを知る者が、その感触を残していくことも大切かも知れません。

私が話したひとつに、松井さんから託された膨大な記事の切り抜き帳のことがあります。松井さんが最後に入院なさる数日前、私は松井さんの自宅で大学ノートがぎゅぐゅと入った幾つかの段ボール箱を

見せられました。そして、「これは絶対に処分されたくないから、なんとか残すことをお願いね」と言われたのです。亡くなられてから、つぶさにその大
学ノートを見て、私は驚きました。本当に松井さんが書いたすべての記事の切り抜きが張り込んであったからです。少なくとも駆け出しの時代以外の、署名記事は、すべてがそろっていました。

記者は誰しも、自分が書いた記事を保存しておきたいと思うものです。でも実際には忙しさに紛れて、なかなか実行できないのですし、記事をとっておくのは大変な作業で、自分が書いたものが、たとえば東京で出稿したから全国版にのるとは限らないのです。東京の紙面にのらなかったものが大阪本社管轄では載ったというようなことも、しばしばあります。それをフォローして、大阪や名古屋や九州からも紙面を取り寄せるのは、同じ新聞社内とはいえ、意識的に力を注がなければ出来ないことなのです。忙しいという点では、松井さんは誰にもひけをとりませんでした。でも細大もらず、記事をとってお

いたということは、松井さんが、いかに自分の記事一本一本に、思いをこめていたか、その強烈な表れだと思います。

およそ五千本にのぼる膨大な紙面の切り抜きを見ながら、自分のもてる全精力をそそぎこんだ新聞記者魂をまざまざと見る思いがしたのでした。それらの紙面に掲載された記事については、すべてコピーしてw a mで見られるように、ファイルに整理しました。

あらゆる資料が電子化されていく時代ですが、松井さんが書いたものを紙面に掲載された記事の形でこれからもぜひ読みついでいってほしいと思います。

来年は「女性国際戦犯法廷」が開かれて十年目となります。この画期的な企画に、心血を注いだ松井やよりさんが共にいてくれないのは、何としても悲しいことですが、その志を絶やすわけにはいかない——そう心に響かせたシンポジウムでした。

(w a m, v a w w i n e t 会員、翻訳家 高橋茅香子)

廬溝橋事件七二周年で集会 伊藤千尋さん「生活に憲法を使おう」

旧日本軍が中国全土に攻め入るきっかけとなった一九三七年七月七日の廬溝橋事件から七二年を記念し、「過去を見つめ未来を考える 夕べ」が二〇〇九年七月十五日、都内で開かれました。主催は、中国友好協会、日本平和委員会、日朝協会など八団体。朝日新聞記者の伊藤千尋さんが「活憲こそ平和の力——変化の力」と題して講演しました。



講演中の伊藤千尋さん

伊藤さんは、まず、〇一年の9・11テロ事件当時、アメリカが愛国心に固まり、大統領に武力行使の権限を一任する法案が提出されたとき、上院・下院を含め、ひとりだけ反対した議員、黒人女性のバーバラ・リーさんがいたことを紹介。彼女は憲法を読み、

「議会、議員というのは、大統領や行政側が暴走しないように、ちゃんと監視する、手綱を引き締める」という役割が書いてある」ことから反対票を投じ、そのことを有権者に説明した結果、次の選挙では圧勝したということです。バッシングされても、自分が正しいと思ったら、信念があつたら、人前に出ていつて社会を変えていく、人を変えていくというアメリカ流のやり方を、日本との違いとして話しました。次に伊藤さんは、中南米での特派員経験から、コスタリカで、いかに憲法が「生活手段」として日常的に使われているかを披露。

コスタリカは軍隊を持たない国として日本で知られるようになりましたが、この国では八歳の子が、「校庭と川の間に柵がない、そのままにしているのは子どもの基本的人権を奪っている」として裁判を起こしたそうです。電話一本でもいいし、葉っぱの裏に書いてもいい、それが現実に行われたという話に、会場は驚きに包まれました。

「他の国から侵略されたらどうするか」という質

間に対しては、「そういうことのないように、普段から平和のために努力しているし、お金も使っている。そういうコストリカを攻める国がありますか？」と逆質問。人口四百万人のコストリカは、百万人の難民を受入れたことがあり、要らなくなった軍事費は、教育費に回したということです。

最後に伊藤さんは、西サハラ沖合の大西洋に浮かぶグランカナリア島テルデ市に、日本国憲法九条の碑があることを話し、「九条は日本だけでなく、世界の人びとのもの。憲法を守るのではなく、使って、よりよい社会にして、私たち自身が輝こう」と呼びかけました。

(東京・中央区9条の会 事務局 福田和男)

「人間の国」へ行動した作家

小田実さんを偲ぶ会(没後二年)

二〇〇九年七月十八日(土)、東京・YMCA(在日韓国)アジア青少年センターで、小田実さんを偲

ぶ会(没後二年)が開かれた。

第一部 小田実文学と思想

司会 (宮田穂栄)

小田実を読む (澤地久枝)

「河」に触れて (黒川 創)

発言 (吉川勇二)

第二部「被害者にも加害者にもならない」平和な

未来へ

司会 佐藤ひろこ

小田実「世界わが旅」ビデオ上映

小田実さんが追求した平和と「地球村」

(姜惠淑・韓国清州大学舞踊科教授)

民族舞踊「サルプリ」(姜惠淑)

生きている小田実 (玄順恵)

三つの〈3・1〉「9・11と9条小田実平和

論集」から (今村 直)

閉会のあいさつ (糸井玲子)

〈小田さん没後二年〉の集会は——今こそ「小さな

人間」がまともに生きる社会——をテーマに、韓国から、従軍「慰安婦」創作舞踊「あなたを呼ぶその魂」東京公演（一九九五年）で知られる民族舞踊家・姜恵淑さんをお招きして開催された。

集会の最後に、私が朗読した詩の要約を、ここに載せて、報告いたします。

三つの3・1に寄せて

3・1 弥生「三月一日」ときいた時

私たちは何を連想するでしょうか

花鳥風月を愛でる日本人の

精神性から言えば

奈良東大寺二月堂のお水取り

暗闇に赤々と春を呼ぶ

松明の火の粉、炎を

思い浮かべるかもしれません

その「三月一日」の一つ目は

「ビキニデイ」水爆実験

一九五四年三月一日

日本の南東 四千キロの太平洋

ビキニ環礁で米国が水爆実験

第五福竜丸が被爆

久保山さんが亡くなった

小田さんは、「死の灰」の記憶を心にとめ

一九八一年三月一日 ビキニデイの集会で

「核のない世界」をねがい講演された

二つ目の「三月一日」は

三・一独立運動

一九一九年三月一日、京城（現ソウル）

タプコル公園（旧パゴダ公園）で

朝鮮の民衆は、帝国主義日本と

その植民地支配に抗して

民族独立運動をはじめた

ここには民族的非暴力抵抗の歴史が刻まれている

三つ目は、一九七四年三月一日

「インフレから生活を守る国民春闘」

弱者救済集会

この日 英国では野党労働党が

総選挙で勝利

五月 ウィルソン政権が誕生

「つぎ目のない織物」に似ている

歴史の中の一片の出来事

その三つの「三月一日」は、何を私たちに語りかけているのでしょうか

小田さんは語ります——

私の思想、信条、権利、生活、感情

それを「日本国家」の先に

おきたいと希った

国家の強大、横暴、忠誠の強制下で

ないがしろにされた「私」を

もっと大切にしたい

そして最後に私は考える

あの十五年戦争で

日本人が殺し また殺された

あまたの人びとのことだ

私の思いは「三・一蜂起・独立運動」の

死者(七千五百人余)にまで行く

おびただしい死者が

「新憲法」をかたちづくったのだと

私の思いはつづく

(小田実さんを偲ぶ会 今村直)

1929年→1949年→2009年

捕虜の待遇・権利を定めた

ジュネーブ条約記念の集い

二〇〇九年は、一九二九年七月二七日に、ジュネーブで行われた「俘虜の待遇に関する国際条約」の調印からちょうど八〇年。当時、日本政府は、この条約に調印しながら、結局批准せず、大戦へと突き

進んでしまいました。

日露戦争（一九〇四～一九〇五年）当時の、ロシア軍捕虜、第一次大戦時（一九一四～一九一八年）のドイツ軍捕虜を、手厚く遇した精神は忘れられて、大日本帝国軍では、「生きて虜囚の辱めを受けず」との「戦陣訓」（一九四一年一月東条英機陸軍大臣訓令）ばかりが強調され、ジュネーブ条約が教えられることもありませんでした。

その結果、多くの連合国側捕虜や民間人を虐待し、国際社会から指弾され、第二次大戦後の戦争裁判でも厳しく裁かれることになり、他方、戦後シベリアなどに抑留された日本軍捕虜は、不当な抑留・強制労働に対し、拒否・反対することもできず、收容所内で、多くの犠牲を出す結果となりました。

また二〇〇九年は、一九四九年八月十二日に調印されたジュネーブ条約（四条約中、第三条約が、「捕虜の待遇に関する条約」、日本も一九五三年四月二一日に加入、七月二九日に国会承認を得て、十月二一日公布・発効）の四〇年目です。そこで、改めて

第二次大戦およびその後の戦争の惨禍を考え、とりわけ捕虜の待遇・権利に関する問題に対する理解を広めようと、記念の集いを、衆議院解散直後の七月二三日、東京・永田町の憲政記念館で開催しました。（全抑協・捕虜体験を記録する会・同進会・POW研究会・元捕虜&家族と交流する会・「捕虜・日米の対話」・戦後補償問題を考える弁護士連絡協議会・戦後補償ネットワークが共催。参加者約六〇人。）

民主党戦後処理問題プロジェクトチーム捕虜問題小委員会幹事長の藤田幸久参議院議員は、挨拶の中で、戦時中、麻生鉱業で使役された元捕虜らの問題を国会で追及。当事者・家族の来日・交流を実現した活動などを紹介し、「同条約の意味が、現在でも強く問い直されている」と指摘。

記念シンポジウムでは、まず、連合国捕虜・民間抑留者の補償請求訴訟の原告側弁護団事務局長で国際人道法に詳しい鈴木五十三弁護士が「ジュネーブ条約の発展と今日的課題」と題して講演。一連の戦

後補償裁判とハーグ条約・ジュネーブ条約の国際人道法に基づく論点を整理し、「裁判では、個人の請求権は認められなかったが、責任国・所属国救済の両方の考えに立脚して立法することは、条約を補強し、発展させることでもあり、重要な意味を持つ」と報告。

ついで、内海愛子・早稲田大学大学院客員教授が、「日本軍の捕虜政策とジュネーブ条約」と題して講演。戦時中の日本軍の捕虜政策をジュネーブ条約との関係で検証し、東京裁判で訴追された捕虜虐待の具体例を紹介しながら、国際社会・連合国側の捕虜取扱の認識と、日本側の認識・体制との間に、大きな差異があったことを指摘しました。

この後、戦時中、捕虜監視員を勤め、戦後BC級戦犯として死刑を宣告され、のち無期に減刑され、巣鴨プリズンに送られた後、釈放され、日本で暮らしてきた韓国・朝鮮人元戦犯者の李鶴来同進会会長と、シベリア抑留者を代表して大野清全国抑留者補償協議会副会長が、体験を発表。当時、ジュネー

ブ条約を教えられず、結果として大変な悲劇を負わされた悔しさも込めて、当時の様子を報告しました。

戦後十一年たって一九五六年に巣鴨で釈放された李同進会会長は、「当時は『戦陣訓』を叩き込まれ、上官の命令は絶対だったので、ジュネーブ条約を教えられていても、虐待は阻止できなかった可能性が高いが、一定の抑止にはなったのではないかと思う」と述べ、大野全抑協副会長は、「ジュネーブ条約は知らなかったが、戦争が終わったのだから当然祖国に帰れると思った。四年後、肺結核で帰国。治療に八年を要した。兄もニューギニアで行方不明のままだが、国は生死確認の責任を果たすべき。戦争は罪悪で、二度と起こしてはならない」と強調しました。

全抑協は、ジュネーブ条約追加議定書の批准運動の署名運動を全国規模で展開したり、十年前にジュネーブで開催された一九四九年条約の50周年記念式典にも参加。また一九八六年には一九四九年条約の日本政府の訳に、誤りがあることも指摘し、外務省告示で『《抑留国》→「当該国」』の誤訳訂正を実現

させたことなども紹介されました。

永野貫太郎弁護士、戸塚悦朗龍谷大学法科大学院教授、元南方捕虜（降伏日本軍人）と扱われた）の大場定男さんら、参加した会場の元抑留者・捕虜、研究者・弁護士、支援者らからも、体験の紹介、質問・意見が活発に出され、ジュネーブ条約をテーマにした、市民による意義深い集いとなりました。

シンポジウム終了後行われた懇親会には、「戦後強制抑留者特別措置法案」提案者の谷博之参議院議員（民主）も参加して、元抑留者・捕虜問題関係者らと交流を深めました。

本来は日本政府や赤十字などが主催し、同条約を大いに宣伝・紹介すべきですが、残念ながら何の取り組みもなく、元捕虜団体と市民団体が呼びかけて共催する催しとなりましたが、新政権に、こうした取り組みへの強化も、求めていると思います。

（戦後補償ネットワーク世話人代表・

全国抑留者補償協議会参与 有光 健）

「アトミックサンシャイン沖縄展」の 検閲に抗議する（緊急アートアクション 2009）から見えるもの

二〇〇九年四月十一日から五月十七日まで、沖縄県立美術館で開催された「アトミックサンシャインの中へin沖縄——日本国平和憲法第九条下における戦後美術展」において、大浦信行氏の昭和天皇をモチーフにした版画作品「遠近を抱えて」全十四点が、牧野浩隆沖縄県立美術館長や、県教育委員会の「教育的観点からの配慮」によって、展示を拒否されるという事件が起きた。

牧野館長によれば、「沖縄の教育施設であり、公正中立なものを扱うなどの観点から総合的に見て、適切ではない」というのが展示拒否の理由だ。だが教育や中立を口実とした展覧会への介入は、明らかに違法・不当な権力の行使であり、検閲である。

今回、展示を中止された「遠近を抱えて」は、一九八六年に富山県立近代美術館で購入・展示された

ものだが、昭和天皇の写真をコラージュしていることから、県議会と右翼の攻撃によつて、非公開とされ、その後、作品売却、図録が焼却された経緯がある。

○八年にニューヨークと東京で開催され、沖縄県立美術館で三度目の巡回展となつた「アトミックサンシャイン展」の趣旨は、この展覧会を企画したフリー・キュレーター・渡辺真也氏によると、「戦後の国民・国家形成の根幹を担つた平和憲法と、それに反応した日本の、戦後美術を検証する試み」だという。ならば、戦後日本の縮図である沖縄での展覧会で、天皇を扱つた作品を排除してまでも開催した、その企画者のあり方も、批判を免れない。渡辺氏は、開催を実現したい一心で、館長側からの圧力を、あつさり呑み込んでしまい、抗議や交渉を怠つてしまつたのだ。

しかし、それにしても、このような事件が、なぜ再び沖縄で起こつたのか？

国公立美術館運営のあり方——行政への従属や天
下り人事、指定管理者制度、またキュレーターの役
割や美術制度の問題等が、確かに内在している、と

言える。

一方で、展示のテーマとなつた日本国憲法第九条は、第一条～八条「天皇条項」と合わせ鏡のように支えあうことで保持されているといつても、過言ではない。まさに昭和天皇は、戦中、沖縄民衆に「天皇の軍隊」の一員として地上戦を強い、戦後は、日本の独立のために沖縄を米軍に渡した、いわゆる「天皇メッセーじ」の張本人である。九条の足もとには、戦後沖縄の分割及び基地化が、影絵として横たわっている。とはいへ、敗戦後、沖縄民衆は、闘いとりながら平和思想を積み上げてきた。

ところが稲嶺元知事による保守県政に変わるや、国の経済援助のもと、現実的な対応として「新軍事基地計画」を受け入れ、そこにヤマトの文化戦略が刷り込まれ、平和思想を攻撃する勢力が力をつけていく。

牧野館長は、ちょうどその時期、副知事として平和記念資料館改ざん問題などを起こした、沖縄・右派の中心人物でもあった。こうした要素が、背後で

ゆつくりと進行していた、その帰結に起こったのが、今回の事件だったといえるのかもしれない。

やがて大浦作品排除に対する抗議の声が起るや、牧野館長は、地元の新聞に、すかさず弁明を連載し、「自由裁量」と「教育的配慮」を盾に、一方的にいわば天皇への「敬愛」を強要する「菊のイデオロギー」を駆使しようとしたのである。さらに皮肉にも、この展示企画者の、あまりにも安易で無自覚な認識が、こうしたイデオロギーを結果的に後押ししてしまったのである。

こうして、一見自由を謳歌している私たちは、実は、「表現者本人の気持ちの自由」、「自分の気持ちをはかの人間に伝えられる自由」、「一般市民の見る自由（発信を受信する自由）」という「基本的人権の要となる自由」を侮蔑されたのだ。

そこで、この「ねじまげられた自由」を封じ込めずに抗議の声をあげていこうと、〈沖縄県立美術館検閲抗議の会〉を発足させ、美術家・表現者有志たちが抗議声明文を通じて意志表明を行うとともに、

〈緊急アートアクション2009〉——「アトミックサンシャイン」沖縄展の検閲に抗議する美術展——を、急きょ立ち上げた。

七月十八日、日本教育会館におけるオーブニングシンポジウムを皮切りに、七月二十日から八月一日まで東京茅場町GALLERY MAKIにて展覧会及びギャラリートーク、パフォーマンスを催したのである。

この一連の〈アクション〉は、復帰後の沖縄に対して繰り返されてきた、ヤマトの文化や歴史観の押しつけを視野に入れつつ、〈検閲が横行してしまった背景にある表現をとりまく日本の国家や社会の現状〉について、各分野の専門家たちとの対話を通じて、多角的に照らし出し、共に考えていく「場」をつくりだそうという試みであった。

画廊には、展示拒否された大浦作品三点のほか、本件以前に、同じ牧野館長の「倫理上の観点」という意向で、一旦展示されたにもかかわらず、本人の知らないうちにはずされた、石川文洋の、ベトナム

戦争を撮った写真一点等を含む、美術家二六名の作品が展示された。加えて、さまざまな分野からの抗議コメントも展示され、米軍下における沖縄の性暴力を扱うパフォーマンスも、繰り広げられた。

初日のシンポジウムには、一七〇名以上も。立ち見が出るほど人が集まり、画廊内での連日のトークでも、様々な議論が交わされ、終始熱気に溢れていた。

にもかかわらず、この事件及び〈アクション〉は、沖縄では新聞で大きく報道されたというのに、県外全国紙では、ほとんどとりあげられなかった。

そこに通底音のように響いているのは、マスコミも決して表立って触れようとはしない、紛れもない「天皇制のタブー」である。日本人は、こうやって象徴天皇制の呪縛から、気持ちの上でも解き放たれず、この種の「目隠し」に、見てみぬふりをし続けるのだろうか。

奇しくも今年は、明仁天皇在位二〇周年を迎え、天皇が「平和の象徴」として、巧みに「政治化」さ

れていく足音すら聞こえている。この検閲問題が、これからも起こりうる、日本人の内なる「表現の自由」の獲得を問いただす「踏み絵」でもあることを、私たちは目を逸らさずに自覚し、粘り強く行動していかなくてはならない。

* 本件に関するこれまでの様々な活動については、
<https://sites.google.com/site/artaction2009/>を

参照

* シンポジウム第一部の記録は、「インパクション」
170号に掲載、

<http://www.jcaapc.org/impact/magazine/impaction.html>
その他、「琉球新報」、「沖縄タイムズ」のほかに、「あいだ」、「赤旗」、「図書新聞」、「日本ジャーナリスト会議ニュース」等にて報道。一連の動きを社会評論社から単行本として二〇一〇年春に刊行予定。

(朝鮮美術・文化研究、沖縄県立美術館検閲抗議の会、ヤスクニキャンドル行動実行委員 古川美佳)

今年も「09平和の灯を！

ヤスクニの闇へ キャンドル行動」を開催

八月七日～八日に「09平和の灯をーヤスクニの闇へキャンドル行動」を開催しました。○六年、○八年に続き今年は三回目の開催で、テーマは「東アジアからヤスクニを見る」。一日目はシンポジウム、二日目は証言・コンサートで、最後はキャンドル・デモで締めくくりました。今回の行動には、韓国、台湾、中国からも戦争被害者、市民らが参加。東アジア民衆の共同行動として反ヤスクニ行動を展開しました。

〈シンポジウム〉

南相九さん（韓国・東北アジア歴史財団研究委員）、チワス・アリさん（台湾・立法院委員）、シュテファーン・ゼーベルさん（東京大学総合文化研究科博士課程）が報告（石原昌家沖縄国際大学教授は台風のため参加できず、文書報告のみ）。進行役は内田雅敏弁護士。南相九さんは、遺族に無断で、しかも創氏名（日本

名）のままで、韓国人戦死者を合祀した、日本政府・靖国神社の植民地主義を批判しました。チワス・アリさんは、日本が台湾支配のために原住民多数を殺戮した歴史を指摘しつつ、その上で戦争に動員し、戦死した者を合祀し、「魂を返さない」でいる靖国神社を強く批判しました。そして、ゼーベルさんは同じ「枢軸国」として戦争を戦った日独の、それぞれの戦死者の追悼のあり様、その差異について、ドイツの戦没者追悼の歴史・現状を報告しつつ、明らかにしました。六時から弁護士会館で開催したこのシンポジウムには、三百数十人の方が参加されました。

〈コンサート・遺族証言〉

コンサート・遺族証言は、上野公園・水上音楽堂で二時から開催。遺族として、韓国からイ・ヒジャさん（映画『あんにょん・サヨナラ』主人公）、台湾からタイヤル族の張嘉琪・張雅舜さん姉妹、日本の熊田郁子さんに証言していただきました。

ヒジャさんは、「父の恨を解くため、合祀取消しの

日まで闘う」と。張さん姉妹は「加害者と被害者の魂を同じところに合祀すべきではない」と訴えました。

コンサートには、台湾から「飛魚雲豹音楽工団」、韓国から権海孝^{クワンヘヒョ}さんら三人のアーティスト、そして日本から寿、生田正^{ナカ}さん、月桃の花歌舞団らが参加。台湾原住民の戦死者を追悼する鎮魂歌、「イムジン河」「朝露」などの合唱で、コンサートは大いに盛りあがりました。

〈キャンドル・デモ〉

コンサート終了後、七時から、水上音楽堂から、御徒町駅近くの公園まで、キャンドル・デモを実施。このデモに対しては例によって在特会などの右翼が罵声を浴びせてきました。しかし、韓国・台湾・中国・日本の市民のデモ隊は、「ノー・ヤスクニ」「合祀をやめろ」等のシュプレヒコールをあげ、整然とデモを行い、二日間の行動を終えました。

（平和の灯をーヤスクニの闇へ）

キャンドル行動実行委員会 矢野秀喜

葛根廟事件殉難者 命日会

今年も、八月十四日、東京・目黒の五百羅漢寺で、葛根廟事件殉難者命日会が開かれた。

葛根廟事件は、一九四五年八月十四日、旧満州国興安街（現中国東北部ウランホト市）から避難中の、日本の民間人が、ソ連軍の戦車隊に遭遇し、約一千人が命を失った、民間人最大の遭難事件である。

旧満州国は、日本政府の関与で建国され、その新国家建設のために、多くの日本人が渡満した。

しかしながら、ソ連の参戦と共に、日本人は敗戦国民となり、想像を絶する難民生活を余儀なくされた。それでも、なんとか生き残った人は、帰国の道も開けたが、問題は、「死んでしまった人」である。軍人なら、国家で確かめたり、遺骨の収拾にも手を貸すが、民間人の場合は遺棄同然なのだ。開拓団の場合は、国家で渡満を奨励したのにもかかわらず、未帰還者の対策は皆無であった。

戦争のために多くの犠牲を出したのは、国外ばか

りではない。だが国内では、 magari なりにも慰霊の行事を行なっている。しかし旧満州で亡くなった人に対しては、無視同然の扱いなのだ。

それに対して中国政府は、方正県に日本人公墓を建て、慰霊をしてもらっている。これは不思議だ。日本政府の扱いと、あまりにも違うではないか。

一方、葛根廟事件で、犠牲になった人に対して、中国政府は、あくまで非公開の姿勢をとっている。加害者がソ連軍であり、満州を解放してくれた同志の扱い上、表に出せない事情がある。またウランホト市は蒙古自治区の創立宣言をした本拠地でもあり、現政府にとって歴史を蒸し返したくない本音も抱えているのであろう。

そうなると、葛根廟事件の犠牲者は、永遠に浮かばれないではないか。

国内では、事件の生存者や、興安に所縁のある人びとによって、毎年八月十四日、五百羅漢寺を菩提寺として、本堂での住職による読経に続き、蟬時雨しぐれのなか、境内に安置されている「興安友愛の碑」に

詣でて、冥福を祈り続けている。

この事件がだんだん知られるようになって、最近では、ジャーナリストや学者の方、それに、興安とは直接関係のない人びとも含め、戦争を知らない世代の方も、全国から参列してくれるのには感激である。民間がこうして慰霊の行事を続けていることに、いつか、国も目をむけてくれるであらうと期待している。（葛根廟事件殉難者命日会代表 大島満吉）

三鷹事件から六〇年

一九四九年の七月から八月にかけて、国鉄に関係する三つの謀略事件が発生しました。

三大謀略とは、七月五日に、前日から行方不明になっていた下山定則国鉄総裁（当時）が常磐線綾瀬駅付近の線路上で轢死体として発見された「下山事件」。

七月十五日には中央本線三鷹駅に隣接する三鷹電車区から留置中の、七両編成の電車が突如暴走して、六名の市民が犠牲になった「三鷹事件」。八月十七

日に東北本線松川と金谷川間を走行中の普通列車が脱線転覆して機関士一名と助士二名が犠牲になった「松川事件」のことです。

それぞれの事件は「国鉄労組の組合員や共産党員が関与した」という、当時の吉田首相の発言や警察発表などを基に、マスコミの報道が大々的に行われ、これらの事件をきっかけに日本の労働運動は停滞することになりました。現在においても、それぞれの事件の犯人は逮捕されることはなく今に至っており、謎の多い事件として、未だに多くの書籍などで取りあげられています。

私たちは、三鷹周辺のＪＲの職場で働いています。三鷹事件については大まかには知っていたものの、その詳細について知ったのは、三鷹事件から五〇年が経った際に行われた資料の収集でした。多くの資料に触れ、事件の詳細を知ると同時に、背景についても現地の踏査などを通じて学んできました。そして、三鷹事件から六〇年を迎える中で「事件

を風化させない」と同時に、「再審を待つ中で獄死した竹内景助さんの思いに立つべき」との思いから、二〇〇九年七月十一日から十四日にかけて「三鷹事件から六〇年展示会」を開催し、七月十五日には、「三鷹事件から六〇年あらゆるえん罪を許さない集い」を開催しました。

私たちは実行委員会を立ち上げ、展示会と集会の開催に向けて今年の一月から準備を進めてきました。三鷹事件の勉強会や資料の収集、三鷹駅周辺でのピラ配りなどを通じて、市民の皆さんに、広く展示会と集会を広めると同時に、各報道機関への訪問を通じて、週刊誌や新聞、ＴＶなどでも、展示会や集会を紹介して頂きました。

集会では、今も冤罪事件と闘っている松川事件・袴田事件・山形マツト死事件・蒲郡駅事件・ＪＲ浦和電車区事件の当事者や、関係者の皆さんにお越しいただき、これまでのたたかいの報告や、事件の不当性について語っていただきました。

講演では三鷹事件の調査を進めている高見沢昭治

弁護士から、三鷹事件の本質とともに裁判の問題点について語っていただいたほか、裁判員制度についても触れて頂きました。高見沢氏は、「マスコミが捜査当局や司法の動きを監視していかないと、えん罪事件は、なくならない」と訴えられました。

参加された市民の皆さんからは、「三鷹事件当時の資料が多く出されていて勉強になった」「労働者への弾圧が未だに行われていることに怒りを感じる」という声をいただきました。

最後に、「三鷹事件で獄死した竹内景助さんの思いに立ち、冤罪事件に『NO』、戦争に突き進む権力者にも『NO』を突き付けるために、自分たちは何ができるかを考えていこう」という集会アピールを読みあげ、会場からの大きな拍手で確認しました。

私たちの身近なところでも、冤罪事件が発生しています。

JR浦和電区事件では、二〇〇二年十一月一日に組合員を脱退・退職させたという強要容疑で、組

合員七名が逮捕され、三四四日にもわたって勾留されました。労働組合が職場で開催した集会で組合員同志が話し合いをしたことが、犯罪とされています。労働組合の活動を否定するような攻撃に対して、街頭でのビラ配布などを通じて、事件の不当性を伝えています。

蒲郡駅事件は、匿名で届いた組合資料を、蒲郡駅の助役のロッカーから盗んでコピーしたことが、「盗難」とされた事件です。密告を奨励することで、安全を脅かすような会社の施策に反対していた組合役員を排除するために、ありもしない事実をでっちあげていく事件が発生しているのです。

警察や検察が、状況証拠や思い込みなどで犯罪者をつくり出してしまいう刑事事件以外にも、「権力者にものを言う組織」や個人に対しても、冤罪事件が発生しています。

今年に入り、足利事件の菅谷さんが事実上の無罪を勝ち取りましたが、長期の勾留によって奪われた生活は還ってきません。「取調べの可視化」に向け

た議論も始まっていますが、可視化したとしても市民がチェックする姿勢を持たない限り、冤罪事件は、なくなりません。

今後三鷹事件を学び、冤罪事件を許さない社会をつくと同時に、今も冤罪事件で苦しんでいる皆さんと共にたたかいを続けていきます。

三鷹事件について学んでいく中で、当時NHKのディレクターだった片島紀男さんと知り合うきっかけになったのは、事件発生から五〇年が経過した一九九九年に放送されたE TV特集でした。

終戦直後の混乱期の中で発生した国鉄の三大謀略事件を取り上げた番組を制作するにあたって、三鷹電車区構内の調査などに、私たちのメンバーが参加しました。事件のアリバイなどを明らかにするため、竹内さんが実際に歩いたとされる調書のルートを実際に歩き、距離を測定しました。

番組の制作にあたり、片島さんに、「無実の罪で獄死した竹内景助さんの無念を繰り返してはならな

いし、その無念を晴らしたい」という思いや、事件の時代背景などを、帝銀事件などと合わせてお話し頂いたほか、「実際の踏査では〈三鷹事件〉という一つの事件に切り縮めるだけでなく、一九四九年当時の世界情勢などを見ていかないと、事件の本質を見誤る」というアドバイスも頂きました。

取材以降も、多くの場面で助言をいただいたほか、取材の中で集めた多くの映像を頂きました。その映像は事件当時の状況を示すもので、三鷹事件が、いかに世間から注目されていたのかを知ることができました。私たちでは集められない映像も多くあり、たいそう勉強になり、その後の活動の大きな糧になりました。三鷹事件の六〇年集会を共に開催しようとしていた矢先の二〇〇八年十二月、片島さんがお亡くなりになりました。

集会を開催するにあたり、竹内さんの無実を明らかにするために、多くの場面で活躍されていた片島さんの思いに立って、準備を進めてきました。集会や展示会の開催を通じて、竹内さんの無実を多くの

市民の皆さんに伝えることができたと思っております。

三鷹事件を伝える担い手が、また一人少なくなつてしまった中で、片島さんの思いを引き継ぐためにも私たちの役割は非常に大きい、と感じております。これからも三鷹事件の真相を学ぶために、私たちは活動を続けていきます。

(三鷹事件から60年
あらゆる冤罪を許さない集い 副実行委員長 吉田彰良)

日弁連主催「布川事件シンポジウム えん罪をただす再審を！Ⅱ」

冤罪・布川事件最高裁で再審確定！

二〇〇八年七月十四日、東京高裁第四刑事部 門野博裁判長は、二〇〇五年九月二一日の水戸地裁土浦支部の布川事件再審開始決定を支持し、検察の即時抗告を棄却しました。

東京高検は、この東京高裁の再審開始決定に対して七月二二日夜間、「再審事件で二度連続して敗北した場合は特別抗告を断念してきた前例」を破り、

最高裁に特別抗告しました。弁護団は、十一月十三日、検察の特別抗告に対する反論書（A4判85頁）と上申書を提出。検察は十二月一日、特別抗告理由補充書（A4判14頁）を提出しましたが、従来の主張以外の目新しい主張はありませんでした。

これを受けて、弁護団は二〇〇九年一月九日、最高裁に証拠開示要請書を提出すると共に、四月七日、特別抗告理由補充書に対する反論書と、事件全般にわたる総括的意見書を提出しました。そして、最高裁は十二月十四日付けで検察の特別抗告を棄却し、布川事件の再審が確定しました。

布川事件こそ「真の司法改革」のロードマップ

二〇〇九年七月十六日、日本弁護士連合会主催の「布川事件シンポジウム えん罪をただす再審を！Ⅱ」が弁護士会館クレオで開催されました。

はじめに藤本明日弁連副会長の「今、再審の運動に何が必要で何をしなければならないかを明らかにする有意義なシンポジウムになるように」との期待

をこめた開会の挨拶で、昨年に引き続いて二回目のシンポジウムが始まりました。

最初に山本裕夫布川事件弁護団事務局長が、第二次再審の審理で明らかになった冤罪の構造を明らかにしました。①犯人とされた二人と犯行を結びつける物証が全く存在しないこと、②虚偽「自白」を強要し、誤った目撃証言を誘導・操作する警察・検察、③無実の証拠を隠す検察の不正義を究明し、「検察によって隠された証拠が確定審で出されていれば、有罪になったろうか。捜査・公判を通じ不正義だらけの判決は正されなければならない。布川事件をはじめ多くの冤罪事件に、皆さんのご支援を」と訴え、報告を終えました。

基調報告は成城大学教授指宿 信さん。「今の時点で布川事件が起訴されたらどうなるか。私の結論はまた誤判。これを三十分で報告する」と切り出しました。捜査段階での別件逮捕・長期間の取調べ。代用監獄（警察の留置場）を利用した「自白」の強要・誘導・詐術、目撃供述の誘導、指紋関係資料や証拠

の開示や保存が義務付けられていないこと。公判段階では自白の任意性立証の甘さ、逃げ腰、証拠の開示・証拠隠し、証拠の保存・保管など布川事件の問題点を挙げて、日本の刑事司法には改善すべき点が多々あり、いまでも冤罪を防ぐルールが無い。被告人の、公正な裁判を受ける権利、十分な防御を受ける権利を、裁判所がどこまで実質化させるか。

憲法に10条ある被疑者・被告人の権利を実質化させ、法執行機関に対する規律として実効性あるものにすれば、日本の刑事司法の姿は大きく変わる。さらに、国際人権規約に照らした運用を行えば、大きく変わるだろう。と述べました。

最後に指宿教授は、「法を無視することなく、法が仕えるべき崇高なる正義を大切にして欲しい」と、ルービン・ハリケーン・カーターの言葉を紹介して報告を結びました。

続いて行われたパネルディスカッションは、布川事件弁護団の谷萩陽一弁護士がコーディネーターになって、足利事件、福井女子中学生殺人事件、布川事件

の各弁護団と指宿教授がパネラーになって、討論が進められました。

はじめに「やっていないのに何故自白してしまったか」について足利事件の菅家さん、布川事件の杉山・櫻井さんが報告。続いて足利事件、福井女子中・学生殺人事件について、それぞれ弁護団から説明があり、各パネラーから各事件の問題点について発言されました。その発言を通じて自由の強要や証拠隠し、証拠のでっち上げなど、冤罪事件に共通する点が多くあることが改めて認識させられました。指宿教授は最後に「布川の決定が覆されたら日本の再審制度は絶望的になる。どうしても守らなければならぬ。マスコミも大いに報道するよう、お願いしたい」と呼びかけました。

おわりに、足利事件の弁護団の一員でもある日弁連人権擁護委員会第一部会部会長の笹森学弁護士が、「日弁連は冤罪事件が生まれぬように、取調べの可視化、証拠の全面開示に努力していく。今後ともよろしく」と述べて、シンポジウムが閉幕しました。

取調べの全面可視化、証拠の全面開示を

五月に裁判員制度が施行され、八月から裁判員裁判がスタート。志布志事件の全員無罪、氷見強姦事件の再審無罪に続いて、今年、足利事件の菅谷さんが有罪の決め手となったDNA鑑定の際りが証明され釈放・再審裁判が始まるなど、市民の冤罪事件や裁判に対する関心はかつてなく高まっています。

布川事件は、犯人とされた櫻井・杉山さんと犯行を結びつける物的証拠は存在せず、二人が犯人であれば当然出るはずの指紋すら、発見されていません。にもかかわらず、警察・検察で強要された虚偽の「自白」を唯一の直接証拠として、警察が作り上げたあいまいな「目撃」証言を支えに無期懲役の刑が確定、二九年間も獄中生活を余儀なくされました。

二〇〇一年十二月に日弁連の全面的な支援を受けて第二次再審請求を行なった結果、一・二審で再審開始決定を勝ち取り二〇〇九年十二月、最高裁で再審が確定し、検察・警察の証拠隠しと自白強要、証

拠や証言の捏造などが断罪されたことによって、自白偏重・推定有罪の日本の裁判に、大きな風穴を開け、取調べの全面的可視化、検察の手持ち証拠の全面開示に道を開き、冤罪事件を起こさない保証を勝ち取る第一歩を踏みだしました。二〇一〇年から始まる布川事件の再審公判にご注目ください。

(布川事件桜井昌司さん・杉山卓男さんを守る会)

事務局長 中澤 宏

NWEC夏のフォーラムに、 〈あごら〉も参加

NWEC(国立女性教育会館)で、毎年、夏に開かれる「男女共同参画のための研究と実践の交流推進フォーラム」が、今年も開催され、〈あごら〉にもワークショップ開催の、ご案内が来たので、「女性情報伝達の試み」というテーマで、『あごら』のバックナンバーを揃えて、八月三十日、開催しました。

PRが不十分だったのか、〈あごら〉のメンバー以外

の参加者は七名のみで、予期したような討論は展開できませんでした。が、考えてみると、女性情報は、今は巷にあふれており、テーマ自体に魅力がなかったのしょうと反省しました。むしろ、「今、みんなが望んでいること」をテーマにすべきだったのでは……。毎回、雑誌『あごら』に、NWECでワークショップ開催の予告を載せるのですが、それも怠っていたのは、事務局の失態。お詫びします。

それに比べ、全国各地域からの発表は、どれも、活気にあふれていました。——私が参加した山梨県笛吹市の取り組みも、その一つで、女性だけでなく、それぞれの家庭の家長——男性も巻き込んだ経過を、力強く訴えていた姿に、感動しました。(斎藤千代)

福島の〈未来館〉でも、 〈あごら〉のワークショップを

〈あごら〉の、最初からの主要なメンバーである、ジャーナリストの下村満子さんが、福島県立男女共

生センター〈福島未来館〉の館長になられて十年。

福島県の男女共生の拠点として、すばらしい活動が展開されていますが、毎年一回開催される〈未来館まつり〉の一室を〈あごら〉に提供するので、雑誌『あごら』のバックナンバーを全部展示して、ワークショップを開いたら……」というご提案をいただき、九月五、六日の両日、「点から線、線から面へ——あなたもつくれる〈女のグループ〉〈女の雑誌〉」というテーマで、ワークショップを開きました。

福島の〈あごら〉会員、南條かおるさん、矢部武子さん、馬上光子さんのほか、仙台から、三船照子さんも助っ人に来てくださいましたが、残念ながらテーマが魅力がなかったのか、会員外の参加者は、五人だけでした。

しかし、福島のお二人は、初めてお目にかかる方で、おかげ様で、楽しい時間を過ごすことができました。

なお、当日会場で展示した『あごら』のバックナンバーは、福島未来館に寄贈しました。

(千)

講演会——

「白鳥事件関係裁判資料の公開と真相をめぐって」

社会運動資料センター代表・渡部富哉氏は、白鳥事件関係裁判をはじめ、戦前戦後の共產党などの貴重な資料を一橋大学図書館に寄贈した。その寄贈記念講演会が○九年九月十一日、一橋大学図書館で行われた。

タイトルは「白鳥事件関係裁判資料の公開と真相をめぐって」であるが、「白鳥事件」に関する話はもちろんのこと、渡部さんの闘争の経歴が、人びとに深い感銘を与えた。

青春時代に「白鳥事件」に遭遇し、近年、心血を注いだ裁判資料（白鳥事件の主任弁護士だった杉之原舜一氏の所蔵する裁判資料、百二十巻）を復刻し、公開した。その資料の分析など、渡部さん以外の人では語れない事実が、るる述べられ、推理小説、冒険物語を聞くかのように、興味津津たるものだった。

しかし、残念ながら、白鳥事件については、「松



渡部さんの〈真実を語る熱弁〉に聴き入る

本清張著『日本の黒い霧』その他で冤罪とされてきたが、実は、日本共産党札幌地区の軍事部の犯行だった」とする渡部説を、私がここで報告するには、真相は、私の力量を遙かに越えている。そこで、講演の前文ともいえる、渡部さんの「自分史」に焦点をあてて、ご紹介したい。

私が渡部さんという人を知ったのは、たぶん〈徳田球一記念の会〉主催の九一年十二月の「故徳田球一主治医・李生林先生一行歓迎会」であったかと思う。記憶は定かではないが、現在まで長いおつきあいので、近ごろは〈山と茸の会〉（渡部富哉会長）でも、お世話になっていて、その経歴（というか過去）については、断片的に耳にしていたが、ご本人の口から、まともに語られるのを聞くのは、初めてであった。

一九二九年（くしくも世界恐慌の年）生まれの（学徒動員世代）で、中学校へ通って勉強したのは、二年生まで。十六歳で東京貯金局に就職。四八年、明治大学専門部法科（夜間部）に合格したものの、二年

間しか、通えなかった。五〇年に日本共産党に入党したが、職場の共産党細胞は、前年の定員法によるパージで解体。入党は、党再建から始まった。「官公庁から共産党員を一掃する」という、マッカーサー指令に対する闘争は激烈を極め、クビになり、占領政策違反で検挙され、愛宕警察署にぶちこまれたが、一か月後には、クビになったとき以上の党員を獲得、党再建を果たし、意気軒昂たるものだった。この東京貯金局のレッドパージ反対闘争は、長谷川浩著『占領期労働運動』(下)で、高く評価されている。

その後、朝鮮戦争下では、非合法体制の共産党中央組織局の「テク」(非合法の連絡などを担当する技術部)となり、地下潜行の生活に入った。日共最後の「テク」であった。日共の六全協によって、非公然部分は、なくなったが、その後、一年近く居残って、残務整理をした。

一九五〇年といえば、今から五九年前。そのころ活動した党員は、すでに八十歳を越え、渡部さんは貴重な「生き残り」である。私は「五〇年分裂」に

ついては、耳学で、当時の労働者、学生から、少しは聞いているが、日共は、未だに何ら総括をしていないし、私には、釈然としない「ナゾ」となっている。

その後、渡部さんは、「労働者になって、本格的に労働運動をしたい」と考え、神奈川県鶴見の潮田地区で重量募集の広告を見て、飯場に住み込み、人夫となった。月島機械という工場で、七分の作業ズボンはいて、ドカ弁を抱えて、玉掛工(クレイン下)になった。巨大な工場で、一〇〇トンもある鋼鉄の建造物を天井クレーンで案内して、空中でトンボさせたり、移動させたりする仕事だった。

しかし、やがて、もつと近代的な機械工になりましたと思うようになった。

夜、川崎の職業訓練所に通って旋盤を習い、鶴見ドックという造船工場に入社。臨時工と組夫の労働組合を結成。本工組合をも吸収合併して、六〇年安保闘争を闘った。臨時工が本工の組合を合併したのは、それまで、ないことだった。

その体験が、『鶴見ドック臨時工組合の結成の記録』として、全造船の組合機関誌に、『血と汗』の

タイトルで、挿絵入りで七回にわたって掲載された。

鶴見ドックの倒産後、石川島播磨重工田無工場（ジェットエンジン製造工場）に、研磨工として入社。

ベトナム戦争反対闘争は、ストライキをかけて一年半にわたって闘った。米軍ヘリコプター修理のための、三交替制勤務に反対して闘い、その経験を『闘いの炎の中で』（七二年五月一日、三千部発行）にまとめた。

この日の講演会を、企画、実現された渡辺雅男・

一橋大学図書館長との縁は、この『闘いの炎の中で』を読んだ渡辺教授が、渡部さんに連絡してこられたことで始まったという。渡辺教授が、まだ学生であった四〇年も前のことである。

その後も、田無反戦を結成し、七〇年造船合理化との闘いに明け暮れ、工場正門のビラ入れ活動を続けたが、第三次合理化闘争の終焉と通勤時の交通事故故によって退職した。

私は、渡部さんの、長い、長い「闘いの歴史」に打たれた。彼は戦後の共産主義運動・労働運動を底辺で支え続けた一労働者なのだと、改めて痛感した。

葺とりに連れていつてもらったときも、健脚で、いつも、遙か先方をスタスタ歩き、ガケをよじ登り、川をジャブジャブ渡り、時には木登りも平気です。その体力と胆力には、感歎するばかり。私のように学生運動のハシクレとして「お焼香デモ」ぐらいしか経験していない者とは、鍛え方が違うのである。

その後、〈徳田球一記念の会〉会報の編集を八六年十二月から十年にわたって担当し、『徳田球一全集』の編集長として活躍。八六年に全六巻（五月書房刊）を刊行した。これを契機に八〇年に中国から生還した伊藤律との交際が始まり、九三年刊行の渡部富哉著『偽りの烙印——伊藤律・スパイ説の崩壊』（五月書房刊）として実った。この著作は、大きな反響を呼び、尾崎秀樹氏や松本清張氏らの主張を、くつがえすものとなった。

この著作がきっかけで、日露歴史研究センター代

表の白井久也氏と親しくなり、九六年にはモスクワを訪れ、ロシアのゾルゲ研究者との交流が始まった。

九八年には、石堂清倫氏からの依頼もあり、関心はゾルゲ研究へと広がり、現在に至っているようだ。

また忘れてならないのは、社会運動資料センターの活動を通じて感じた「大学教授や著名な著者たちの差別意識」を指摘していることだ。労働者出身の無名の研究者を見下す人たちによる、苦いさまざまな体験を語ってくれた。

最後に、この講演会に参加した日本共産党史研究家の大丸義一氏や渡辺図書館長が中心となり、白鳥事件真相をめぐる対論会が近くもたれることになった。事件関係者の高安知彦氏「白鳥事件と私」(執筆中)の参加も予定されている。大いに期待したい。

渡部さんの友人である元北海道動労迫分反戦書記だった斎藤孝氏らが「白鳥事件」についてご執筆中と、うかがった。その刊行が待たれる。

(東京・練馬区在住 村井征子)

現代史を考える会

——満州・満蒙開拓記念2009年集会

「満州事変」開始七八周年の当日、九月十八日に、「満州事変」と満蒙開拓に関する記念集会が開催されました。主催は〈現代史を考える会(関岡渉代表)〉、会場は、調布市の調布市文化会館。参加者は約九〇名で、活発な討論が特徴的でした。

会は、次の順序で進行しました。

- ① 開会挨拶 司会 近藤 游
- ② 基調講演 儀我壮一郎「満州事変とは」
- ③ 映画上映 「満蒙開拓にかけた夢」
- ④ 講演 三田 陽「満州事変後の日本人の活動・満州重工業」
- ⑤ 映画上映 「満蒙開拓団の誕生」
- ⑥ 映画上映 「満州に消えた日本人」
- ⑦ フォーラム

司 会 近藤 游

パネラー 儀我壮一郎 三田 陽

小川津根子 財部鳥子

⑧閉会挨拶 関岡 涉

①の基調講演では、まず「満州事変」の主役と目的について、張作霖爆殺事件との継続性と共通性が、明らかにされました。

主役は、関東軍。方法は、鉄道の謀略的破壊から軍事作戦（二八年は未遂）への展開。目的は、満蒙の軍事的・政治的支配です。

歴史的影響として、関東軍・軍部の独走から、支配体制内の「下克上」の増幅、政党政治の崩壊、進歩的諸勢力の弾圧、暗殺・クーデターの首謀者の「免罪」から「英雄視」、さらには国際的孤立・対米英戦争・敗戦への道が指摘されました。

「満州国」の理想は、「五族協和・王道楽土」でした
が、日満一体化・日本化の諸政策が実行され、

①対ソ軍事基地、

②中国本土への侵攻拠点、

③石炭・鉄鋼・農産物（大豆など）の対日供給基地、

④日本農村の「過剰人口」の受け皿などの役割が、期待されていたのです。

満蒙開拓移民の動向と悲劇的結果も詳論されましたが、三本の映画の内容と相まって、参加者に、強い印象を残しました。

③の三田陽氏の講演では、事変前後の満州の状況を比較した後、主として、満鉄中心から満州重工業主体の鉱工業生産への移行が詳論されました。

満州製鉄、満州軽金属、満州飛行機、満州炭鉱など、満州重工業の主要各社の技術水準・生産能力の実態などと、鮎川義介から高崎達之助への交代の経緯が明らかにされました。満州重工業の継続期間は、八年間。敗戦後、ソ連による設備の大規模な撤去があり、中国への技術継承は、円滑に行われにくかったとされます。

さて、満蒙開拓団については、羽田澄子演出の映画『嗚呼 満蒙開拓団』があり、本誌「あごろ」322号の「試写室」で詳しく紹介されています。九月十八日の会では、それ以外の歴史的な三本の映画が上映さ

れた後、フォーラムが開かれたのです。

「祖国よ「中国残留婦人」の半世紀」(岩波新書)の著者、小川津根子氏は、まず、「三本の映画の中で、女性の問題がとりあげられていないのが不満」とされましたが、「映画が、全く技術的理由で一部中断されたことによる」という、主催者側の説明でした。小川氏は、残留婦人の問題にかかわった経過の説明の後、残留婦人が原告となった裁判についても詳しく話され、不当な判決を批判されました。

引揚げ体験にもとづく『天府冥府』の著者、財部鳥子氏は、痛切な実情を回想しながら、ご家族の引揚げの経過を中心に、多くの深刻な問題を示されました。

フォーラムでは、多数の質問や意見があり、真剣そのものの問答が重ねられ、関東軍のあり方、五族協和のなかの日本人純血主義などから、田母神・前空幕長の核武装論の批判にまで発展しましたが、なんとか定刻通りに終了。懇親会での交流に引きつがれました。二年後の「9・18・80周年」には、さら

に本格的な記念集会をと、関係者一同、さらに検討を続けています。

(大阪市立大学名誉教授 儀我壮一郎)

女たちが語る「平和といのちの集い」

○九年十月九日、四九年前に右翼少年の凶刃に倒れた浅沼稻次郎さんの遺志を受け継ぐために、「女たちが語る『平和といのちの集い』」が開かれました。発言者は、すべて女性。表に出るのも女性。優しい男たちは黒子に徹しましたが、その力があつたからこそ、盛会となったのでした。参加された男たちからは、「女たちのパワーに圧倒されました」「元氣をもらいました」と、うれしい感想をいただきました。それぞれの素敵なおんなたちが、心に染みる言葉を残してくれましたが、印象深かったことを、少し記しておきます。

四谷信子さん(浅沼さんが刺された時に、会場にいらした)「浅沼さんは、絶対に信念を曲げることが

なかった。浅沼精神を身につけながら、信念をもって、社民党には進んでほしい」

石坂啓さん「浅沼さんと手塚治虫さんがオーバーラップするんです。どちらからか「恥ずかしくないか、胸を張っていられるかどうか」を問われているよう。この国がまた戦争をするかもしれない、という状況に対して、大人は、十代に何を語れるのか、彼らの未来に対して何ができるのだろうか。十年、十五年前にはなかった法律が、次つぎと出来てきて、戦前のしほりのように、なってしまうのだろうか。ハトは平和を連想させるからいけない……都教委はここまでやるんです」

新谷のり子さん「フランシーヌの場合は」と、「イマジン」を日本語で歌ってくださいました。感動！

中原道子さん「浅沼さんは、江東区と同潤会アパートに住み、人びとの中に暮らしていた政治家。かたや、お屋敷を見にいっただけで人びとを逮捕する、などという政治家もいます。政治家とは何か、何が政治家の資格か、が問われますね。」

辻元清美さん「いつたい、ヌマさんの時代から、世の中、変わっているのだろうか。政権交代の証として、内閣の一員に、福島さんと私、二人の女が入りました。福島さんが言ったのです。私たちがいる限り憲法は変わらないよね、と」

吉武輝子さん「新進気鋭の後期高齢者です。東映労組の女性部長として、六〇年安保反対のデモの中にいました。浅沼さんがいることが私たちを力づけてくれた。浅沼さんは野に出て語った政治家ですが、その後、社会党は野に出なくなつた。今、暗殺するに足る人間がいなくなりすぎているのではないですか。」

福島みずほさん（忙しい合間を縫っての飛び入りでした）「党首室には浅沼さんはじめ歴代の委員長の写真があつて、平和、いのちのために闘ってきた先輩たちに励まされます。」

古今亭菊千代さん（9の字がデザインされた着物で）「江東区に住み、犬好き、格闘技が好きとは、浅沼さんは私と同じです。平和がないと笑ってもらえません。人ごとではない生活のこととして、絶対

に9条を変えてほしくありません。」

内海愛子さん「『国民』という場合、在日は含まれず、参政権がないのです。一九五二年のサンフランシスコ講和条約は、中国も南北朝鮮も入れない条約で、アジアに対する賠償は、切り捨てられました。見過ごしてきた、アジアの国ぐにの戦後処理、戦後補償問題をひきずっています。ヌマさんが、いのちをかけて守ろうとしたことは、私たちが引き継いでいる課題です。」

崔善愛さん^{チェン}「在日には参政権がない」という不条理。このまま選挙に行けないで、死ぬのでしょうか。政治は私たちの生活を動かしています。『音楽家は政治を語らないほうがいい』という雰囲気は、ありますが、私は政治を自分のものとしたい。それは、自分の生きる人生のために必要です。妥協した時に平和は崩れていきます。平和について語ることを、怖れないでいたいものです。」

吉岡しげ美さん「女のいのちを紡いで、平和を祈る気持ちをやりたいです」と、『私が一番きれいだった時』（茨木のり子）を、涙がでるほど感動的に。

それから参加者一同と「ふるさと」。最後に「この道」（金子みすず）を、高らかにうたってくださいました。最後は、上原ひろ子さん。「どういうふうに残志を伝えたいか、最初はとまどいましたが、今日は何か見えてきたような気がします。浅沼さんという大魔神がなくなってしまうという思いがあります。とんでもない人たちが政治を牛耳っていて、真実の人がいなくなりました。女たちは、たしかに、男が仕掛けた戦争の犠牲者ではあるけれど、あの戦争で、「お国のため」と巻き込む側にも、女たちはいました。巻き込む側に行つてはならないのです。ひとりひとりの語れる女がいます。ひとりひとりが、ちからを結集して、大魔神となりましょう。

「オバマがノーベル平和賞」と聞いて、嘘つきでもらったノーベル賞の返還運動を提案したくなりました。来年は、五〇年目の浅沼集会。彼の最後の場だった日比谷公会堂で、その時のように「党首討論」をやりたいませんか？」と、五〇周年に向けての力強い提案。

私は、司会をさせていただきましたが、それぞれ

の発言者の声のトーンや言葉が、その時の気持ちと共に、あざやかによみがえります。

ヌマさん、ありがとうございます！しっかりと遺志を受け継いで、進んで行きます！

（浅沼記念集会呼びかけ人、通訳・翻訳家 星野弥生）

「政権交代」では変わらない！ いまこそ草の根から（戦争と貧困強制）に反対する運動を！

——〈10・11怒りの大集会〉で熱心に討論

二〇〇九年十月十一日、東京・練馬文化センター大ホールで、十人の呼びかけ発起人、九八人の呼びかけ人、一八三人の賛同人のもとに、〈「政権交代」では変わらない！ 許すな！ 戦争と貧困の強制を！ 10・11怒りの大集会〉が開催されました。

八月三十日の総選挙で、自民党が大敗し、民主党中心の連立政権が成立するという大きな歴史的転換が画された、新たな政治状況のなかで、私たちは、反戦・平和や貧困強制反対の運動を、いかに推し進

めていくか——切実な問題意識と関心を抱いて、さまざまな職場・学園・地域から一〇二〇人が参加しました。

土屋公献先生を追悼

〈怒りの大集会〉の呼びかけ発起人として、反戦・平和のために尽力されてきた土屋公献先生（弁護士・元日弁連会長）が、九月二十五日午前七時五十分、腎ガンのために逝去されました。享年八十六歳でした。

集会の冒頭全員で黙祷を捧げた後、森井眞さん（元明治学院大学学長）が代表して、追悼のことばを述べました。「土屋公献先生は、ブッシュ大統領による『対テロ報復戦争』を標榜してのアフガン侵略戦争に反対し、戦争屋ブッシュを担ぐ小泉を弾劾して、二〇〇一年十月七日に日比谷公会堂で開かれた緊急大集会以来、一貫して先頭で私たちを励まし導いてくれました。まさに人権と平和と正義を貫き通した生涯でした」と、私たちの会を、大黒柱として支え

導いてくれたことに、深い感謝の念を表明しました。そして、「みんなで土屋先生のご遺志を引き継いで、戦争に反対し、平和と個の尊厳を守るために、それぞれに最善を尽くして生きていきましょう」と呼びかけました。主催者を代表して、呼びかけ発起人で名古屋大学名誉教授の古川路明さんが挨拶しました。

「アメリカは本質的に居丈高で自分勝手な国です。オバマ大統領が誕生しましたが、大統領が代わっても、本質的なところでは変わりようがない国であることを忘れてはいけません」と、ご自身のアメリカでの研究生活の体験にふまえた感想を述べました。そして、「日本でも鳩山政権に代わって、持ち上げることがありましたが、そろそろ、本質が出てきたような気がします」と指摘し、沖縄の米軍基地移転をめぐる対応や、国連決議をタテにした、海外派兵の拡大を批判しました。

辺野古新基地建設を容認する鳩山発言を批判

次に、沖縄県宜野湾市にお住まいで、普天間爆音

訴訟幹事で元県高教組委員長の榮野川安邦（よのかわ）さんに、講演をしていただきました。

榮野川さんは、市街地の真ん中に立地する普天間基地の、きわめて危険な現状——二〇〇四年に、沖縄国際大学構内に、米軍のヘリが墜落したときのこと、その後、沖縄にきたラムズフェルド国防長官（当時）さえ、「こんな危険な基地はない」と驚いたという話、普天間第二小学校が基地のフェンス沿いにあること、コンクリートさえ突き通して家の中に入ってくる低周波音によって、妊婦の出産障害などの健康被害が多発していることなど——をつぶさに報告し、日米安保条約の矛盾が集中して、県民に耐え難い犠牲を強いている実態を告発しました。

そして、昨今の鳩山総理大臣の発言は、県民の大多数が強く反対する辺野古新基地建設の容認をほめかすものであり、「絶対に許すことはできない」と、苦衷も露わに批判しました。

戦争と貧困は一体の問題



1020名の参加者が熱心に討論しました。

続いて、大森達雄さん(貧困の強制を許さない労働者ネットワーク)が、実行委員会からの提言を行ないました。

大森さんは、最初に「今、オバマ大統領や鳩山首相に様々な期待の声も生まれています。しかし、問題は、「この変化が、どのような変化であるか」ということです。民主党政権やオバマ政権が、何を、何のために、どのように変えようとしているのか、それは私たちにとつてどういう意味を持つものなのか。それをしっかりと見つめとらえかえす必要があるのではないでしようか」と、問題を投げかけました。

そこで、考えるべき課題として、

第一に、「新たな核軍拡競争と日米安保の強化に反対しよう」ということです。『核廃絶』を唱えるオバマ政権は、現実には、『使いやすい核兵器』と称して、小型の戦術核兵器の開発・配備をドシドシおしすすめ、日本全土に配備したMD(ミサイル防衛)システムを、実戦さながらに運用しています。

これに対抗して、中国・ロシアが核軍拡を進めて

いることも、大きな問題です。

第二は、「貧困の強制に反対しよう、理不尽きわまりない大企業による首切り・賃下げをはね返そう」ということです。鳩山政権は、『国民生活第二』『雇用のセーフティネット』を唱えています、大企業経営者の首切りや、賃金切り下げについては、口をつぐんで問題にしません。

第三に、「戦争」と「貧困の問題」は、一体的に結びついている」ということです。

さらに私は、「他力本願では、何も解決しない」ということを強調したい。私たち労働者・学生・市民が、連帯の輪を広げ、それぞれの足場で「戦争と貧困」の強制に反対する運動を一体のものとして、さらに大きく創りだしていきましよう、力強く提起しました。

「世界は平和の流れにある」?

「鳩山政権で日本はどこへ?」と題して、学生たちが演じた寸劇は、日本とアメリカ、そして中国・

ロシアの権力者たちが、軍縮交渉や「平和外交」の背後で国益をむき出しにして敵対しあう姿を、鋭く表現し、観覧者に強い感銘を与えました。

「今こそ戦争と貧困強制にN Oの声を」と題するパネルディスカッションでは、榮野川さんと大森さんに、石橋さん(ストップ改憲全国ネット2009)が加わって、三人のパネラーと参加者の間で、活発な討論をくりひろげました。

石橋さんは、「オバマ大統領が『核廃絶』を唱え、日本では鳩山政権が誕生し、国際協調が進んでいるように見えるかもしれませんが、実際は、①米・日、②中国・ロシア、③フランス・ドイツ中心のE Uブロック、世界は、この三つに分裂し、政治・軍事・経済のいろいろな面で対立が深まっている」ことをリアルに問題提起しました。

討論に入り、まず「戦争の問題」で質問。「オバマ大統領の〈ノーベル平和賞受賞〉は、どう考えたらいいでしょうか」。

大森さんは、「アフガンで空爆しているオバマが、

何でノーベル平和賞なんだ」と、ペシャワール会の人
が怒っています。そもそもオバマの核廃絶発言は欺
瞞に満ちています。ロシアとの削減交渉の対象にし
ているのは、役に立たなくなった核兵器だけで、削
減の対象にならない戦術核兵器の開発に いそしん
でいるのです」と答えました。

鳩山政権の「対等外交」とは？

次の質問。「鳩山政権が対等外交というのは、いい
ことのようにも聞こえますが、〈日米同盟が基軸〉
というのでは、『自民党と変わらないのか』、とも思
います」が。

石橋さんが「民主党の、鳩山さんや小沢さんらの
首脳が〈アメリカと対等〉と言うのは、〈自衛隊を大
きくする〉ということで、軍備を縮小するというこ
とではない。日本を、軍事強国にする、つまり、ア
メリカと中国との対立の間で、東アジア経済圏の覇
権を握るという『国益』を貫徹していくことを狙っ
ているのです。『国連主導の外交』とか『友愛』とか、

新たな装いをとっているだけ、欺瞞的で、より危険
だと言えるのではないのでしょうか」と指摘しました。

うち続く失業と貧困

「貧困の問題」についての質問。「失業率が高い
沖縄は、どういう状況なのでしょう」。

榮野川さんは、「沖縄の失業率は、絶えず本土の二倍。
しかも若者の失業率が高い。その原因は、軍事基地が、
あるからです。普天間基地は、東京デイズニールン
ドの十倍の、四八〇ヘクタールの面積があるが、そ
こに雇われている従業員は二〇〇人たらず。基地を
撤去すれば、さまざまな産業を興し、雇用を生み出
すことができる。軍事基地は諸悪の根源です」と訴え、
共感の大きな拍手が参加者から起こりました。

司会が会場からの発言を求めると、看護師の女性
は、「いま医療職場は悲惨な状況にあります。二十
歳の看護師が過労死したり、病气や過労で次つぎ
に退職を余儀なくされています。小泉政権下で始ま
った医療費の削減のために、産科や小児科をはじめ、

医療崩壊が起こっている。民主党政権も、『ムダをなくせ』と言っているが、『もつと効率よく働け』ということでしょうかありません」と、「政権が交代しても、医療現場の危機に満ちた実態は、何も解決しないこと」を、怒りを込めて報告しました。

労働運動の危機を打ち破ろう

鳩山内閣に、平野官房長官をはじめ多くの閣僚を輩出している労働組合の〈連合〉、その、主要産別である電機連合の組合員の男性が、「私たちの組合の中央本部は、『民主党政権に対して是々非々で対応する』と言っている。そのように言うのは、組合員の利益を守るためでなく、〈民主党政権になって、パイプを失った資本家たち〉の助っ人として、会社の利害を鳩山政権に押し込む役割を買って出るためです。民主党政権になって、労働組合がますます変質しています。自産業の利害を貫徹するための圧力団体にさせてはなりません」と訴えました。

さらに、交通関係の職場で働く労働者は、「連合

指導部は、〈民主党政権は自分たちがつくった政権だから、支えなければならぬ〉、また、〈一流国にふさわしく軍事力を持つことも必要だ〉と考えている。労働運動の危機をうちやぶるために、力を合わせて頑張りましょう！」と呼びかけました。

他者の痛みを自分の痛みとして

集会の最後に、森井真さんが、閉会の挨拶を行ないました。

森井さんは、民主党政権の誕生について、「私は、小泉・安倍以来の恐るべき人間無視の自民党よりは、少なくとも口で『友愛』を唱える鳩山に代わったことは、ブッシュがオバマに代わったと同じように、とてもいいことだと思っているのです。

ただし、それで何かが解決したのでは決してありません。問題は、「これから何がなされるか」です。そしてその問題は、私たちにあって他人事ではありません。「私たちが何をなすか」です。

たとえば国連の問題ですが、私たちは国連決議を

理由に、海外派兵を拡大することに、反対です」と語り、私たちの奮起をうながしました。

そして、「今日のこの集会のように、社会のさまざまな領域や分野で、ものを考えながら、批判的に生きている市民が集まって、お互いに心を開き、それぞれに自分の人生から学んだことを語り合い、考えあう。そんな場こそ、他者の痛みが自分の痛みになるような想像力を高め、自由の尊さに目覚めさせてくれるのだと思います」と指摘しました。

森井眞さんの迫力あふれる発言に、参加者は、深い感動の拍手で応えました。

こうした発言や討論とともに、会場のロビーでは、池田龍雄さんの絵画「場の位相——虚時空山水」の展示、橋本勝さんの『憲法絵本』の読み聞かせ、労働者や学生が創意工夫をこらした様々な展示、平和・貧困・環境などの諸問題をテーマにした書籍・パンフレットの販売など、たくさんさんの催しが行なわれ、にぎわいました。

〔この集会の報告集（パンフレット）をご希望の方は、03・3868・6630までお電話下さい。〕

（10・11集会実行員会 佃敏雄）

福島みずほさん出版記念講演会

社民党の大臣になられた福島みずほさん（あごら会員）が、十月十五日、「出版記念パーティ&トークショー」を開くという案内が。みんなで食事しながら……とのことで、岐阜からわざわざ上京された（あごら会員）大橋倫子さんと、会場に赴いた。

四谷の会場に着いてみると、「大臣に就任したため、『大臣規範』で、飲食を伴うパーティは開けないことになったので、湯浅誠さんとの対談と、みずほさんの講演会に変更になった」とのこと。

去年の暮れから新年にかけて派遣村を開いた湯浅さんとの対談も良かったが、それ以上に、みずほさんの講演は、「民主勢力が政権をとった今、希望が大きく広がった」事実を具体的に示す、すばらしい

内容で、大橋さんと深く感動。

当日のテープを起こして「あごら」で紹介したいと、福島さんの事務局に交渉したが、「原稿もなく、テープもとっていません」とのこと、誌上掲載はできず、残念だった。

しかし、あれから二か月。沖縄の、普天間飛行場立ち退きで、「海外への移転」を政府に迫るなど、福島さんの活躍は、目を見張るものがあり、改めて、「福島さんが大臣になられてよかった」と、しみじみ思っている。今後とも応援したい。（斎藤千代）

〈労働者派遣法抜本改正まったなし！〉

10・29日比谷集会

○九年十月二十九日に、〈労働者派遣法抜本改正まったなし！10・29日比谷集会〉が、日比谷公園野外音楽堂で開かれた。主催は、○八年十二月四日と同じく、幅広い労働組合、市民団体、法律家などがつくる〈労働者派遣法の抜本改正をめざす共同行動〉。

大会は、鴨 桃代 全国ユニオン会長の開会挨拶、労働弁護団長 一郎 弁護士の基調・経過報告で始まり、民主党、社民党、国民新党、共産党の順で、政党代表の決意表明があり、公明党の参加者からも、挨拶があった。

次いで各界からの挨拶として、日本労働弁護団・宮里邦雄、ルポライター・鎌田慧、年末派遣村、元村長・湯浅誠、講談師・神田香織の各氏が発言した。会場からの報告としては、〈阪急トラベルサービスの添乗員〉、〈資生堂の高級口紅を作る、神奈川アンフィニ〉、〈悪名高きグッドウィル〉などで派遣切りと闘う労働者の、アピールが続いた。

製造業派遣と登録型派遣の原則禁止を含む労働者派遣法の改正は、いったんは参議院で野党三党（当時）の共同提案で可決されたが、衆院解散に伴い廃案となり、その実現は、連立政権の政策合意に引き継がれている。

現在は、長妻厚生労働大臣の諮問を受けた「労働政策審議会」が、年内合意を目指して審議中である。

鴨桃代全国ユニオン会長の開会挨拶や、労働弁護士・
張一郎弁護士の基調報告・経過報告によれば、「労
政審では資本側の巻き返しが激しく、公益委員から
も後ろ向きの意見が出て、年内の合意・答申は難し
い情勢」だという。

こうした情勢や、派遣労働者の状況が 日々悪く
なる現状にかんがみ、集会は、

①〈労働者派遣法〉を、労働者保護を目的とする法律
に変えること

②みなし雇用規定の創設や、違法派遣への罰則導入
等の〈派遣先責任〉を強化すること

③日雇い派遣の全面禁止と、登録型派遣、製造業派
遣を原則禁止すること

を急務とし、さらには、均等待遇の義務付け、現行
専門業務の見直し、中間搾取率の、上限設定など、
より踏み込んだ議論をも含む、労働者派遣法の抜本
改正を要求し、連立政権に、その一日も早い実現を
求める（10・29日比谷大集会アピール）を採択した。

開会挨拶後、参加者は国会請願へデモ行進をおこ
なった。

集会参加者は、主催者発表で二五〇〇人。昨年の
12・4集会よりやや増えたとはいえ、政権交代と
いう、未曾有の有利な条件の下としては、がっかり
するほど少なかった。労政審での資本家側の巻き返
しにあつて、早くも民主党が動揺していることを考
えれば、もつともっと運動を草の根から盛り上げる
必要がある。そのために、一人の市民として、何が
できるか、何をすべきか？あらためて考えさせられ
た一夜だった。（《葦牙》^{わがひ}の会・編集会員牧梶郎）

《NPO現代の理論・社会フォーラム》 「中国人強制連行・西松訴訟の和解実現 の経緯と歴史的意義」を検証

○九年十一月十二日、《NPO現代の理論・社会
フォーラム》が、専修大学法学研究所と共催した研
究会、「中国人強制連行・西松訴訟の和解実現の経

緯と歴史的意義」が、専修大学神田校舎で開かれた。

西松訴訟というのは、先の大戦の末期、日本政府の政策にもとづき、広島県安野の、西松建設の工事現場へ強制連行された中国人労働者三六〇人（死亡者二九人）のうち生存者八名が原告となつて、西松建設を相手に訴えた裁判である。

最高裁判決は、「サンフランシスコ講和条約や日中共同声明により、原告らの損害賠償請求権は失われている」として、西松建設の法的責任を否定した。

ただその最高裁判決も、「本件被害者らの蒙つた、精神的・肉体的苦痛が極めて大きかった一方、西松建設は……相応の利益を受け……諸般の事情にかんがみると……本件被害者らの被害の救済に向けた努力をすることが期待される」とも述べていた。今回の和解は、こうした最高裁勧告に沿つて、両当事者の代理人たる弁護士が、真摯に議論を続けた結果、といえる。本会では、まず、この和解を成立させた原告側代理人、内田雅敏弁護士が、和解の内容と意義について、当事者としての苦労話を交えて、詳しく解説した。

和解の要点は、

- ①西松建設は、強制連行・労働事件の事実を認め、その歴史的責任を認識し、深甚なる謝罪をした。
- ②後世の歴史教育のため記念碑を建立する。
- ③受難者に対する補償などのため、西松建設は和解金として、裁判の当事者とならなかつた他の関係者の分も含め一括して金二億五千万円を支払う。などである。

この和解に先立つて、鹿島組による花岡鉦山への強制連行・強制労働の同じような和解があつたが、記者会見での、鹿島側の侮辱的な発言がゆえに誤解され、批判を受けた面があつた。その経験にもとづいて、会社側代理人と、できる限り友好的に話し合いを続け、原告や中国の関係者とは繰り返し接触を図り、今回はすべての当事者が満足するようにまとめられたという。

内田弁護士の解説の後に、専修大学法学部の石村修教授から、中国人強制連行・強制労働の全体像についての説明があつた。連行されたのは一三五事業

所、約四万人にのほり、そのうち七千人以上が死んだという。今回の研究会への参加者は多くはなかったが、石村教授を初めとして、学者・研究者の発言がいくつもあり、真摯で活発な討論がなされた。

なお、私個人としては、「この和解が成立したについては西松建設の違法献金事件が追い風とはなったが、それまでの十数年にわたる地道な訴訟活動があったからだ」、「うまくいくときには相手側からの協調もまた欠かせない」、「こうした運動では、運動内部からも批判や非難が生じがちだが、それを防ぐためには、情報の公開と徹底した話し合いが欠かせない」、といった内田弁護士の話が心に残った。

最後に、「NPO現代の理論・社会フォーラム」の今後の活動予定を紹介させていただく。

●「アイヌ民族の歴史」

一月十六日(土) 十四時分

会場 専修大学神田校舎 7号館764教室

報告者 榎森進氏(東北学院大学教授)

●「雇用の溶解と使用者責任をめぐって」

一月二二日(木) 十八時三〇分

会場 専修大学神田校舎 7号館782教室

報告者 水谷研次氏(東京都労委労働者委員)

●「社会変動と日本の仏教——宗教者との対話(仮)」

二月二七日(土) 一四時

会場 千代田区神保町区民館(ひまわり館)(予定)

報告者 若麻績信昭氏(長野善光寺寺務総長)

*詳しくはウェブサイトでお確かめください。

<http://www.gendainorion.com>

(NPO「現代の理論・社会フォーラム」寺嶋 紘)

〈9条フェスタ2009〉

大田区産業プラザP-i-oに、

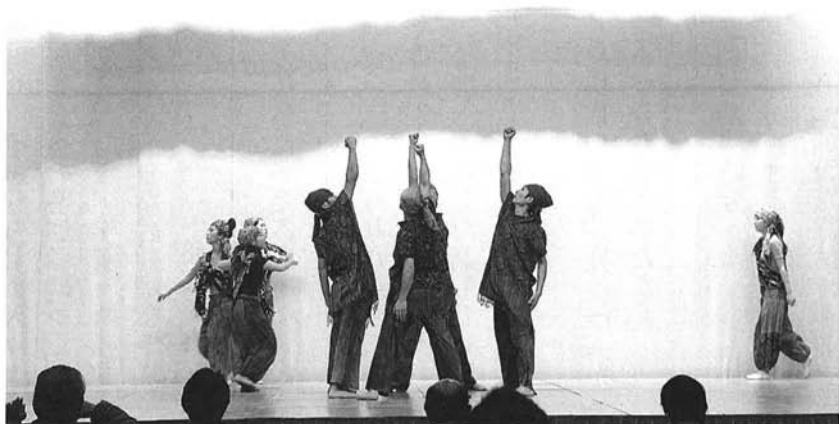
三千名がつどいました!

二〇〇九年十一月十五日、五回目の〈9条フェスタ〉

が、東京の大田区産業プラザP-i-oで開かれ、百団体が参加し、三千名が集いました。



輝け9条! 世界へ未来へフェスティバル2009 戦争にNO! 平和にYES!



ブランニューダンスマーケット

二〇〇五年から開催してきた9条フェスタは、回を重ねるごとに、参加者も参加団体も増え、今年はこれまでで最高のにぎわいをみせました。

メイン会場は一階の大展示ホールで、たくさんのワークショップやパネル展が企画され、それぞれの団体が多様なワークショップを開き、平和を訴えました。

大ホールの半分を区切った舞台会場では、〈東京地婦連〉の水野英子さんが開会宣言を行い、芸術的なブランニューダンスマーケットの「平和と連帯の踊り」で幕が開きました。

若者たちの歌や踊りや発言での「平和のアピール」は、午後一時から五時半まで続き、はつらつとした主張が、大きな喝采を浴びました。司会は、〈三多摩9条連〉の伊藤さくえさん。ゲストとして演奏したヤスミン植月千春さんは、カーヌーンというアラブの琴の演奏で平和を訴えました。また大阪から駆けつけた、在日のデュオ・志遠^{チウオン}さんは、「慰安婦」問題の解決を歌にのせて訴え、その力強い歌声は、会

場に大きな感動を呼びおこしました。また、関千枝子さんが開催した片岡脩「平和ポスター展」は、毎日新聞、東京新聞に、大きく取り上げられ、核廃絶のアピールを盛り上げました。

四階で上映された映画は、「鶴彬〜こころの軌跡」「冬の兵士」「タクシー・トゥ・ザ・ダークサイド」「シロタ家の20世紀」「真昼の暗黒」などで、どれも立ち見が出るほどの盛況ぶり。各教室での討論会も、『総選挙は民意を反映したか』や『地震予知ができないと主張してきた地震学者は、なぜ逮捕されたか』など、ユニークなテーマに大勢が参加しました。

閉会の言葉は、9条連の伊藤成彦代表。「オバマ大統領と鳩山首相に、日米安保問題や基地撤去、核廃絶について、市民は、はっきりものを言っていこう」と締めくくりました。

エンディングは、地元の荏原ユニオンエイサー隊。若者たち二〇人が、にぎやかに踊りを披露しました。

当日、〈日本国神党〉なる右翼団体が、会場前に、

街宣車を止め、大きなスピーカーで、がなりたてる妨害を繰り返しましたが、運営委員会の冷静な対応で、事なきを得ました。

平和のために手を繋ぐ〈9条フェスタ〉は、また来年も新しい装いで開催する予定です。皆様の熱いご支援に感謝します。来年も、共に平和の発信を続けましょう。

〈憲法9条——世界へ未来へ連絡会〉 木瀬慶子

片岡脩 平和ポスター展

二〇〇九年十一月十五日に大田区産業プラザで行われた「九条フェスタ」の大展示ホールで、片岡脩さんの平和ポスター約三十枚を、展示することができました。原爆の奇跡的な生き残りである彼は、一九八五年に「平和ポスターを百枚描く」と宣言。制作しつづけたが一九九八年、七八枚描いたところで、六五歳で亡くなりました。

ほとんどの人が忘れている(知らない)、彼の平和への思い。ポスターを見ていただきたい。そんな、



9条フェスタの大展示場で展示された片岡脩の平和ポスター。
LOVEの字に彼の核廃絶の思いがこめられています。

思いが、この展示となりました。新聞社へも宣伝し（東京新聞、毎日新聞で、かなり大きく書いていた）、記事を見て来館された方もあり、感動を伝えてくださる方もあり、よかったと思っています。

グラフィックデザイナーだった片岡さんの作品は、なまなましい惨状の表現ではありません。平和の強い願いをこめた四枚組のポスター「LOVE」（「閃、灼、炎、焦、生」の漢字をつかい、原爆の惨禍を表現したもの。心の癒し、般若心経を使ったものなど）の、象徴的な表現の中に、彼の平和、核廃絶への、強い願いがわかります。

「LOVE」のシリーズで、この一字を頭文字につかい、彼は思いを文字で綴っています。「L」は、Let us live forever in Peace.＝平和のうちに、いつまでも生きていけるように。彼は生涯、原爆のため健康に恵まれませんでした。父、兄も失い、家も焼けました。平和のうちに生きたかった、これは彼自身の悲痛な願いでもあったのではないのでしょうか。

「E」はEach of us can do something for Peace.

「平和のために、ひとりひとりに、何かできることが必ずある」。私は、これが彼の遺言と思いました。

絶対の平和のために、私たちは、何かしなければいけない。何かできる！ 私は、この彼の思いを、ひとりでも多くの人に知ってほしいと思いました。

片岡脩さんは、県立広島一中一年生の時、爆心から八〇メートルという至近距離で被爆しました。

当時、広島市では、大がかりな強制疎開が行なわれており（家を立ち退かせ家をつぶし道をつくる）、その主力戦力が、工場動員にまだ行っていない、中学、女学校の一、二年生。十二、三歳の子どもたちの、勤労奉仕でした。私のクラスも、片岡さんらも、同じ雑魚場地区（市役所裏）に動員されていました。片岡さんは、この地区の一番北で、作業（一中が、ここにあったから）していました。三〇〇人の一年生の半数は、校舎の外で作業中。半数は校舎内で休憩待機中に、原爆が投下されました。外の生徒は全滅し、校舎内にいた一五〇人中、十八人だけが生き残りました。この十八人のひとりが片岡さんです。

私のクラス、（広島第二県女二年西組）は、この三百メートルほど南で作業していました。三十八人のクラスメートのうち、一人だけ生き残りました。

一九五一年、当時の広島文理大学学長、長田新先生が、広島の子どもたちに被爆の手記を呼びかけ、最初の証言集ともいえる『原爆の子』が出版されました。

この中に、私のクラスの生き残りも、片岡さん（当時高校三年生）も、手記を執筆しています。片岡さんは被爆の模様を実にくわしく証言し、最後に、ゲルツェンの言葉を引いて戦争の犠牲者について書き、最後は「私はもうこれ以上書けない。この文章は最後まで未完である」と、悲痛な言葉で終わっています。大学生だった私は、この片岡さんの文章に感動し、その名前を記憶にとどめました。

その名前を再び見たのは、一九七〇年代。私の大学の先輩・中山士朗さんの小説集の装丁に、彼の名を見たときでした。中山さんは鶴見橋の作業に動員され、体中に火傷。ひどいケロイドでした。会社員

として働きながら、小説を書きますが、彼の小説も、随筆も、書くものは、すべて原爆です。片岡さんに装丁を頼んだのは、彼が小学校、中学を通しての後輩だからで、私はこの時、片岡さんがグラフィック・デザイナーになり、愛知県立芸術大学の教授になっていることを知りました。

デザイナーの世界は、私と無縁の世界。彼がこのあと、一九八五年から平和ポスターの制作を始めたことも、八五年から九五年まで、その展示が各地で（外国でも）行われたことも、いや、七八枚、描きあげたあと、九七年に亡くなったことも（多発性ガン。この頃になって被爆者に多く出ていることがわかっていきます）、知りませんでした。もちろん、お会いしたこともあります。

初めてポスターのことを知ったのは、二〇〇五年、被爆六〇年の年に、三宅一生さんのギャラリーで、片岡さんの平和ポスター展が開かれた時です。新聞の小さなコラムで展示を知り、見に行った私は、ポスターに感動し、原爆を憎む思い、平和への願いに

打たれました。このとき、三宅一生さんが（彼は広島県立国泰寺高校の卒業生。学制が変わり、ややこしいのですが、片岡さんの後輩筋になります）、大学受験のころ、片岡さんに受験指導を受けた関係で、生涯交流があり、片岡さんの思いを良く知っており、この展示を企画されたことを知りました。（三宅さんは、オバマ・ブラハ声明を受けてのニューヨークタイムスへの投稿で、はじめて原爆のことを語ったように一般にはとられています、その前から、原爆のことはいろいろ考えておられたのです。）

片岡さんは、『原爆の子』以来、原爆のことを直接語ることは、ありませんでした。その長い沈黙を、「被爆者への差別を嫌ってだろう」と取る人もいますが、私は、そんなことではないと思います（私も、原爆の生き残りです。当日、学校を休んだために助かったのですが、幸運を素直に喜べず、いまだに心の傷をひきずっています）。

片岡さんのように、爆心地に近い現場にいながらの生存。それが十二、三歳の少年にとって、どんなに

辛いことだったか。クラスメートの命をすべて背負うような重圧のなかで、「生き残ることとは、なんであつたか」と、常に考えておられたのではないかと思います。彼の場合は、父、兄の死もありました。重い三十年余の沈黙のあと、平和ポスターの制作があつたと思います。

その三宅さんのギャラリーの展示のあと、展示は全くなく、日がたちました。二〇〇九年六月、「核兵器は廃絶できる」という集会在、東京・荒川であり、たまたまこの集会のシンポジウムに出ることになった私が、実行委員会で、「片岡脩の平和ポスター」のことを語ったところ、会場に展示場があるということで、急きょポスター展を開くことができました。そこで反響があつたので、十一月十五日の「九条フェスタ」展示となりました。いずれも、実行委員会の木瀬慶子さんはじめ、皆さんのご協力があつてできたことで（個人で展示など、とてもできることではありません）、あつくお礼申し上げたい、と思います。しかし、「私の力ではここまで」という思いがあ

ります。「彼のポスターの展示を開いてくださるところはないか」、それを念じています。

（広島平和記念資料館に彼の平和ポスター78枚が全部寄贈されております。）

（ノンフィクションライター 関千枝子）

政権交代でくらしは？ 憲法は？

渡辺 治さんの講演会から――

渡辺治氏（一橋大学教授・「九条の会」事務局）の講演会は、二〇〇九年十一月十六日の午後、女性「九条の会」の憲法学習会として東京都消費生活センターで開催された。参加者は九四名。前もってFAXで送られた質問に加えて、会場からの質問も多く、会場は真剣に聞き入る人たちの熱気で溢れた。

なぜ民主党は勝利したのか

この夏の衆議院選挙では、民主党が三〇八議席をとり、政権が交代した。「自公は潰したいが、共産

党や社民党に入れても、小選挙区では当選しない。

確実に票の取れる民主党に入れば、少しは変わるのではないかと考えて、民主党に入れる人が多かった結果だ。

自民党離れの原因は、

①構造改革の矛盾の爆発。この十年間で、五百万人が解雇され、五百万人が非正規労働者になった。

○八年には多くの非正規労働者が派遣切りにあつて職を失い、路上に溢れた。貧困と格差が増大し、毎年三万人を上回る自殺者や、何人もの餓死者を出し、犯罪が増加した。こういう形で構造改革の矛盾が劇的に爆発した。マスメディアが「年越し派遣村」を大きく取り上げたことで、国民の間に「もう自公の構造改革は止めさせなければ」という気持ちが高まった。

②〈九条の会〉の運動が全国に広がり、七〇〇〇を越す「会」が生まれたこと。地方の市町村長の首長が〈首長・九条の会〉を結成するなど、保守派の自衛隊賛成者たちも、「自衛隊を海外に派兵する改憲には

反対する」として運動に参加するようになった。

○八年四月の世論調査では、改憲反対の意見が、賛成の意見を上回った。

③民主党の政策転換。今まで構造改革を推進すると言っていた民主党が反構造改革に変わった。子ども手当での創出、後期高齢者医療制度の廃止、高校授業料の無償化、農家個別保障制度という形で、構造改革に苦しむ地方や、子育て家庭への支援を、マニフェストに盛り込んだことが大きい。

今後、民主党はどう動く？

民主党は、三つの構成部分からなっている。

頭：執行部。この人たちは、自分たちが「構造改革を変えてもらいたい」という声によって政権を取れたことを十分に自覚している。護憲の政党になってもらいたいということも自覚している。だから、普天間の問題でも揺れる。しかし、財界とアメリカの圧倒的な圧力のもとで、鳩山さんは結局、国民の意思を踏みにじらざるを得ないだろう。それは、本当

に日米同盟をやめ、本当に構造改革をやめて、日本の経済と政治を立て直す自信がないからだ。

胴体…小沢さんを中心にした多数派で、今まで、



渡辺治氏のお心こもったお話に一同聴き入った

自民党を何十年と支持してきたけれど、もう支持できないという、地方の財界、医師会、農協、地場産業の人たちを民主党に総取りしている。小沢さんは窓口を一本化して、陳情は全部小沢幹事長の元に集中させる。自民党と官僚への接触禁止、医師会や農協は議員との接触禁止、全部幹事長室を通すとしている。九州の知事たちは、自民党支持から転向して、民主党の小沢幹事長の元にくる。九州新幹線の駅を、自分のところを持つてくるためだ。

手足…多くの中堅の真面目な議員たちは、「マニフェストを実現したい。福祉の政治を実現したい」と考える。そして国民の支持を受ける。しかし、彼らは党の中では力を持たない。

このように、「頭」は右に、「胴体」は後に、「手足」は左に、という形で今後の民主党政権は動くだろう。左に行くのか、後に行くのか、右に行くのか。

それは、財界やアメリカが勝つか、我々の運動が勝つかだ。私たちの力が、中堅議員を通じて、「頭」の人たちに対しても、外から圧力を加えることによ

って変わる可能性がある。

改憲問題はどうかなる？

民主党は、護憲派の力のおかげで当選できたことを充分知っているから、改憲を言えばどうかなるかは承知している。明文改憲は、おそらくないだろう。

今年六月の通常国会で、自民党は「衆院憲法審査会規定法」を強行採決した。民主党は、初めは賛成だったのだが反対した。「改憲手続き法」も自民党と共同提案をすることで行っていたが、運動の力によって、反対せざるをえなかった。

しかし、アメリカの圧力は非常に強いので、解釈改憲の道を選んで、自衛隊を派兵させる可能性はある。米軍再編もアメリカ帝国の世界戦略の問題だから絶対に引かない。鳩山さんは粘ってはいるけれども、結局は、沖縄の普天間基地の「移転」を認め、米軍再編を、強行するだろう。

よほどの運動をしない限り、これは、必ずやってくる。

私たちのやるべきこと

①「アフガンへの自衛隊派遣絶対反対」「普天間移転は国外へ」と強く言っていこう。

方法は、いくつもある。ひとつはメールやFAX作戦。民主党は、自民党の議員よりは、はるかに聞く耳を持っている。民主党に対して声をあげることが彼らに勇気を与えることになるのだから。

②改憲を阻止する運動から、実現するための運動に。「核の使用を完全に禁止する」、少なくとも「核兵器の先制使用は、しない」と約束させる。

これがあつて、はじめて北朝鮮に対して、圧力を加えることができる。

六か国の中でそれができるのは、憲法九条を持つ日本だけだ。鳩山さんの言う「東アジア共同体」を実現するには、東アジアの平和保障がなければいけない。これは、「九条を実現すること」であり、私たちはその方向に前進する必要がある。

③観客から主人公になろう。

私たちが観客になっている限り、「民主党に対する第二歩に向けての私たちの運動」を起こすことは、できない。「私たち一人ひとりが主人公になる時代をつくっていくこと」が、憲法を実現するための、大きな力になる。

（女性「九条の会」世話人 小沼稜子^{いづこ}）

このすばらしきもの――

〈憲法ミュージカル〉2009年

「むつごろう・ラブソディ」を応援して

若い弁護士たちの危機感が生んだ

憲法ミュージカル「キジムナー」

二〇〇七年五月、憲法ミュージカル「キジムナー」（立川市民会館）を観た。「しろうと百人の舞台だなんて、無理でしょう。でも、沖縄戦がテーマだから、おつきあいに見なければ」と思いながら……。

ところが会場へ着いて驚いた。観客席は若者たちで溢れているではないか！〈九条の会・あきしま〉

の催し物は、いつも高齢者ばかり。どうしたら、若い人たちに参加してもらえるかが悩みの種だった。

幕が開き、さらに驚いた。幼児、小中学生、高校生、青年、中年、高齢者、百人が、舞台いっぱいに歌い踊り、演じている。うねり踊る渦の先頭は、なんと、車椅子の身障者だ。白いかわいいパラソルを、高く旗のようにかざして自在に走り、リードする。一人ひとりが輝いている。その懸命さ、熱気溢れる舞台に圧倒された。涙が溢れ、止まらなかった。物語性は、今ひとつ弱いのだが。

――この〈憲法ミュージカル〉は、三多摩の若い弁護士たちが憲法の窮状を憂い、幾晩もお酒を酌み交わしながら話し合った企画だという。

「憲法を多くの人と一緒に、できるだけ楽しく考え学ぶ市民ミュージカル」をやってみようと、埼玉や山梨県で市民ミュージカルを手がけてきた田中暢氏に脚本・演出を依頼した。応募して集まった百人の市民と、テーマについての学習や練習を一五〇時間

積み上げて、創り上げた舞台だった。

フィリピンの元日本軍慰安婦の

感動的な生涯「ロラ・マシン物語」

二〇〇八年は「ロラ・マシン物語」、十三歳で日本軍に拉致・監禁され、三年間も日本軍の「慰安婦」にされていた、実在のフィリピン女性、トマサ・サリノグ（愛称ロラ・マシン）さんが主人公。

拉致される際、救おうと抵抗した父親は、目の前で日本刀で切り殺された。日本の敗戦で解放されたが、トマサさんは身も心もボロボロ、村人の目も冷たい。心を寄せてくる男性が現れるが、彼女の心の傷は、深く、受け入れることができない。

舞台の上手で愛を訴える男性、下手では女性の踊り手が、主人公の心を身体表現する。舞台の中央で絶望の淵にのた打ち回る主人公を、天使の扮装をした三歳の女の子が片隅に座り、見守っている……。暗く重たいテーマを象徴的な表現で美しく形象するこの演出は、実に見事だった。

どん底の主人公を救ったのは、母の形見のミシンだった。

両親を日本軍に殺された姪や甥たちを養わねばならない。自分も、生きてゆかねばならない。

ミシンの仕事で、主人公は、明るく立ち直っていく。戦争孤児を大勢引き取り、共に生きていくのだ。日本軍によって、残虐に踏みにじられながら力強く生きたトマサさんの生涯は、感動的で鮮烈な物語性を持っている。

出演者百人の群舞や合唱、演技の熱気は、観客を圧倒し、感動の涙、涙、であった。こんな素晴らしい憲法ミュージカルのために、少しでも役に立てたら、と思った。

トマサさんは、日本軍の「慰安婦」にされた他の女性たち八人と共に来日し、日本政府を訴えたが、安倍政権下の裁判所は「強制性はなかった」と却下、上演の前年、七八歳で亡くなられた。ここでも戦争は、まだ終わっていないのだ。

国の公共事業の無慘不毛を衝く

「むつごろう・ラブソディ」

二〇〇九年は「むつごろう・ラブソディ」——ちらしには、次のように書かれていた。

「九州の宝の海、有明海。その有明海の子宮と言われ、生き物の生まれ出づる場所だった諫早湾の干潟。

一九九七年四月十四日——二九三枚のギロチンが諫早湾奥部を閉め切り、有明海は死の海へ。

タイラギも、海苔も、アサリも獲れなくなつた漁師たちは、国を訴えた。二〇〇八年六月、佐賀地裁は開門を命じた。だが、その判決を不服として、開門を拒み続ける国側。今も苦しみ続ける漁師たち。そして生き物たち。干拓は誰のため、何のために……。

あの日から十年以上経つた今、ムツゴロウは語る。海と人、生命の物語を。——国の公共事業が地元の人びとの生活を脅かし翻弄させる愚行だったことを訴えたミュージカルだ。

十一月七日、昭島公演を皮切りに、バルテノン多摩

十五日、飯能二一日、武蔵野二三日、立川二九日と、昼夜二回公演、計六回公演。私は昭島公演を、〈九条の会〉の仲間と応援することになった。

まず出演者の募集から始まつた。夜になると若者たちがストリートダンスに興じている市民会館前の広場に出かけ、募集のチラシを配り、誘つてみた。みな舞台で踊れることに関心を示すが、四か月一五〇時間の練習の話になると、(土日は仕事だ、アルバイトしなくては生きていけない、受験だから、だめ)とあきらめる。一万円の稽古費用も、無理だという。近くの児童館にも若者が集まるが、そこでも同じ反応。格差社会の兆候なのだろうか。児童館にボスターの掲示をお願いしたが、「参加費のかかるものは掲示しない」と断られた。昭島市と市教育委員会の後援にもかかわらず。夜な夜な薄暗い広場に集まりダンスに興じる、あの若者たちに憲法ミュージカルの心を届けられなかったことが悔やまれる。だが、実行委員や、前回出演した方がたの力で、九〇人の出演者が集まり、七月から練習が開始された。

ミュージカルの持つ優れた教育性

合宿練習も終わった十月末、市内の、初出演者、湯川あきさんから、手紙を頂いた。

「七月から始まった練習。夏の暑さの中は、冷房のない体育館の練習に堪えました。今回のミュージカルは海の生き物たちを演じる作品、長いこと、シャンソンを歌ってきた私にとって、『自分を捨て、干潟の生き物になれ』と言う演出家の言葉に、プライドが頭をよぎって、涙が流れましたが、練習を重ねるごとに、出演者九〇人と気持ちを合わせ、歌い踊れることに喜びを感じるようになりました。」

この作品を成功させることは、有明海の自然を守っていただくだけでなく、私たちの生きる権利に繋がっていくことだと、私の意識も、大きく変わってきています。

このミュージカルには、六歳から七九歳の老若男女が参加しています。私(六一歳)より年齢の高い人も、大変エネルギーですが、小さい子どもたち

も、長時間の練習にも、ぐずったり泣いたりせず、演出の先生のアドバイスに一所懸命ついて、生き生きと演じています。若い方たちも、有明海の現状、漁民の苦しみを知ること、踊りも演技も、真に迫ってきました。私は、こうした子どもたちや若者に逞しさを感じ、日本の将来を託したいと思います。ですから、どの会場も満席にして、成功裡に終わらせ、子どもたちや若者が、夢と自信を持って、さらに逞しく成長して欲しいと願っております。」

憲法ミュージカルの持つ優れた教育性を、この手紙に思った。出演者の一人一人が舞台で輝きだす秘密が理解できた。優れた脚本、演出、優れた指導者の力であることは言うまでもない。指導者と集団の響きあう舞台を私たちは観せていただいたのだらう。出演者たちの熱意に動かされ、当日は、満員の観客で埋まった。若い弁護士さんたちの骨身を削った活動にも、敬服した。最後にチラシに載った映画監督、山田洋次さんの応援の言葉を紹介しよう。

「必ず成功する 老いも若きも関係なく、百人の

色とりどりの、お互いに初対面の市民たちが、憲法を守ろうというテーマのもとに集まって、ミュージカルという、かなり複雑で面倒な舞台を作り上げてゆく、その楽しい大混乱と大騒ぎのプロセスを想像すると、ほくは、なんだか胸が熱くなるのです。

「LIVEー 憲法ミュージカル2009」は、必ず成功するし、また成功させなければなりません。大げさな言い方をすれば、それは、ほくたちの国の希望につながるような気がするからです。

十一月の初日が、今から待ち遠しいです。」

一月開始。

素晴らしい講師陣による公開講座

「くらしと憲法」にどうぞ！

「九条の会・あきしま」では、憲法がくらしに生きづくように、下記のような公開講座（無料）を企画運営します。この魅力的な講師陣による講座を、覗きにきてください。

「九条の会・あきしま」代表堀美保子

会場 公民館 3F 集会室

時間 午後2時～4時

日 程	内 容	講 師	
1月31日(日)	子どもの権利 ～教育を受ける権利と憲法～	田中 孝彦さん	都留文科大学教授
2月7日(日)	危機の中でこそ九条の思想を	小森 陽一さん	東京大学教授
2月21日(日)	構造改革と格差社会 ～生存権をめぐる～	やんべ 山家 悠紀夫さん	暮らしと経済研究室主宰
2月28日(日)	平和と基地を考える ～変貌する「横田基地」～	ひびき 山口 響さん	ピープルズ・プラン 研究所事務局
3月7日(日)	憲法とメディア	みょうちん 明珍 美紀さん	毎日新聞記者

参加の申し込みは公民館へ

※参加費は無料です

昭島市公民館

042(544)1407

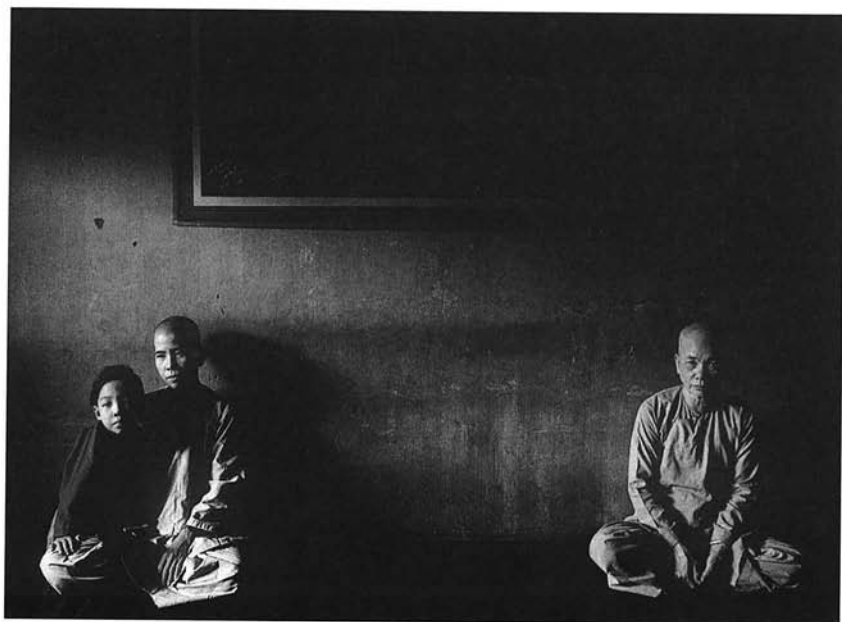
『花はどこへいった』と グレッグ・デιβイスの写真展

——『ベトナムへの視線』

十一月二日から十二月五日まで、早稲田大学とDays Japan共催の、フォトジャーナリズム・フェスティバルが、早稲田大学において開催されました。このイベントの皮切りに、グレッグ・デιβイスの写真展「ベトナムへの視線」(Greg's moments of life: Vietnam)が、映画『花はどこへいった』(坂田雅子監督)関連企画として、九月二日から十月十日まで、早稲田ギャラリーで開催され、好評を博しました。

グレッグ・デιβイスは、映画『花はどこへいった』の中核となる人物。かつ監督の夫で、彼が撮影した一九八五年から二〇〇二年にかけてのベトナムの写真二九点が展示され、戦争の傷跡から立ち直るこの国の歩みの一部が、かいまみられます。

展示作品のうち五点は、フェスティバル開催中も展示されています。



「ベトナムの尼寺にて」 (c) Greg Davis

写真展によせて

グレッグ・デビスは、一九六七年、十九歳の時に、米軍兵士としてベトナムに行きました。純粋で無垢だった少年は、ベトナムでの三年間で、大人になり、自分の国、アメリカに、大きな不信感を抱くようになりました。それが、彼をフォトジャーナリストの道に導き、五四歳で枯れ葉剤の影響と思われる病で急逝するまでの三〇余年を、アジアで過ごすことになりました。ベトナムは、彼の原点だった、とも言えるでしょう。

一九八五年から二〇〇二年まで、まるで戦争の悪夢を洗い流すかのように、彼はベトナムを何度も訪れ、戦後の傷から立ち直ろうとする人びとを記録してきました。

『グレッグは、もう私たちと共にいないが、彼のビジョンは、いつまでも生き続けるだろう』

——盟友、フィリップ・ジョーンズ・ブルグリーフイス

(一九三六—二〇〇八)の寄せた追悼の言葉です。

グレッグの死因と思われる枯れ葉剤とその被害が今も続くベトナムでの、被害者を追ったドキュメンタリー「花はどこへいった」は、十二月四日より早稲田大学、小野講堂で、『写真から映像へ』と題する映画・講演会の一環として上映されました。

(ドキュメンタリー映画監督 坂田雅子)

第一五回平和・協同ジャーナリスト基金賞を贈呈 太田昌克氏ら八人と二団体へ

平和・協同ジャーナリスト基金は、二〇〇九年十二月五日、東京・新宿区の日本青年館で、第一五回平和・協同ジャーナリスト基金賞の贈呈式を行なった。

この基金は、反戦、平和、反核、協同・連帯、人権擁護などに関する報道に寄与したジャーナリストらを顕彰することを目的として、一九九五年に、マスメディア、市民運動、文化活動などの関係者や一般のサラリーマンらによって設立された。

代表委員は、歴史家・色川大吉、慶應大学名誉教授・白井厚、元日本生活協同組合連合会会長・竹本成徳、ジャーナリスト・田畑光永、元日本弁護士連合会、会長・中坊公平の各氏ら七人。基金運営にかかる費用は、市民からの寄金でまかなわれている。

年一回、「平和」「協同」に関する優れた作品を発表したジャーナリストらに、基金賞を贈呈しており、今年度は一五回目。六五点(うち映像関係は二五点)の応募、推薦があつたが、審査委員による選考の結果、次の八人と一団体が選ばれた。

◆基金賞(大賞、一点)

★共同通信社・太田昌克編集委員兼論説委員の「核持ち込み密約は外務官僚が管理——歴代四次官が証言」など、核密約に関する一連の報道

◆奨励賞(四点)

★ノンフィクションライター、高瀬毅氏の「ナガサキ消えたもうひとつの『原爆ドーム』」(平凡社)
★中京テレビ放送制作の「法服の枷 沈黙を破った裁判官たち」(NNNDキュメント'09で放映)

★前全国被爆二世団体連絡協議会会長・平野仲人、長崎新聞記者・高比良由紀、共同通信記者・野崎亮三氏の「海に向こうの被爆者たち」(八月書館)
★沖縄タイムス・屋良朝博論説委員の「砂上の同盟——米軍再編が明かすウソ——」(沖縄タイムス社)

◆映像部門審査委員大賞(一点)

★川本昭人氏(広島市)監督・撮影の「妻の貌」
◆荒井なみ子賞(一点)

★介護福祉士、白崎朝子さんの「介護派遣労働の現場から」(『世界』〇八年九月号)など介護労働に関する一連の執筆活動

審査には、鎌倉悦男(プロデューサー・ディレクター)、坪井主税(札幌学院大学教授)、原一男(映画監督)、前田哲男(軍事評論家)、山谷哲夫(ドキュメンタリー監督)、由井晶子(元沖縄タイムス編集局長)の六氏があたった。

大賞にあたる基金賞には、共同通信社・太田昌克編集委員兼論説委員の「核持ち込み密約は、外務官僚が管理——歴代四次官が証言」など、核密約に関する

一連の報道が、審査委員の全員一致で選ばれた。

一九六〇年に日米安保条約が改定された際、日本政府が米国の核搭載艦船の日本寄港、あるいは日本の領海通過を認める（いわゆる核持ち込み）という密約を結んだのではないかと言われてきたが、歴代の日本政府は、これを強く否定してきた。

が、〇九年六月一日付の地方紙は、これが全くの偽りで、密約の文書を外務官僚が管理してきたことを、歴代の四外務次官が証言した、と伝えた。これは太田氏のスクープで、これを機に、各紙による核密約に肉迫する報道が相次ぎ、いまや外相も核密約を認めざるを得ない事態となり、過去の、安保をめぐる日米交渉の全貌が明らかにされようとしている。政界、マスコミ界に、大きな衝撃を与えた画期的なニュースだった。

「固く口を閉ざしてきた外務官僚に、ついに口を開かせた粘り強い取材に敬服する」「米国の公文書を読み解いて密約の裏付けをとっているのも評価で

きる」と、賞賛の声が相次いだ。

活字部門では、三点が奨励賞に選ばれた。まず、高瀬毅氏の「ナガサキ 消えたもうひとつの『原爆ドーム』」は、「広島には原爆ドームがあるが、長崎にはそれに相当するものがない。残っていれば原爆ドームと並んで被爆のシンボルになりえた浦上天主堂の廃墟は、なぜ残らなかったのか」という疑問に応えた力作。被爆した浦上天主堂はどうして撤去されてしまったのかという謎の解明のために、高瀬氏は米国にまで調査に出かける。結局、同書は、被爆の痕跡を残しなかった米国当局の意向が働いていたのでは、と示唆しているが、選考委では「実に面白い」「米国まで出かけるなど、実に丹念な取材を積み重ねている」とされた。

前全国被爆二世団体連絡協議会会長・平野伸人、長崎新聞記者・高比良由紀、共同通信記者・野崎亮三氏による「海に向かうの被爆者たち」は、在外被爆者の現状についてのレポート。選考委では「これまでも、国別の被爆者に関するレポートはあったが、

在外被爆者の全容についてまとめたレポートは、初めてではないか。とても貴重な資料で、三氏の地道な努力を高く評価したい」「これに目を通すと、在外被爆者は今なお三〇数カ国で四、二七五人にのぼる。もう『日本は唯一の被爆国』などと言えなくなる」という声があがった。

屋良朝博氏の「砂上の同盟——米軍再編が明かすウソ——」は、今日、米軍普天間基地の辺野古移設問題に象徴される米軍再編とは、いかなるものかを解明した意欲作。「沖縄になぜ米軍基地が集中しているのか」「米軍にとって、沖縄はほんとうに軍事的な最適地、戦略的な位置なのか」といった視点から、米軍再編の実態を明らかにし、沖縄に米軍基地を置く必要はない、との方向を打ち出している。「沖縄の基地問題を考える上で示唆に富む著書」とされた。

映像部門では、基金賞の該当作はなかったが、川本昭人氏が監督、撮影したドキュメンタリー映画「妻の貌」に映像部門審査委員大賞を贈ることになった。映像部門のナンバーワン。全体でも大賞に次ぐ準グ

ランプリに相当するという位置づけ。

広島在住の川本氏は、一九五八年の長男誕生を機に8ミリカメラでの撮影を始めたのが創作活動の第一歩で、これまで「家族」「原爆」などをテーマとする作品を発表してきた。「妻の貌」は、原爆症と宣告され、死と向き合っている妻を半世紀にわたって撮り続けた作品だ。

選考委では「五〇年という時間の厚みを感じさせる作品だ」「家族というものが見事に記録されている」「原爆がもたらした惨禍を伝えている」とされた。

この部門の奨励賞は、中京テレビ放送制作の「法服の枷 沈黙を破った裁判官たち」一本のみ。職業裁判官の世界は、昔からベールに包まれており、ほとんど語られることはないが、この作品はその裁判官の世界に肉迫したテレビドキュメンタリー。選考委では「裁判所という組織の中で出世しようとすれば、上司に気に入られなければならないようだ。また、自衛隊違憲判決など出すと、地方に飛ばされるなど、冷や飯を食わせられるようだ。そうした一面をリアルに伝えている」「元裁判官たちの証言なの

で説得力がある」とされた。

荒井なみ子賞は、元・生協役員の荒井なみ子さんからの寄金を基に七年前に創設され、今回が四回目の授賞だった。女性のジャーナリスト、あるいは女性がかかわる問題をテーマとした作品を対象としているが今年は、白崎朝子さんの、「介護派遣労働の現場から」(『世界』〇八年九月号)など、介護労働に関する一連の執筆活動が選ばれた。

白崎さんは介護福祉士である。いわば介護労働の実態を身を以て体験してきたわけだが、その実態は圧倒的な低賃金、神経をすり減らす長時間労働という。白崎さんは、こうした過酷な介護労働を自らの経験を通じて告発しており、このままでは介護労働に就く人がいないとし、まず介護労働者の人権擁護を、と訴える。介護が社会的な大問題になっている折から、介護問題に一石を投ずる執筆活動と評価された。

(平和・協同ジャーナリスト基金代表運営委員 岩垂弘)

「戦争と女性の人権博物館」建設にご協力を

韓国ソウルの西大門独立公園内に計画されている「戦争と女性の人権博物館」建設を支援するため、〇九年二月、「戦争と女性の人権博物館(WHR)日本建設委員会」が結成された。

WHR日本建設委は、募金目標額を一億円と定め、今年一年、様々な取り組みを行なって来た。とりわけ、〇九年九月～十二月にかけて連続学習会「被害国で『慰安婦』問題を伝えることの意義と難しさ」を開催した。この学習会は、三月八日にソウルで行われた博物館起工式に参加した際、殉国先烈遺功会が建設反対のビラまきをする姿を目の当たりにした衝撃から、企画したものだった。

博物館が計画されている西大門独立公園は、植民地支配期に日本帝国主義に抗して闘った独立の志士らが投獄された、西大門刑務所跡に造成された公園である。彼ら、独立運動関係団体(独立運動闘士の

遺族らで構成される団体」は、「民族の聖地」である西大門独立公園内に「慰安婦」博物館を建てることは、「殉国先烈に対する名誉毀損」であり、日本人に「もの笑いの種を提供する」ものだ、と主張する。さらに、「青少年に、『日帝による受難のみ受けた民族』という、歪曲された歴史認識を植え付ける」という、韓国版「自虐史観」ともいえるべき論をはっているのである。

それは、日本軍「慰安婦」問題を記憶し伝えようとする試みが、加害国の日本で抵抗を受けるだけでなく、被害国においても未だ厳しい営みであることを示していた。私たちは、加害国で運動することの難しさにはばかりとらわれていた自らを反省し、被害女性たちが母国で置かれている状況、どのような「視線」が彼女たちに向けられているのかについて、改めて「知る」必要がある、と思ったのである。

そこで、第一回は韓国。二回目はwamの東ティモール展を、現地語（ティトン語）に翻訳して現地でのパネル展示を実現させた東ティモール。三回目は武郷展が何度も延期になった中国、と、テーマを決めた。

日本軍「慰安婦」問題の展示が困難にぶち当たる事実から、被害者たちの現状を探ろうという試みである。

第一回は九月十九日、東京ウイメンズプラザで、

講師は、三年半の韓国滞在中に、挺身協の「戦争と女性の人権センター」で活動した金富子^{キムフシヤ}さん（東京外国語大学教員・VAWWNETジャパン運営委員）。「独立運動関連団体の主張には、男性主義的な支配を強化したい欲望が潜んでいる」という、ナショナリズムの中にあるセクシズムが鋭く指摘された。

第二回は十月十七日、東京・文京区民センターで、講師は、東ティモールの人権問題に取り組んで来た古沢希代子さん（東京女子大学教員・東ティモール全国協議会）から、現地調査とパネル展開催をめぐる物理的・政治的困難について話を聞いた。

長い占領時代の終焉を迎えて、やっと性的被害の調査が開始できたこと、日本占領時代とインドネシア占領時代の戦時性暴力の共通点などが指摘された。そして、性的奉仕が、政治的地位の高い父親や夫を持つ女性たちの（ジェンダー役割）として強要さ

れたこと。この性的支配は、人格的支配と混同して理解され、被害者への社会的偏見が形作られたということが明らかにされた。

一方、現地パネル展の成果として、学生を中心とする若い世代が、歴史に関心をもち、被害女性に心を寄せはじめており、この積み重ねはティモール人社会における被害女性の名誉回復、民主主義の構築に繋がるのでは、という話には救われた。

第三回は十二月五日、明治大学リバティータワーで、講師は石田米子さん（岡山大学名誉教授・武郷展実行委員会共同代表）。中国の武郷展にむけて二年間に亘る企画と作業の末、一六六枚ものパネルを中国語で仕上げ、五月五日の開会式参加のため航空券まで手配していたのに、突然、現地から延期の連絡が入った。理由は今も定かではないという。ただ、「現地での円滑な開催のために、暫時延期にして欲しい」というメールが入っただけだったという。

準備の過程で、日本側は、このパネル展のタイトルの「日本軍性暴力パネル展」としていたが、中国

側が「第二次大戦期の日本軍の、女性に対する犯罪パネル展」と変更、「性暴力」という言葉を避けたところに、未だ「性暴力」に対する偏見があることが表れている。

結局は、学習会直前の十一月二日に武郷展は無事開催され、この学習会が、最初の報告会となった。

武郷展は「今も苦しんでいる被害女性たちとその家族が、少しでも生きやすい環境をつくる」ことを願って企画されたことが熱く語られた。

オープンの式典で、山西省の日本軍性暴力被害者女性たちは、家族と共に展示を観て喜びを頒ち合ったという。そして、家族の中には、最初から最後まで涙を拭きながら展示会場を回った人もいたという。

紆余曲折の末に実現した、このパネル展が、被害者を勇気づけ、その家族を励まし、この方たちが「少しでも生きやすい環境をつくる」ことに役立つものになったのだと思える内容のお話だった。パネル展は、二〇一〇年十一月一日まで開催。三月と八月にツアーを組むという。

「性暴力の被害者である」ということが、当事者とその家族にもたらす苦しみは計り知れないが、「彼女たちのたたかいが周囲の人びとを変え、社会の認識を変え、それがまたフィードバックされて、被害女性自らをさらに変える」という事実を、私たちは、日本軍性暴力被害者たちのたたかいから学び取って来た。

「戦争と女性の人権博物館」は、まさに、そのような被害者たちのたたかいの中から生まれた、彼女たちの願いであり、希望である。「生きた証しを残して」「二度と私たちのような被害者が生まれないようにして欲しい」という、日本軍「慰安婦」被害者たちの願いを叶えるために、○四年から、韓国挺身隊問題対策協議会が取り組みを開始した。

着工式から九か月が過ぎたが、未だ工事は始まっていない。理由は二つ。一つは、独立運動関連団体の反対にあったソウル市が、建築許可を出しておきながら、現在建っている売店の取り壊し許可を未だに出していないこと。最近も、着工式の時に貼りだしておいた寄付者名簿が切り裂かれ、敷地を示す杭

が、何者かによって抜き取られるという嫌がらせが続いている。もう一つは、募金が、十分に集まっていないことである。

現在までの日本での募金総額は約四〇〇万円。さらなる協力を切にお願いしたい。また、日本建設委は、女性人権博物館の展示内容を予告する内容のパネル「戦争と女性の人権国際展」を翻訳・再構成して製作し、貸出を開始した。「国際展」を開催して博物館建設への協力を拡大させる取り組みへの協力も、是非ともお願いしたい。問い合わせは以下に。

Email: whrmuseum@gmail.com

TEL&FAX 03-6324-5737

URL: <http://www.whrmuseum-jp.org>

〈郵便振替口座〉

【口座番号】 00170-6-266644

【口座名】 女性人権博物館

（戦争と女性の人権博物館（WHR））

日本建設委員会代表

ヤン・チャンジャ
梁澄子

あぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐら

裁判員候補者のクジに当たって

私は今、裁判員候補者となっている。

昨冬までは、酷く恐ろしい罰則付きの「裁判員制度」というものが、いよいよやってくる。嫌な世の中になってきたものだ。でも、クジに当たることはあるまい。これまでどおり「ちよつぷり反戦運動を」の日常を崩したくない。気にはなるが係わらないでおこう、と、考えていた。

そんな折である。通知が届いたのは。その一式を読んだの感想は、「この制度は思想調査ではないのか」であつた。外的拒否理由のない者だけを集めてなされる、選任過程上の質問が、思想調査的になるのは自明である。殊に拒否

理由を言わねばならない者にとつては、思想調査されているに等しいと思われるからだ。

また、氣になつてゐた罰則を調べて驚いてしまった。少し言い方を変えてみると、「呼び出し前の質問表には、嘘を書くでない。違反あらば五〇万円以下の罰金と三〇万円以下の過料を取る。呼び出しには応じること。拒否するなら十万円以下の過料を取る。選任過程上行なう質問への返答も、当然のことながら、真でなければ五〇万円以下の罰金と三〇万円以下の過料を。また、返答拒否には三〇万円以下の過料を取る。宣誓拒否も許さない。これには十万円以下の過料を取る。裁判員しか知り得ない秘密は漏らしてはならない、

墓場まで持つて行くこと。その禁を侵せば六か月以下の懲役、または五〇万円以下の罰金を取る」となるだろうか。

何故にこのような罰則の下で、裁判員を引き受けねばならないのか。私の頭の中で、有無を言わせぬ水戸黄門の印籠が浮かんでいた。

この制度を「民主主義の発展の証」と捉える人も多いようだが、私は、この罰則のグロテスクさの中に、その逆である後退を見ている。また、その本質を覗かせてもいると。

多くの市民が、このような制度を望んでいただろうか。「罰則付きの権利」など知らない！

というわけで、「裁判員制度反対！」の運動の中にも身を置くことになり、

以前より少し忙しい日々となつてしまつた。

ところで、先日の子葉地裁での「裁判員裁判」の初日（九月一四日）を傍聴してきたので、その折の模様を記したい。その前にお断りしておく。自分は、できれば呼び出しの段階で拒否したい、と考えているので、傍聴も望んではいなかった。たまたま傍聴する機会を得た。いわば、しぶしぶの傍聴で、批判的な目を持つて臨んだわけではない。それ故、ここに記すのは「結構多くの人が、あの折、あるいはあの後、抱いてたであろう印象と疑問ではないか」と思ったが……。

このとき裁かれた事件は、千葉県内で女性の下着を盗んだ男（四九歳）が、捕らえようとした消防士（男性三三歳）の腕に噛みついて怪我を負わせ、車を発進させたというもの。

壇上に居並ぶのは、裁判官三名と裁判員六名、その後部両端に、合わせて三名の補充員。検事席には六名の、合計十八名。これでは被告人は晒し者だ。初犯者は、怖じけづいてしまうのでは、と思つた。

両壁面からの、65インチの巨大なモニターテレビは、傍聴者にとても見易く据えられてあつて、そこに、裁判を進めていく上での検察側の行為が、あるいは弁護側の行為が、法律用語に解説をつけて示される。また、用意された図面上に逃走経路を被告人が書き込んでいくと、モニターテレビには、それが図面上を動く線となつて表現されたり、怪我の状態の写真を写し出したりと、わかりやすさを印象づけていた。が、このモニターテレビは「わかりやすくなつた」とだけで片付けられないものを持つていると思つた。文字は、頭の

中ですぐに消えていくが、映像は、そうはいかない。なかでも、怪我の映像は長く残ることがわかつた。被害状況を伝える側である検察に、有利に働きはしないだろうかと危惧した。

検察の印象操作は、計算しつくされていたようだ。これから記すことは、すべて「今になつてわかつた」ことである。

話をモニターテレビに戻すが、写真は被写体を撮るときの背景や配置、角度によつて、例えば、人物なら、細め、太め、低め、高め、と、いかようにも撮れるように、モニターテレビ上の写真は、そこに意図が内包されているものを、持つてきているのだ。

このことは、映像を駆使した検察のトリックに気付いて知らされた。が、これは、検察、弁護側、双方共に行われていることだそう。

あの日、弁護人は、被告人の身長、体重を告げ、検事に被害者（消防士）のそれを問うた。すると、うろたえ、書類を探す振りをして答えず、催促されて、漸く身長（一七五センチ）は教えたものの、体重については「それはこの先で……」と明らかにしなかった。この件は、その後、「体格の差はこの程度です」と、写真を写し出して終わっている。あの時の強い違和感の謎が解けた。その写真に、作為があつたのだ。被害者は、巨漢とも言える体躯であることを極力印象付けまいとする細工だった、と。

詳細は記せない（証人がいない）が、体重を教えないこと自体が不自然なことからして、あながち私の記憶違いでないことは、わかつていただけたと思う。また、この印象操作は、検事の被告人、審問時の言動にも表れていたと思う。

瘦身の検事は、「自分の身長は一七六センチだから、当夜は、こんな具合だったと思うが……」と、体位を示した。これには被害者を自分と同等の体格と思わせる意図があつたと考える。その時、私は、体位だけでは当夜をイメージできず、イライラして、「もう被害者の体躯のことを考えるのはよそう」と思つたからである。

ただし、裁判員に渡された資料には、体重が明記されていたかもしれない。また、この印象操作が判決に及ぼした影響については、私にはもちろんわからないことを、付記しておく。

この「裁判員制度」、市民の多くが嫌がつているなか、メディアは、こぞって推進役を務めてきた。ほとんど強制的に出頭させるなど、その罰則の異常さを問題にもせずして、「司法にも市民参加の場ができた」と喧伝してい

る。東京地裁での「裁判員裁判」第一号時の報道量の多さには驚いた。いくら施行後、初めてとはいえ……。

これまでの報道を目にしてきて、最近、気になっていることがある。判決が出るたび、「市民感覚が反映された結果」だと書きたてる。また、裁判長は、裁判員を持ち上げる。その度に、裁判官の存在は薄れる。裁判員を隠れみのにして、司法の中で重罰化が進んでいるような気がするのだが……。果たして裁判官の誘導は本当にないのだろうか。記者会見時の裁判員の言として「裁判官は、話が迷走した時、アドバイスをくれた」「裁判官のアドバイスで……」というのがあつたが、何もわからない者にとつては、アドバイスと誘導とは、同じ域内ではないか。私の考え過ぎだろうか。

「裁判員制度反対！」の幟旗がみえ

なくなつたその時、辞退を認めまいとする締めつけは厳しくなっていることだろう。国家はその時を待っているに違いない。その時、私たちは一歩進めたことになる「物言えない社会」へと。

反対とまで思っていないなら「一緒にやれない」などと言わず、疑問のある人には是非この反対運動に加わって欲しいと願っている。バラバラにやっていると、改善さえもおぼつかないと考えるのだが……。

最後に、最近ブログ上に引用されていたものだが、印象に残っているので、その一部分を記して、ペンを置きたい。

ナチス元幹部ヘルマン・ラウシュニグ著『「ヒトリスムの革命」より

ラウシュニグは言う。

まさに（注・ナチスにとつて）中心の根本的原則と見なされるべきは「市

民階級の愚昧と憶病さに対しては何をしてでも大丈夫だ」というものである（中略）。「典型的に市民的な態度とは、くり言を言いながらも、敢えて抵抗することもなく、一歩、一歩、退却していくことによって、そのつど残っている部署をいくらかでも確保できるのではないか、と考える態度」である。

（匿名希望）

321号を読んで

私は、この冊子を、ジュンク堂（池袋店）で購入しました。今日私たち女性があるのは、諸先輩方、一人ひとりが、積みあげてきてくださった労働力にあるのだと思いました。

私も二十代の頃、女性問題に関するセミナーや講演会に参加させていただきました。この冊子を読ませていただき、いろんなことを思い出しました。

「あこら」の存在を、早速、友人二人に話しますと、「そのような冊子があるとは、知らなかった」と言っておりましたが、女性の足跡をたどる冊子として、すばらしいものであるということを互いに認識しました。

（土肥慶子）

*

お変わりございませんか。

さて、七月十七日付朝日新聞の「検証昭和報道」の記事の冒頭「斎藤千代……」のお名前を拝見。思わず「ワツ」と声をあげました。嬉しかったです。よくぞ載せてくれた！と。

昭和六年生まれの私。「産めよ殖やせよ」のスローガン、しっかりと焼きついております。（当時一人っ子でしたが）歴史の激変、変遷の様、いつも胸に滾らせております。

とりあえず、「ワツ」と喜んだこと

をご報告します。(富山県 高木栄子)

*

ありがとうございます。全国から、切り抜きが、ぞくぞく送られてきて、びつくりしました。

「あごろ」に載る」のは(大変なこと)ではありませんが、「新聞に載る」のは、大変なことなのです。「悪事を働いたりしたら、もっと(大変なこと)になる」と、改めて自戒しました。

(斎藤千代)

3222号読みました

雨がざあざあ降りまして、やっと読めました。うれしかったです。

「いとしのエラ」送ってください。お身体大切に、お励みください。

(千葉県 桑原ちゑ子)

*

あごろ送付ありがとうございます。

皆様の志、ご活躍に、毎号、感動し、力をいただいております。感謝申しあげております。(茨城県 中沢玲子)

*

内容が盛り沢山で、未だ読み終えておりません。サーッと斜め読みは、しましたか……。

〈あごろメイト〉「誰でも科学力を開発できる」は、ゆつくりとかみしめながら読んでおります。

「裁判員制度 私はどう思う」に「ハタと困惑……早瀬展子さんが代弁して下さった感じです。(東京都 坂井桂子)

*

社会的弱者が生き辛い日本を、なんとかしたいものだと思います。皆様の活動に敬意を表します。

(東京都 碧海 波留美)

*

「間隔を置かずに発行する」のは(も

ちろん、いいことです)手間と労力が必要で、経費もかかります。私は、ハラハラしながら、いただいたお便りを読みました。(愛媛 吉村典子)

*

不平不満の渦巻く世の中ですが、次代を担う子どもたちの為に、少しでも希望のもてる世の中に！
変革の年です。頑張りましょう。

(岡山 河田房子)

*

どんな形であれ、発行し続けること。灯をともし続けることが、なにより大切だと思います。二〇〇九年度分の会費、送ります。がんばって下さい。

(沖縄 山内道美)

*

読みごたえがありますが、たしかに頁数が多く、重い。もう少し軽装でもいいですね。(静岡 竹内和恵)

*

ひとに対するやさしさを失った社会においては、誰も育ちません。一方、ものわかりのよい大人ばかりでは、わがままな子どもたちしか育ちません。『あごろ』には、やさしさときびしさが感じられて、毎回うれしく拝読しています。

(東京 高山 智)

*

残暑お見舞い申し上げます。

やりくり大変でしょうが、頑張ってください。良い記事を楽しみにしています。

(茨城 太田美恵)

*

世の中少しはよくなるとのんびりもしておられぬ状況が、一方で進んでいます。たとえば教育の新自由主義化。しかも市民のほうがなかなかそれに気づかない(横浜のつくる会教科書採択。横浜市民でがくせんとした人が多い)

ど) 厳しい状況。(東京 関千枝子)

*

九一歳、九三歳の二人の母の介護が始まりました。若い方が多く参加してくれたらいいですね。会費とカンパ、お送りします。(奈良 井上日磨美)

*

毎回、楽しみにしておりますので、ぜひ続いてほしく、少しばかりですが寄付させていただきます。

(松山 橋本泰子)

*

会費+カンパです。

裁判員制度の号、タイムリーですね。誌面の意見も分かれていましたが、私は、どちらかというと否定的な意見に賛成です。斎藤さんのご意見、とても納得できました。(東京 芦澤礼子)

*

みんなの広場「あごろ」を、心こめ

て支えて下さいますこと頭の下がる思いでいつも拝読しております。『あごろ』

の経済も、厳しいの一語。何の力にもなれず心苦しい限りです。三八歳の原点に返り、我が人生にムチ打っておりますが加齢というこの現実、くやしい限りです。政治も、世界の平和も、そして、わたしたちの幸せも、なんとかまっとうになりますよう祈って、カンパをお送りします。(名古屋 戸田順子)

*

年会費プラス寄付送金します。大変でしょうが「継続は力なり」です。灯を守っていきましよう!

(神奈川 緑川あつ子)

提灯行列をしたい!

八月末の総選挙。夜半から朝まで、徹夜をなさった方も多いと思います。「いつかこの日が来る!」と、自分を

励まし励まし、たたかって来た私たち。ついに奇跡が訪れましたね。

夜半、あちこちに電話をかけ、「提灯行列したいねー」同じ思いの電話も、たくさんかかってきました。

でも、考えてみたら、いま家に提灯のある人って、何人くらいでしょうね。

(東京 佐々木悦子)

NWECの重要性をアピールしよう

NWEC (国立女性教育会館) は、新政権による「財政洗い直し」の矢面の一つになり、神田館長が追求されているお姿が、テレビで強烈なイメージを与えました。蓮舂さんのような若い方には、NWECの意味が理解されていないのが残念でした。

NWECは、〈あごろ〉も参加した一九七五年の、第一回世界女性会議(メキシコ会議)での全世界の女性たちに

よる世界女性行動計画の一つ、「各国に女性運動の拠点となる会館をつくる」に基づいて、一九七六年に建設された大切な会館です。女性問題の資料は、国内・国外を問わず収集されており、安価に宿泊できる宿泊室もある、女性運動のメッカです。〈あごろ〉は、その最初の宿泊者として、〈あごろ全国会議〉を開き、深夜まで熱い議論をしました。

その折、初代館長の縫田睦子さんが、夜半、二時、三時まで懐中電灯を照らして全館を廻って安全を確認していらしたお姿が、今でも目の中に残っています。

しかし、その後のNWECの利用率が低いのは、開館当初から心配しており、「地の利が悪い」ことが主因ですよね。利用率を高めるために、〈あごろ〉も、できるだけ、研修会などを開かなければ、と反省しています。

東京から一時間半という立地条件は、たしかにハンディになっていますが、会館のメンテナンスは良く、資料も揃っており、宿泊室は清潔で、一泊するだけでも、都塵を洗い流す気分になります。今後は、「あごろ」の編集会議をこ

こで開くなどして、みんなで利用率を高めていきたいと痛感しました。

真相を理解していただくために、

「NWECが、自分たち女性にどんな役にたっているか」を民主党に知らせる運動が、各女性団体で始まったようです。〈あごろ〉からも文書を出しました。

(斎藤千代)

〈あごろ会員〉福島みずほさん、大臣に!

民主党がぐんぐん伸びるなかで、社民党は、なかなか伸びませんでした。政権交替で、福島みずほさんが大臣に。

次号の〈あごろメイト訪問〉は、福

島さんをお訪ねする予定です。インタビュール同行したい方は、至急、事務局にご連絡を！

(事務局)

「あごろ」は続刊つとほつと

「あごろ」は、会員の皆様にお送りするほか、東販・日販・地方小出版など、取次店を通して、書店にも出荷しています。「書店扱い」は、主として、大学、図書館などですから、出荷部数は会員の方に送る数の十分の程度ですが、先日、納品に行った折、窓口の方に、「あごろ」は、いい雑誌ですね。続刊は大変でしょうけど、ぜひ続けて下さい」と、声をかけられ、ウルツとしました。

帰ってその報告をしたら、事務局のみんなも、ウルツ……。未曾有の財政難で、「いつ終刊するか」の論議ばかりしている昨今ですが、ひととき

暑さを忘れて、胸の中は、あたたかいものでいっぱいになりました。(事務局)

〔編集後記〕

◆お金ーお金ーお金ー

やせる思いをしている毎日なのに、なぜか体重は増える一方。

全国の皆さまからの、やさしいお手紙やお電話で、心は、いつも暖かだからでしょう。感謝ー感激ー

「老いを考える」について、急なお願いでしたのに、お心こもる御原稿を、たくさん頂き、ただ感謝、感謝です。(千)

◆裁判員制度の改善に心血を注ぎ制度の根幹から検証しておられる五十嵐二葉弁護士から、裁判員裁判の実態に即した貴重な論考を頂きました。厳しいプロの視点から制度の現時点における問題点を鋭く指摘されています。

「会と催し」には、心うたれる沢山

の報告が寄せられました。市民運動の底力が実感され勇気が湧いてきます。

今号は〈あごろメイト〉全員の思いを収録した記念の号にと願ひながらも叶いませんでしたが、「老い」を思索した秀逸の御原稿に、さすがと感嘆！今年も、あとわずかになってしまいました。ひとつの区切りに恩師のかかわりでお手伝いするようになった「あごろ」を振り返ってみれば感慨一入です。これまでお導きいただいた〈あごろ〉の皆様をはじめ、背後で支え続けてくださった、岩垂弘氏、内田雅敏氏、牧梶郎氏そのほか、多くの方がたに心からの感謝を捧げます。

人は移り、世は移るこの時空の中で
「寒花晩節」を折りながら…。 (光)

今号が、越年発行になったため、「ご執筆いただいた方はじめ、関係の皆さまにご迷惑をおかけしたことを深くお詫びします。

「あごら」は、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――

「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

「BOC」の登録もどっこ……

一九六〇年に生まれた「BOC＝バンク・オブ・クリエイティビティ」は、「創造力の銀行」。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな「創造力」でも歓迎！ ただし、半年以上「あごら」会員の方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル
電話 03-3354-3941 (代表) FAX 03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com #たはboc@mb.infoweb.ne.jp
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/asora1/>

あごら 323号 老いを考える

- 編集 あごら新宿 ●発行 2009年12月20日 ●印刷 藤田印刷㈱
 - 発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル10F
 - TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com
 - 定価 本体2,200円＋税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部
-



9784893061805



1920036022007

ISBN978-4-89306-180-5

C0036 ¥2200E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体2,200円+税

平和と平等を追求する 『あごら』近刊シリーズ

〈女の壁〉にチャレンジした女たちⅡ

政権交代——変わるかニッポン

世界各国の女男平等は？

企画・編集・翻訳…

何でもご相談ください

創業1960年 —

女性専門職集団

BOC

各種プランニング

各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他

男女共同参画の

BOCシニアも

スタートしました。

ベテランの知恵と経験を

お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354-3941 FAX3354-9014

E-mail XLV05467@nifty.com

サイレントマイノリティのBOC出版